

四国八十八ヶ所み仏の歌

四国八十八ヶ所み仏の歌

## 序

私は讃岐の片田舎に生れ、お遍路の振る冴えた鈴の音で育った。成人し教師となって、遍路にも出かけた。或冬、早朝の寒稽古で一生徒が、奔馬性肺炎に罹った。私は仏の大慈大悲にすがって、お四国参りをして見舞に行く。定命が来たのか、夢となく現となく、極楽を見つつ息を引き取った。クラス全員が、遠い阿讃の山奥深く、野辺の送りをした。卒業の時は寺で回向して別れた。

遍路をしていると、尊い遍路に会うこともある。白峰寺の麓で、屋台車を引き、親子三人を載せた、七十才位の遍路に遇うた。この遍路は、足の不自由を癒すため、備中から四国に渡り、野宿しながら十回廻った。十一回目のお礼参りの際、ぜんごん宿をとった。その家の主人が、たまたま病人だったので、仏の慈悲を戴かせようと思ひ、重い屋台車を引いて高知からここまで来たのである。私はこの無償の愛情に、開眼された。

遍路をして思うことは、遍路には知識もいらぬ。身なりもいらぬ。

ただすなおな心、まるはだかの心さえ、持てばよい。金剛杖を頼りに、仏ごころのめざめるようにと、内を省りみ、父母先祖への、報恩と回向、ついでには、子孫の繁栄を願う、永遠の鑽仰ではないでしょうか。

さて、私は五十六才で定年になって、晴耕雨読の百姓となった。ところが、七十才になって、身の衰を感じかけ、百姓をびたりと止めた。次の歌は百姓中の歌の一部です。

わが上に 鳴きつつあがる 夕雲雀 黙々と一人 粃種を播く

妻が稗 抜き行く後に 抜き続けり 昼の苗代 日に煌きて

雨まぜに 疾風吹くまま ひたむきに 菱子の麦の 諸伏すあした

たたなはる 山脈燃えよ 野の鳥の 鳴きて止まざる 春来にけらし

明けば暮れ 暮るれば明るく この世かな 在るがままなる 安けさに居て

供出の 米俵つむ 猫車 白菊競ふ 我門を発つ



在り在りて 生き抜き来る 吾が一生 無為にして 今天地の春

七五三 藁さしわけて 注連なへば 我が指先の ころえて伸びず

畑中に 吾れ独り居て 旦旦と 麦の間打つ こと思ふなく

ひねもすを 雑木の稍 風鳴りて 我は菱子の 麦に土かく

むすびかね 息ぎれしつつ 米俵 いく度しなほし 俵となりぬ

緑濃く 艶めく昼の 苗代に 稗など抜けり 眼鏡をかけて

芋掘りに 疲れ帰れば 庭先の ジンジャの花の 匂ふ夕暮

野にあれば 卵を脛に あてて破り 食らふ間も 春の風吹く

節くれし 我が厚き掌を 見ることも ありてしばらく 野火燃えさかる

百姓を止めてから、遍路一途の旅をはじめた。吉祥天像に憑かれては、

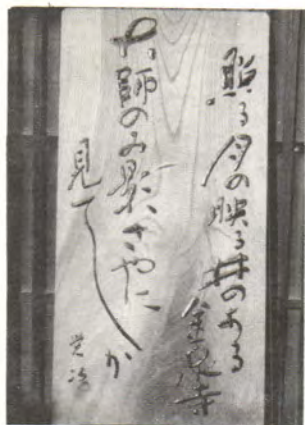
いくたびか知れず、善通寺にお参りをする。或る時は、岩が根のこごしい山坂を、登り下りし、銀のようなさざ波の光を浴びながら、渡舟で渡る。路傍で、お婆さんに遇うと、阿波方言で「ようお参りなはれ」と、いたわられる。道隆寺では護摩修法に参加する。護摩木は、行者の手から焚かれ、高らかに唱える心経の声の内に、一切の煩惱は、焼き尽くされて、人は真実と和合に目覚める。三角寺では、寡婦に遇って人と人との因縁をつくづく思つた。

このように、遍路をして仏に詣り、心のうちにひよいと、呼び起こされた感情を、歌の形で現わしたのが、四国八十八ヶ所み仏の歌です。私は歌人でありませんから、価値ある歌は出来ません。仏にお供えました。この歌集を、どなたか読み取って戴けたら、これほどうれしいことはありません。終りに大師御詠歌と遍額についてつけ加えます。大師堂で、大師を拜んでいる中に、段々とめばえて出来たのが、この御詠歌です。遍路するたびに唱えます。ここで額に彫つて、奉納したことについて、申します。或年、四十三番明石寺に参つたところ、老僧が言われるには、「この寺には、徳川の世に、漁夫の奉納した額があり、今にその子孫が、参詣する。」と。この言葉を聞いて、ふと思いついたのが、御詠歌を額として彫刻することで

した。彫刻の経験はありませんが、一本の彫刻刀で、彫りつづけました。一念は強いもので、四年で奉納し終りました。刀に力が入ったとみえて、餅をあてたような、力瘤が出来ていました。

奉納について、材料の櫟桜は、橘製材所橘芳則氏。額の板削りは、八木茂氏。書は佐々木開庵先生の御協力によります。寺に運ぶためにも、大勢の方々の御世話になり、大師堂に掲げて下ったお寺さんにも、御迷惑をかけました。厚く感謝いたします。

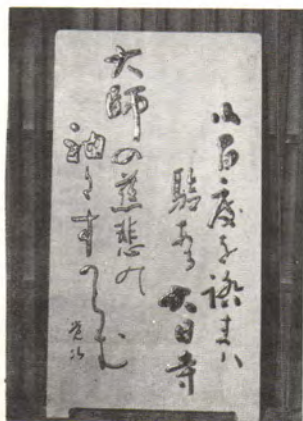
四国八十八ヶ所弘法大師御詠歌



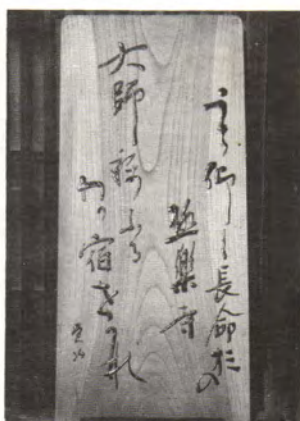
金泉寺



靈山寺



大日寺



極楽寺

第一番 靈山寺

松の間ゆ 雪の花散る 靈山寺 目引大師よ またたき給へ

松の間ゆ・松の間から。雪の花・正月元日に雪が降ったので雪を花にたとえた。目引大師・めびきたいし。大師が目をばちばちすると御利益がある。と伝える。

第二番 極楽寺

打仰ぐ 長命杉の 極楽寺 大師称ふる 我が宿世かな

長命杉・大師御手植の杉と伝える。称ふる・たたふる。ほめる。宿世・すくせ。前世からの因縁。

第三番 金泉寺

照る月の 映る井のある 金泉寺 大師のみ影 さやに見てしか

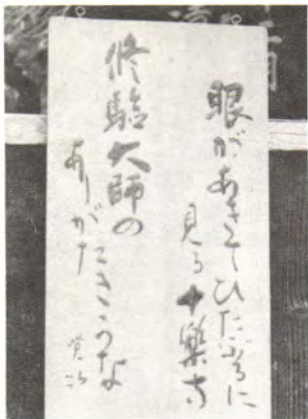
金泉寺・大師泉をほられ、こがねの霊水が湧くのを見給いて寺号とすると伝える。今に井が残る。み影・みかげ。み姿。さやに・さやかに。はつきりと。見てしが・見たいものだなあ。

第四番 大日寺

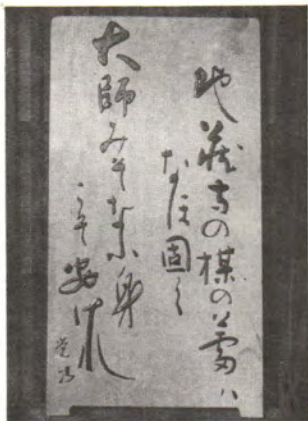
お百度を 踏まば験ある 大日寺 大師の慈悲の 袖にすがらむ

お百度・お百度まいるの略。この寺のお百度石は、字も石も風雅である。験・けん。仏道の修行をつんだしるし。すがらむ・おすがりしよう。

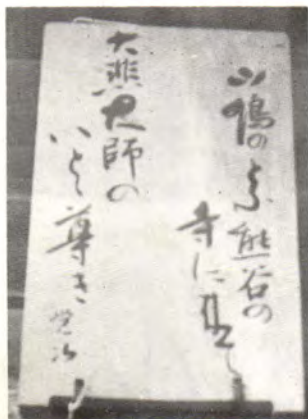




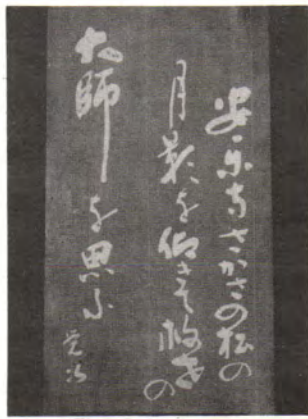
十薬寺



地藏寺



熊谷寺



安楽寺

第五番 地藏寺

地藏寺の 榎の 蕾は なお固く 大師みそなふ 身こそ安けれ

榎・うめ。梅の古字。みそなふ・御覧になる。御守りくださる。固く・蕾の固いのと、御守りくださることの固いのを掛けたことば。身こそ安けれ・身は安全である

第六番 安楽寺

安楽寺 さかさの松の 月影を あふぎて救世の 大師を思ふ

さかさの松・大師がさかさにお手植になった松が庭にある。蘆の湖にさかさの杉があるが、それから考えると、大師がこの寺で井を掘られて、水がこんこんと流れ出て、その水に松がさかさに写つたので、この伝説が出来たとも思われる。

第七番 十楽寺

眼があきて ひたぶるに見る 十楽寺 修験大師の ありがたきかな

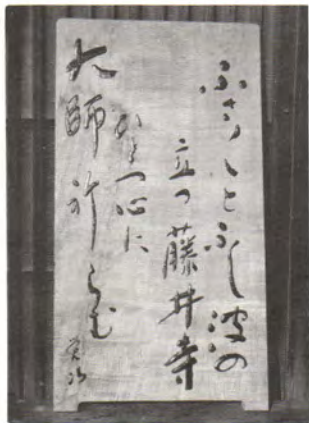
眼があく・寺伝にめくらの遍路が開眼したと松葉杖を奉納している。ひたぶるに見る・ただもうぼんやり見ている。修験大師・山中で難行苦行して、仏道を修行する大師。

第八番 熊谷寺

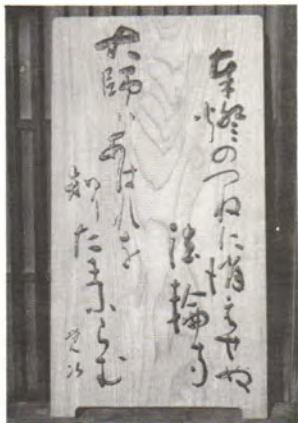
山鳩の 飛ぶ熊谷の 寺に来て 大悲大師の いとど尊き

山鳩・大師堂の石階にすみれが咲き、山鳩が遊んでいた。大悲・だいひ。ひろくかぎりないつくしみ。いとど・ますますいいいよ。

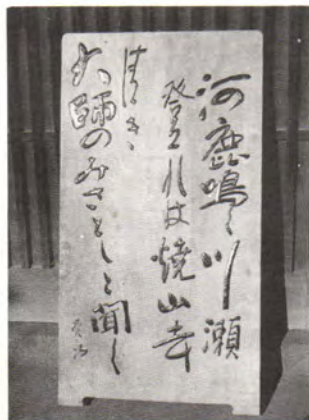
三木武夫(所奇相の生れ里)



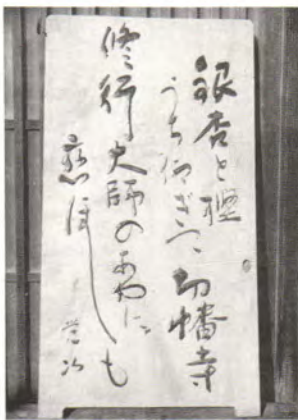
藤井寺



法輪寺



焼山寺



切幡寺

第九番 法輪寺

奉燈の 常に消えせぬ 法輪寺 大師あはれを しり給ふらむ

奉燈・ほうとう。仏に奉るともしび。田圃の中の寂しい寺に、いつも奉燈がかがやく。

第十番 切幡寺

銀杏と榎 うち仰ぎつつ 切幡寺 修行大師の あやに恋ほしも

銀杏と榎・大師堂の側にある。あやに・むしように。恋ほし・恋いしい。したわしい。も・感動の助詞。なあ。

第十一番 藤井寺

ふさふさと ふじ波の立つ 藤井寺 ひとつ心に 大師祈らむ

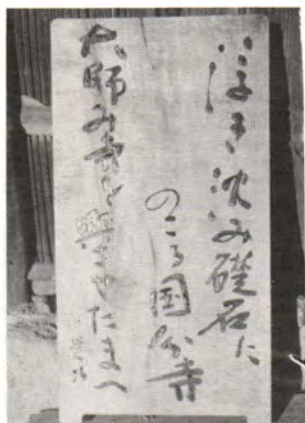
ふじ・庭に藤棚があり花が波のようにゆれる。ひとつ心・一心に。

(道路参詣修理中)

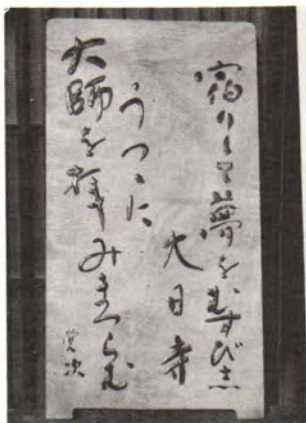
第十二番 焼山寺

河鹿鳴く 川瀬登れば 焼山寺 清き大師の みさとしと聞く

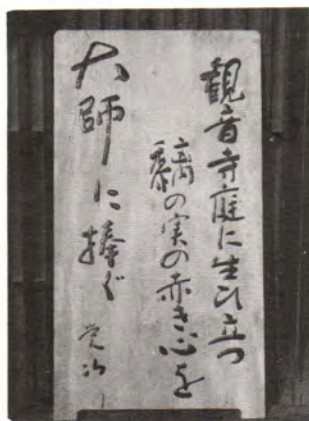
河鹿・かしか。かえるの一種で、山間の溪流にすみ、美声で鳴く。みさとし・お告げ。



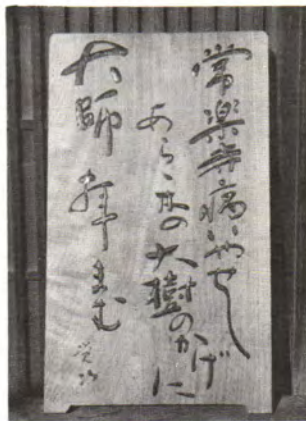
国分寺



大日寺



観音寺



常楽寺

第十三番 大日寺

宿りして 夢をむすびし 大日寺 うつつに大師を 拝みまつらむ  
宿りして・寺に宿泊して。うつつに・目がさめて。

第十四番 常楽寺

常楽寺 病いやせし あらら木の 大樹のかげに 大師拝がまむ

あらら木・庭に病をなおすあらら木がある。一位ともいい、常緑喬木。葉は針葉、開花し、実は赤色で食用となる。

第十五番 国分寺

浮き沈み 礎石にのこる 国分寺 大師み寺を 興させ給へ

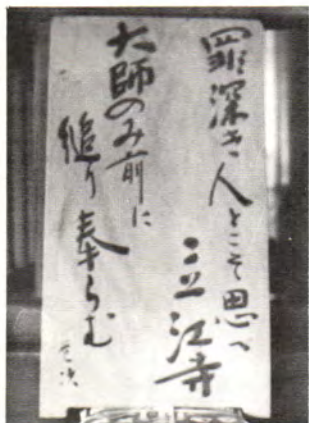
礎石・庭に大きな礎石が見える。天平時代の東大寺式配置の七堂伽藍があった。国分寺の盛時を思い感慨がある。興させ給へ・復興させて下さい。

第十六番 観音寺

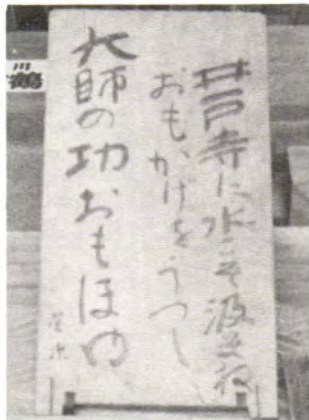
観音寺 庭に生ひ立つ 繡の実の 赤き心を 大師に捧ぐ

繡・もちの木。常緑喬木淡黄緑色の小花を開き球形赤色の核果を結ぶ。赤き心・もちの実の赤いような赤い心。まごころ。

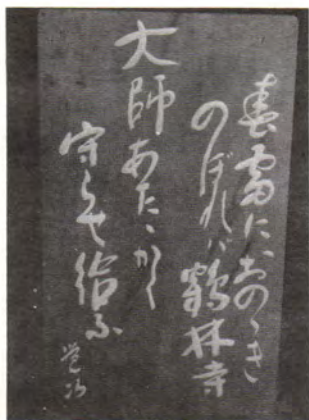




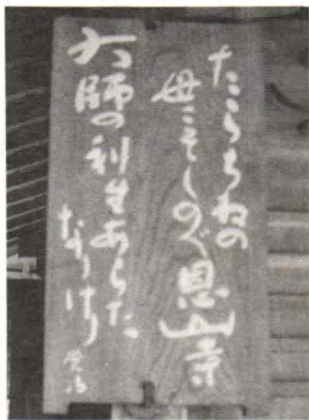
立江寺



井戸寺



鶴林寺



恩山寺

第十七番 井戸寺

井戸寺に 水こそ汲まね おもかげを うつし大師の 功おもほゆ

こそ・係の助詞。水を強める。汲まね・ねは打消の助動詞ずの已然形。私は大師ゆかりの井戸の水はくまないが。面影・大師のお姿。功・いさを。功績。おもほゆ・思われる。

第十八番 恩山寺

たらちねの 母こそしのべ 恩山寺 大師の利生 あらたなりけり

たらちね・母の枕言葉。大師は恩山寺で母君の慈悲を憶はされた伝説がある。人々もこの寺で親の御恩をしみじみ思う。利生・りしよう。仏が人々に利益をさずける。あらたなりけり・大師の靈験がわが心に著しいよ。

第十九番 立江寺

罪ふかき 人とこそ思へ 立江寺 大師のみに すがり奉らむ

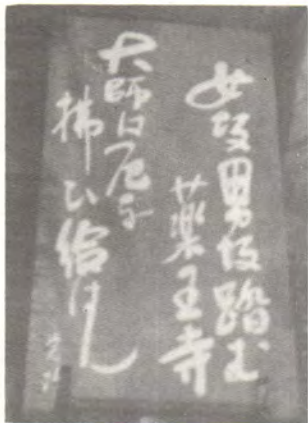
罪・肉髮付の証紐を見、由来を聞くと私も罪深い人と思う。すがり奉らむ・おすがり申そう。

第二十番 鶴林寺

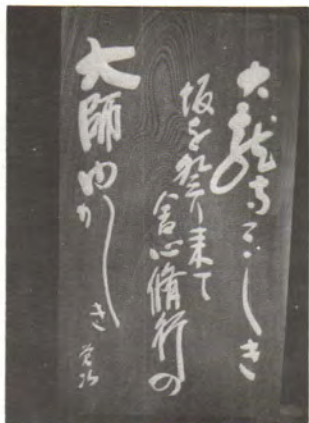
春雷に おののき登れば 鶴林寺 大師あたたかく 守らせ給ふ

春雷・鶴林寺の旧登山道の、大松のそびえるあたりで俄に春雷にあい、助けられて書院に宿る。おののく・おじおそれる。

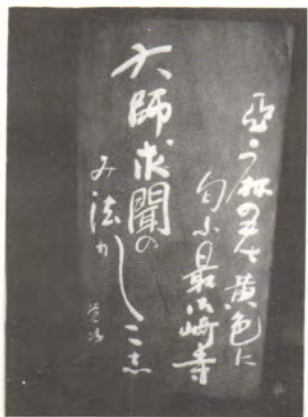
新道は白駒車道であつ平地から約三又余山を谷に登  
極水におほはれて白大ゆかりの又境内は老朽のみにて  
本堂大師お空塔は時代もので主派である運送も長谷の主派



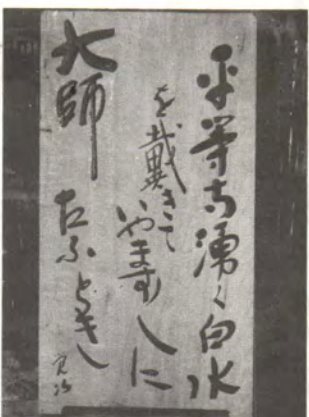
薬王寺



大龍寺



最御崎寺



平等寺

北に山あり其れより五〇米西北にカス師の  
虚空蔵問持法修め一集あり

第二十一番 大龍寺

大龍寺 ころしき坂を 登り来て 舎心修行の 大師ゆかしき

ころし・岩のかたまりがごつごつ重なつてけわしい。舎心・舎心が獄の略。大師が心も身も捨てて修行なされたところ。ゆかし・心がひかれ慕わしい。

第二十二番 平等寺

平等寺 湧く白水を 戴きて いやますますに 大師たふとき

白水・大師加持水を求めて、地を塌らせ給うに乳のように白い霊泉が湧き出た。いやますますに・いよいよますます。

第二十三番 薬王寺

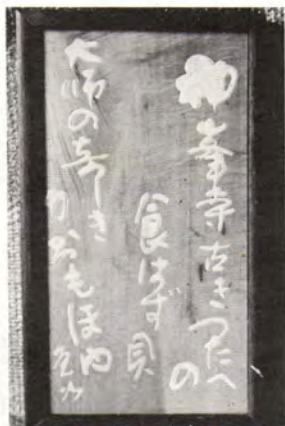
女坂 男坂踏む 薬王寺 大師は厄を 払ひ給はむ

厄を払ひ給はむ・年齢の数ほど石階に銭をなげて拝むと厄を払って下さるだろう。

第二十四番 最御崎寺

亜麻の花 黄色に匂ふ 最御崎寺 大師求聞の み法かしこし

亜麻・一年生草本。葉は線状、夏花をひらく。書院のあたりに繁茂する。求聞のみ法。大師十九歳のとき、室戸の岬端に断食して、虚空蔵求聞持の法を修し、明星日中に入り、悟をひらかれる。かしこし、恐れ多く有難い。



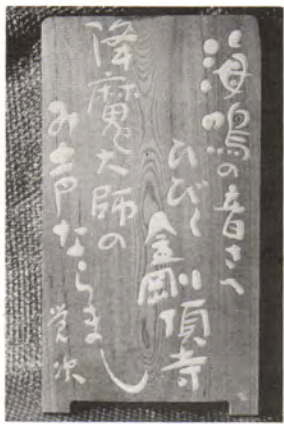
神 峰 寺



津 照 寺



大 日 寺



金 剛 頂 寺



第二十五番 津照寺

遍照金剛 唱へて登る 津照寺 大師の加持の 井なむゆかしき

なむ・意味を強める係の助詞で、従って井の意味を強め、終は、ゆかしきと連体形で結んで、ゆかしい  
という意味となる。

第二十六番 金剛頂寺

海鳴の 音さへひびく 金剛頂寺 降魔大師の み声ならまし

海鳴・うみなり。しおの満ちてくる音。寺に登る坂でも、登りつめたところでも海鳴の音が聞え心の  
奥までしみ入る。降魔大師・こうまたいし。大師が魔物を、征伏せられた伝説がある。み声ならまし、  
み声であらう。

第二十七番 神峰寺

神峰寺 古きつたへの 食はず貝 大師の奇しき 力おもほゆ

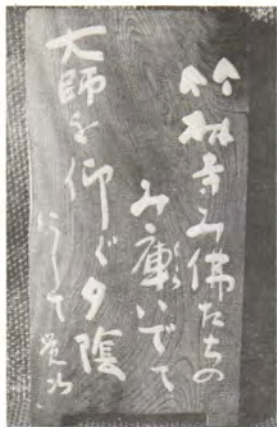
食はず貝・登山道にそった川のせせらぎや岸に貝の化石がある。修行中の大師に人貝をおしんで食べ  
られないと言ひ、化石となったと伝える。奇し・くし。靈妙不思議。おもほゆ・思われる。

第二十八番 大日寺

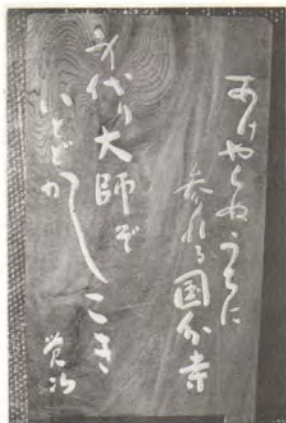
日影さす 広前清き 大日寺 大師かしこむ 真砂に立ちて

広前・神仏の前の庭を敬つていう。かしこむ・つつしみ尊ぶ。真砂・まさご。清掃してきれいな砂の庭。

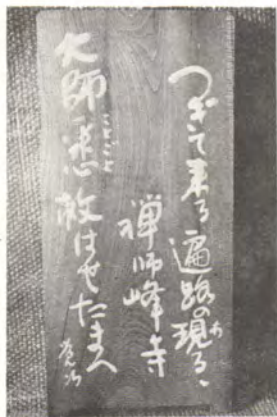




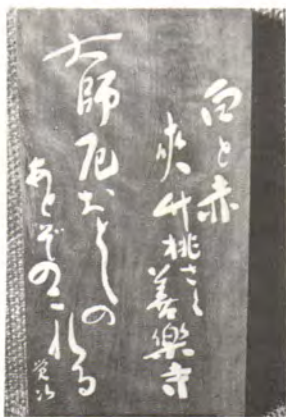
竹林寺



国分寺



禅師峰寺



善楽寺

第二十九番 国分寺

あけやらぬ うちにまゐれる 国分寺 身代大師ぞ いとどかしこき

あけやらぬうち・御免駅に下車して寺に参った時は、まだあけきつておらなかつた。身代大師・人に災難のふりかかると時、大師が身代りとなつて下さる。いとど・いよいよ。かしこし・難い。

第三十番 善楽寺

白と赤 夾竹桃さく 善楽寺 大師厄落しの 跡ぞのこれる

厄落し・厄をなくするために加持祈禱する。大師は四十二才の時、四国を巡られ、この寺で厄落しをせられたと伝える。

第三十一番 竹林寺

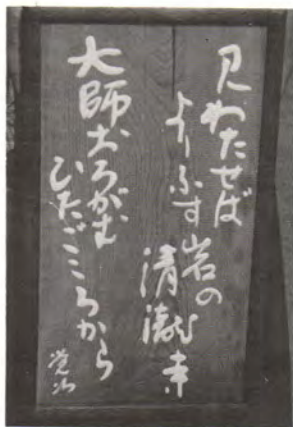
竹林寺 み仏たちの み庫出でて 大師を仰ぐ 夕陰にして

み庫・みくら。多くの仏像を所蔵するくら。夕陰・夕方日の光。

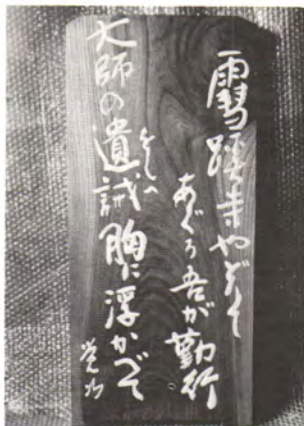
第三十二番 禅師峰寺

つぎて来る 遍路の現るる 禅師峰寺 大師悉 救はせたまへ

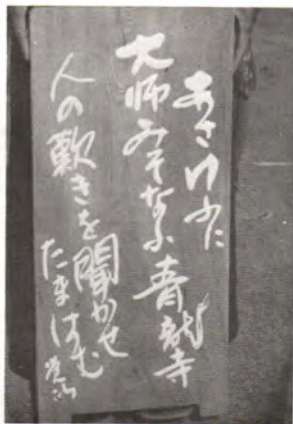
つぎて来る・つぎつぎとつづいて来る。現るる・あるる。あらわれる。悉・ことごと。残らずすつかり。



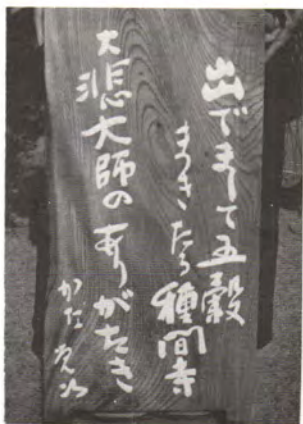
清瀧寺



雷踏寺



青龍寺



種間寺

第三十三番 雪蹊寺

雪蹊寺 やどりてあぐる 吾が勤行 大師の遺誠 胸に浮かべて

やどりて・寺にとまって。勤行・ごんぎやう。おつとめ。仏前に読経礼拝をする。遺誠・いかい。後世の人のために残すいませしめ。大師は、菩提を念じつつ自らめぐられた八十八ヶ所の遺跡を毎日めぐられるとの言葉をのこされた。

第三十四番 種間寺

出でまして 五穀まきたる 種間寺 大悲大師の ありがたきかな

出でまして・大師がお出ましになって。五穀まきたる・五穀の種をまいて人を救ったという。大悲大師・悲は苦を除くことで、ひろくかぎりないつくしみある大師の意。

第三十五番 清瀧寺

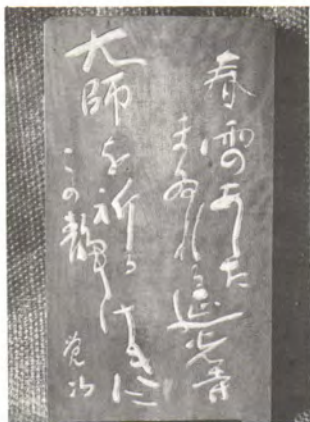
見わたせば よりふす岩の 清瀧寺 大師をろがむ ひたごころから

よりふす岩・より集って横になる岩。本堂の壁の上に見える。をろがむ・おがむ。ひたごころ・ひたむきで純一の心。

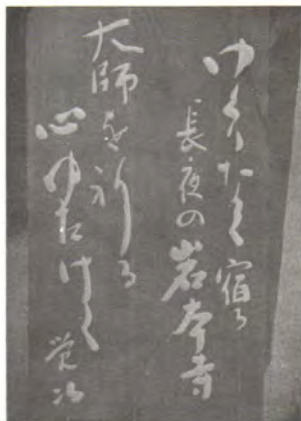
第三十六番 青龍寺

あさゆふに 大師みそなふ 青龍寺 人の歎きを 聞かせたまはむ。

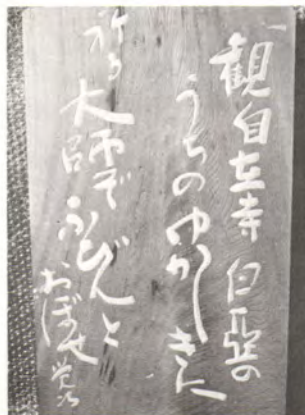
みそなふ・みそなはす。見るの尊敬体ごらんになる。歎き・なげき。哀願すること。



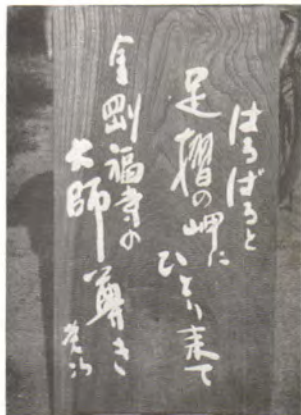
延光寺



岩本寺



観自在寺



金剛福寺

第三十七番 岩本寺

ゆくりなく 宿る長夜の 岩本寺 大師を祈る 心ゆたけく

ゆくりなく・思ひがけなく。長夜・ながよ。よなが。秋岩本寺でとまった。ゆたけく・ゆつくりおちついて。

第三十八番 金剛福寺

はるばると 足摺の岬に、ひとり来て 金剛福寺の 大師たふとき

はるばると・お遍路はこの寺に参り亜熱帯の植物を見、青黒い太平洋の黒潮を眺めるとはるばると来た情が湧いて大師が一層有難く思われる。

第三十九番 延光寺

春雨の あしたまいれる 延光寺 大師を祈る この静けきに

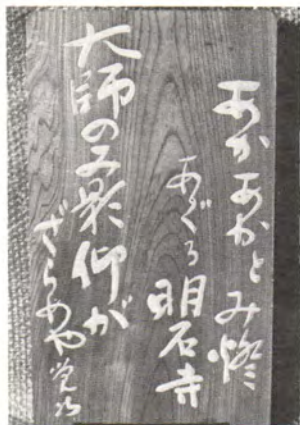
静けきに・野山が霞み渡り糸のような小雨の降る静かな時に。

第四十番 観自在寺

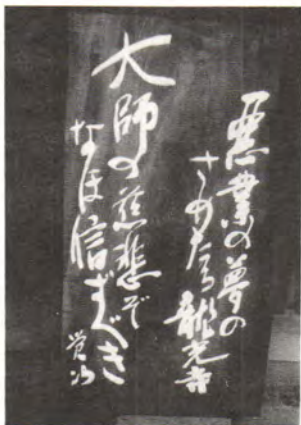
観自在寺 白亜のうちの ゆかしきに 祈る大師ぞ ふびんとおぼせ

焼ける前に参り、又婦人達の天幕の下に寄附を願う折にも参る。歌は、白亜の寺になって参った折の作。白亜のうちのゆかしきに・大師が白亜の殿堂にいらせられると思うと心がひかれ慕わしく思うにつけて。ふびん・かわいそうなこと。おぼせ・おぼすは思うの尊敬体。思つて下さい。

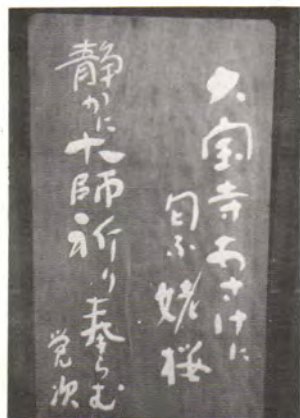




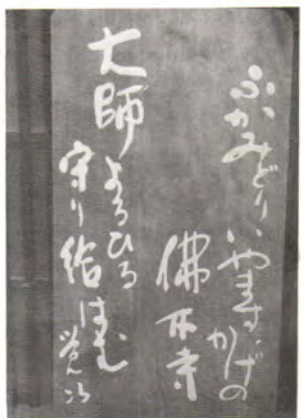
明石寺



龍光寺



大宝寺



仏木寺

第四十一番 龍光寺

悪業の 夢のさめたる 龍光寺 大師の慈悲ぞ なほ信すべき

悪業の夢・寺に宿泊して殺人の夢を見る。なほ・それでも、やはり。信すべき・大師の慈悲を信じ頼  
つておすがりする。

第四十二番 仏木寺

ふかみどり いやますかげの 仏木寺 大師よるひる 守り給はむ

ふかみどり・濃い緑。いやます・いよいよまさる。かげ・木陰。大師・二体の大師の大きな坐像を安  
置する。木像の大師像としては鎌倉時代の作で日本最古の像である。

第四十三番 明石寺

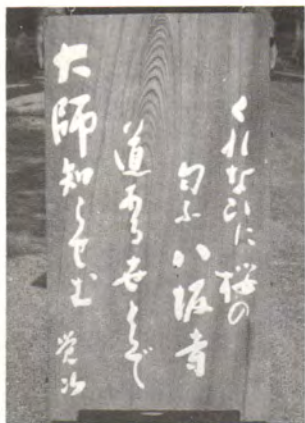
あかあかと み燈あぐる 明石寺 大師のみ影 仰がざらめや

み燈・みあかし。御燈明。み影・お姿。仰がざらめや・仰がなからうかいや仰ぎ奉る。

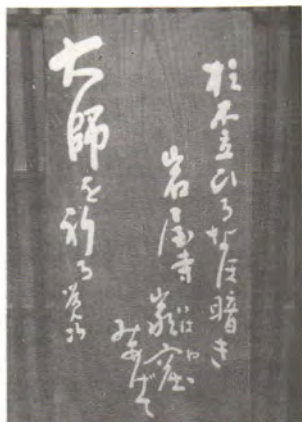
第四十四番 大宝寺

大宝寺 あさけに匂ふ 姥桜 静かに大師 祈り奉らむ

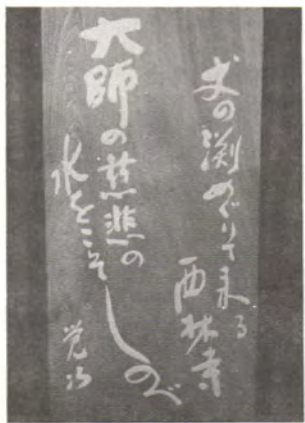
あさけ・夜明け。匂ふ・にほう。色や香のけはいがうるわしく立つ。姥桜・うばざくら。寺の庭にあ  
る。



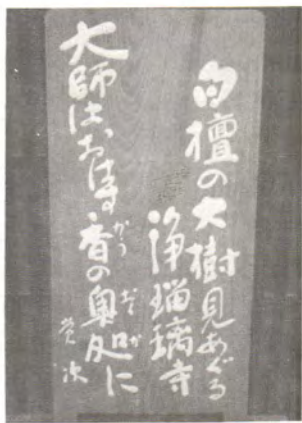
八坂寺



岩屋寺



西林寺



浄瑠璃寺

第四十五番 岩屋寺

杉木立 ひるなほ暗き 岩屋寺 巖窟みあげて 大師を祈る

巖窟・いわや。岩の間の自然にできたほらあな。

第四十六番 浄瑠璃寺

白檀の 大樹見あぐる 浄瑠璃寺 大師はおはす 香の奥処に

白檀・びやくだん。常緑喬木。葉は卵形赤色の花を開く。材は白くやや黄、香気が強い。おはす・居りの尊敬体いらつしやる。香・こう。奥処・おくか。かは所の意。奥まった処。

第四十七番 八坂寺

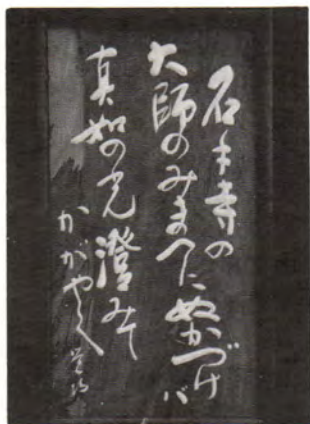
くれなひに 桜の匂ふ 八坂寺 道ある世とぞ 大師知らせむ

桜の匂ふ・桜が咲く。寺の庭に若い桜の花盛であつた。道・仏道。仏教の道。

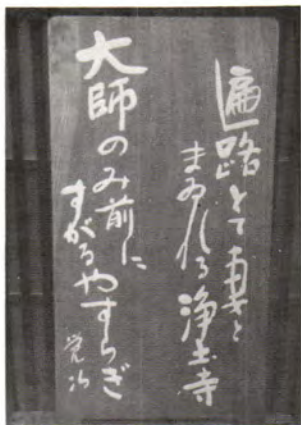
第四十八番 西林寺

杖の淵 めぐりて来る 西林寺 大師の慈悲の 水をこそしのべ

杖の淵・門前の田圃の中に杖の淵とよぶ小池がある。大師早魁の折雨乞の加持をしてから水が潤れな  
いと伝える。



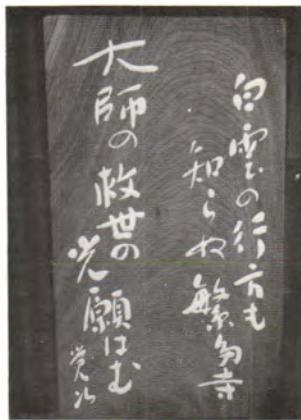
石手寺



浄土寺



太山寺



繁多寺

第四十九番 浄土寺

遍路とて 妻とまゐれる 浄土寺 大師のみ前に すぐるやすらぎ

やすらぎ・やすらかに休息する。

第五十番 繁多寺

白雲の 行方も知らぬ 繁多寺 大師の救世の 光願はむ

救世：くぜ。仏語世の人を救う。光・恵み。おかげ。寺のある山には白雲がどこゆくともなく流れてい  
るが人も白雲のように、はかなくこの世をさまよっている。どうか大師のおかけを願がおうの意。

第五十一番 石手寺

石手寺の 大師のみまへに ぬかづけば 真如のひかり すみてかがやく

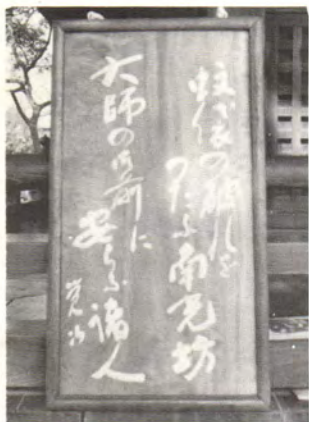
ぬかづく・ひたいを地につけて拝礼する。真如・しんによ。仏語、永久不変の真理。

第五十二番 太山寺

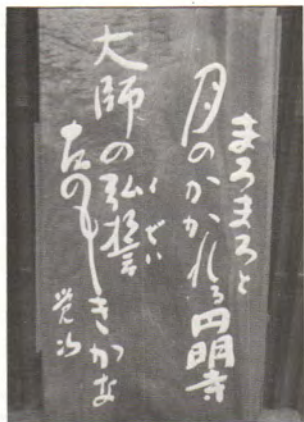
太山寺 み名をとなへて つく鐘を 大師はまこと 知らせたまはむ

み名をとなへて・南無大師遍照金剛ととなえて。つく鐘を・私がつく鐘だから。大師はまこと・大師  
は私のまごころを。知らせたまはむ・お知りなさるであらう。

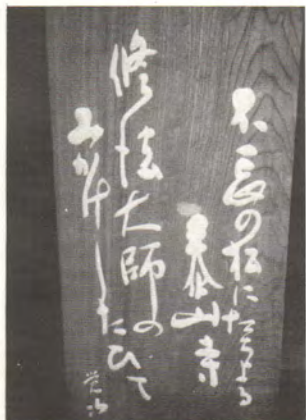




南光坊



円明寺



泰山寺



延命寺



第五十三番 円明寺

まろまろと 月のかかれる 円明寺 大師の弘誓 たのもしきかな

弘誓・ぐぜい。仏が広く衆生を救おうとする誓。

第五十四番 延命寺

延命寺 あせびの花の 清ければ 大師をろがむ 心澄みつつ

あせび・常緑灌木。樹皮は赭色春壺形の小白花を総状につけ、大師堂に登る石段に繁茂する。をろがむ・おがむ。

第五十五番 南光坊

蚊袋の やぶれをつたふ 南光坊 大師のみまへに 安らふ諸人

蚊袋のやぶれ・寺僧言うこの附近に蚊の多いのは大師蚊をあわれみて、蚊袋を破り給いし故なりと。安らふ休む。諸人・もろびと。多くの人。大師堂には一年中人々将基をさして、楽しんでゐる。

第五十六番 泰山寺

不忘の 松にたちよる 泰山寺 修法大師の みかげしたひて

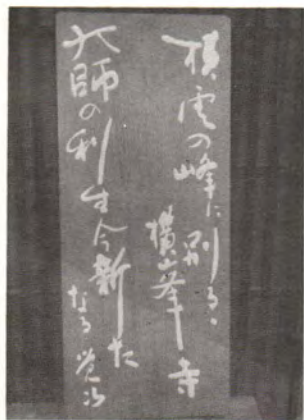
不忘・わすれず。不忘の松・大師が総社川の氾濫に、土砂加持の秘法を修せられ、その地に不忘の松を植え寺を建てられた。みかげ・み姿。



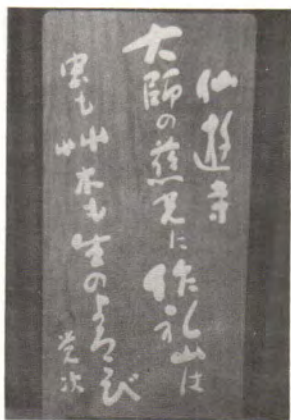
国分寺



栄福寺



横峰寺



仙遊寺

第五十七番 栄福寺

感得の み仏ります 栄福寺 大師を祈る 鰐口鳴らして

感得・かんとく。信仰のまごころが仏に通じる。み仏・弘法大師の御感得の阿弥陀如来がこの寺の御本尊と伝える。鰐口・わにくち。大師堂の軒下にかかり打ち紐で鳴らす。

第五十八番 仙遊寺

仙遊寺 大師の慈光に 作礼山は 虫も草木も 生のよろこび

慈光・じこう。衆生や生物を見る仏の慈悲深い恵みの光。虫・参詣の折大師堂で虫が生まれた。

第五十九番 国分寺

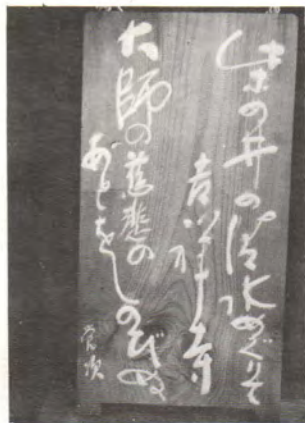
土用の土 踏みてまゐれる 国分寺 かはきし松は 大師しのばしむ

しのばしむ・思い慕わさせる。大師が巡錫して、修行なされた御苦勞が、思い慕われる。

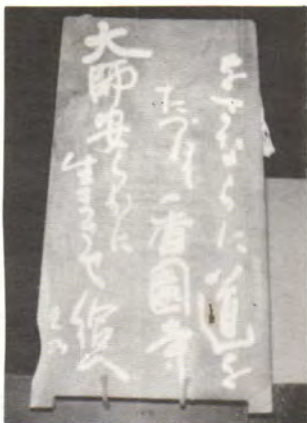
第六十番 横峰寺

横雲の 峰に別るる 横峰寺 大師の利生 いま新たなる

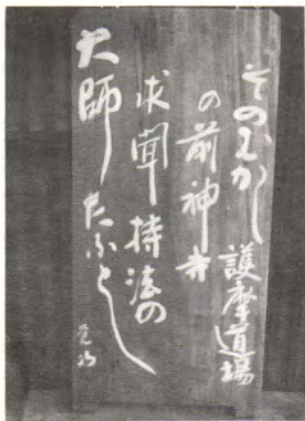
横雲・明けがたに東の空にたなびいている雲。利生・りしよう。仏が人々に利益をさすける。



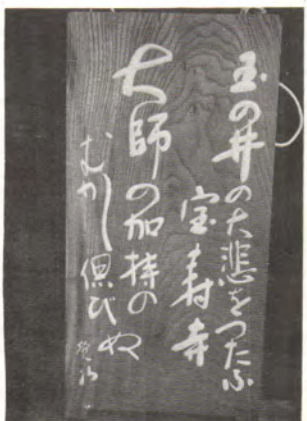
吉祥寺



香園寺



前神寺



宝寿寺

第六十一番 香園寺

をさならに 道をたづねて 香園寺 大師やすらかに 生まさせ給へ

子安大師。子供をさすけ、安産の願をかなえる大師。大師堂その他に子供の写真が幾千と掲げてある。

第六十二番 宝寿寺

玉の井の 大悲をつたふ 宝寿寺 大師の加持の むかし偲びぬ

玉の井・大師が難産の夫人に、玉の井の靈水を加持して与え給い男児を授かると伝える。加持・かち。真言宗で印を結び金剛杵を握り陀羅尼を唱えて、願がかなうように仏に祈る。

第六十三番 吉祥寺

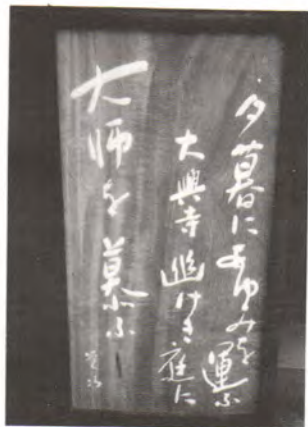
柴の井の 清水めぐりて 吉祥寺 大師の慈悲の 跡をしのびぬ

柴の井・大師が加持水に用いられた井か 寺から百米のとこにあって、民家の飲料水としている。

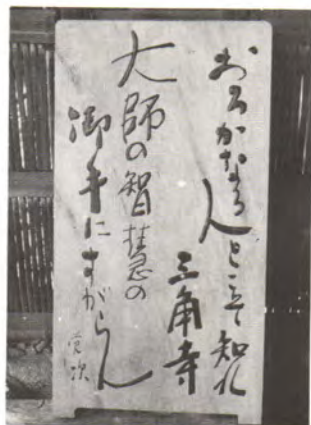
第六十四番 前神寺

そのむかし 護摩道場の 前神寺 求聞持法の 大師たふとし

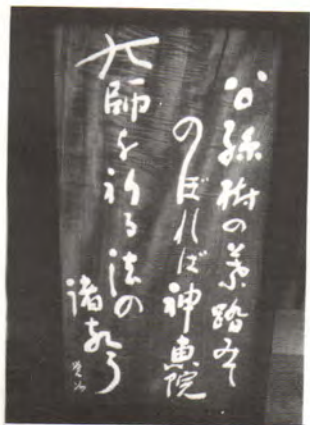
護摩・真言宗の秘法の一つ。火をたいて仏に祈りいっさいの悪事の根本を焼き尽す。道場・仏法を修行する所。



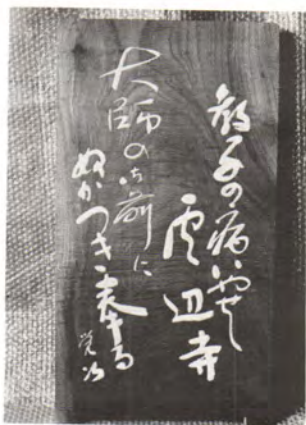
大興寺



三角寺



神恵院



雲辺寺



第六十五番 三角寺

おろかなる 人とこそ知れ 三角寺 大師の智慧の み手にすがらむ  
おろかなる人とこそ知れ・この寺に参つて、自分はおろかな人であると知つた。すがらむ・おすが  
りしよう。

第六十六番 雲辺寺

教子の 病いやせし 雲辺寺 大師のみ前に ぬかずき奉る

教子・奉職時代生徒の病気の折は巡礼した。

第六十七番 大興寺

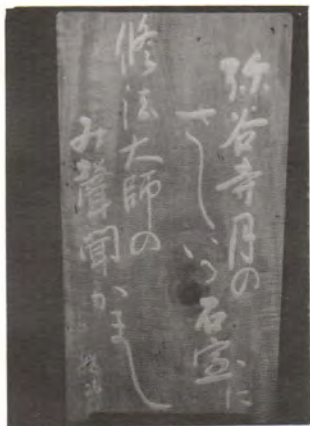
夕暮に あゆみを運ぶ 大興寺 幽けき庭に 大師を慕ふ

あゆみを運ぶ・歩いて行くこと。幽けし・かそけし。夕日の光かすかなこと。

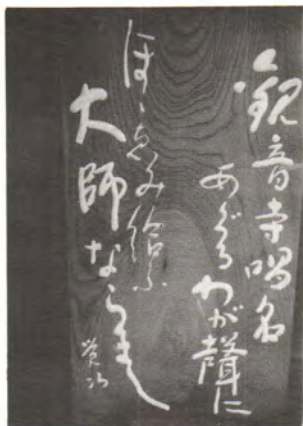
第六十八番 神念院

公孫樹の葉 踏みて登れば 神念院 大師を祈る 法の諸声

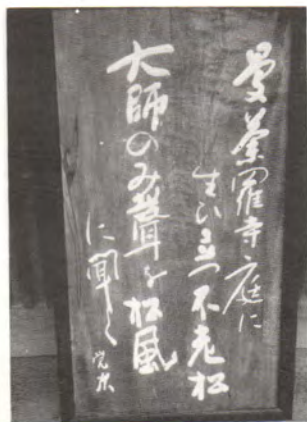
公孫樹・いちじょう。寺の庭にある。法の諸声・のりのもろごえ。遍路たちがしようみやうを唱える声。



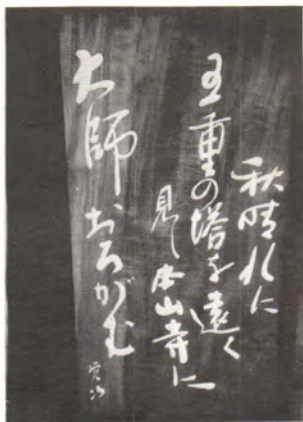
弥谷寺



観音寺



曼荼羅寺



本山寺

第六十九番 観音寺

観音寺 唱名あぐる 吾が声に ほほえみたまふ 大師ならまし

唱名・しよみよう。仏を信仰して、その名をとなえる。大師ならまし・大師であらう。

第七十番 本山寺

秋晴れに 五重の塔を 遠く見て 本山寺に 大師おろがむ

本山寺に・本山寺にお参りしての意。おろがむ・おがむ。

第七十一番 弥谷寺

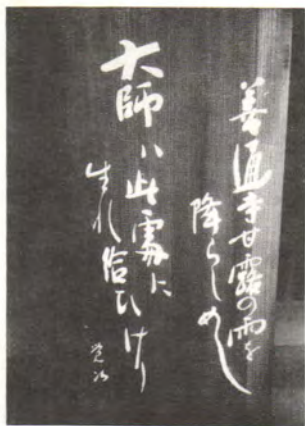
弥谷寺 月の射し入る 石室に 修法大師の み声聞かまし

石室・いしむろ。凝灰岩の山肌をうがって獅子が口を開いて吠える形をする。大師はここで修行せられたと伝える。磨崖仏がある。

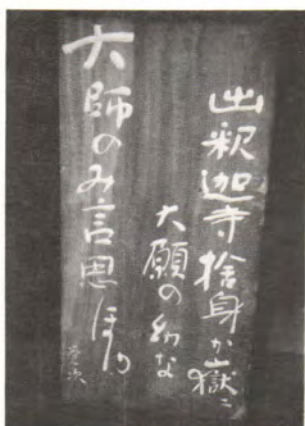
第七十二番 曼荼羅寺

曼荼羅寺 庭に生ひ立つ 不老松 大師の み声を 松風に聞く

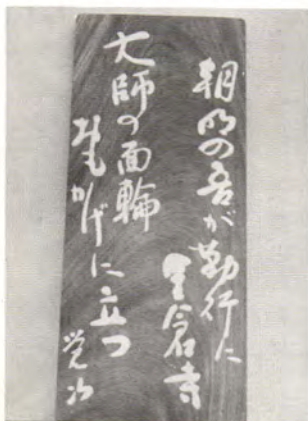
不老松・境内に大師御手植の不老松がある。



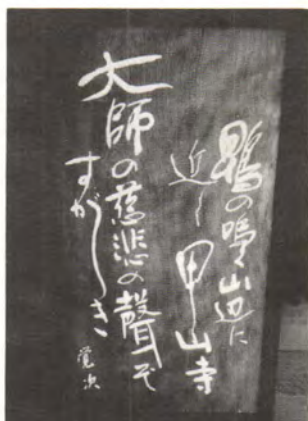
善通寺



出釈迦寺



金倉寺



甲山寺

第七十三番 出釈迦寺

出釈迦寺 捨身が獄に 大願の 幼な大師の み言思ほゆ

捨身が獄・しやしんがだけ。寺から山を登って奥院のある岳。大師は七才の折、断崖から捨身の行を修せられた。

第七十四番 甲山寺

鶴の鳴く 山辺に近く 甲山寺 大師の 慈悲の 声ぞすがしき

鶴・ひよ。灰色の鳥、胸と腹とは黒いまだら。すがし・さわやかで滞りがない。

第七十五番 善通寺

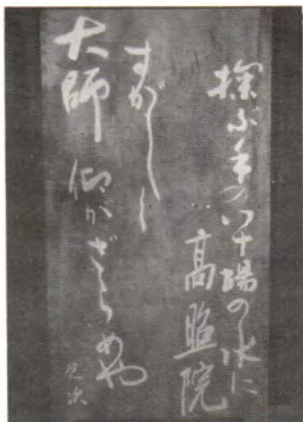
善通寺 甘露の雨を 降らしめし 大師は此処に 生れ給ひけり

甘露・かんろ。大師の徳に天地が感応して降らす甘い水。生れ・あれ。生れ給ひけり・お生れなさった。

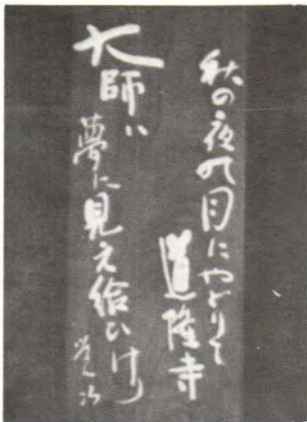
第七十六番 金倉寺

朝明の 吾が勤行に 金倉寺 大師の面輪 おもかげにたつ

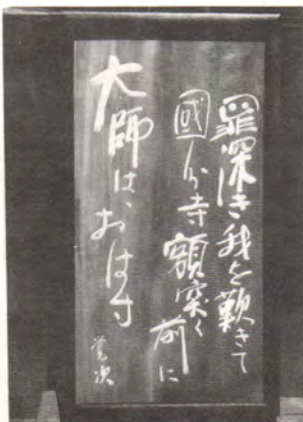
朝明・あさあけ。あけがた。勤行・ごんぎょう。きまつた時間に読経礼拝焼香をする。面輪・おもわ。顔。おもかげにたつ・連想せられる。



高 照 院



道 隆 寺



国 分 寺



郷 照 寺



第七十七番 道隆寺

秋の夜の 月に宿りて 道隆寺 大師は夢に 見え給ひけり

第七十八番 郷照寺

尋ね来て 変らぬかげの 郷照寺 見し人なみに 燈かかく

変らぬかけ・昔参つた時と変らない恩恵を受ける。見し人なみに・参詣の人々と同じように。

第七十九番 高照院

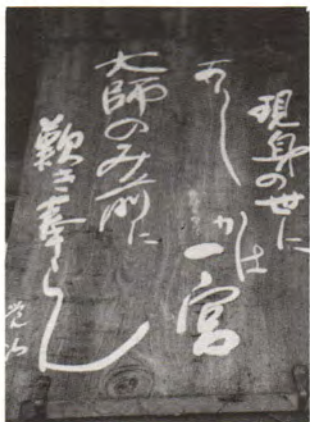
掬ふ手の 八十場の水に 高照院 すがしく大師 仰がざらめや

掬ぶ・むすぶ。手のひらで水をすくう。八十場・やそば。寺の西百米、伝説のある清泉。水に・手を洗い口をすすいでの略。すがしく・すがすがしい気持で。仰がざらめや・仰がないか、いや仰ぎたてまつるよ。

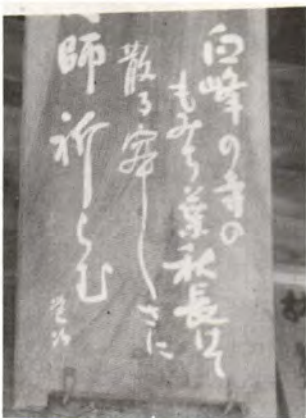
第八十番 国分寺

罪深き 我を歎きて 国分寺 額突く前に 大師はおはす

額突く・ぬかづく。ひたいを地につけて拝礼する。



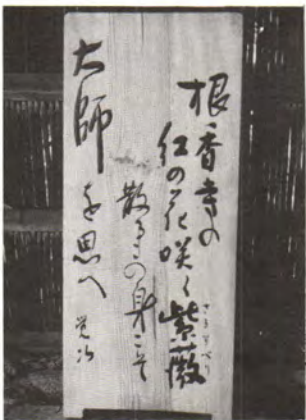
一宮寺



白峰寺



屋島寺



根香寺

第八十一番 白峰寺

白峰の寺のみち葉 秋長けて 散る寂しさに 大師祈らむ

秋長けて・あきたけて。秋の盛りが過ぎて。

第八十二番 根香寺

根香寺の紅の花咲く 紫薇 散るこの身こそ 大師を思へ

紫薇・さるすべり。落葉喬木、夏から秋にかけて淡紅色の小花が群り咲く。散るこの身・花の散るよ  
ように死なねばならぬ自分。大師を思へ・大師を思う。こそこの係助詞があるので思ふを思へと已然形で結ぶ。

第八十三番 一宮寺

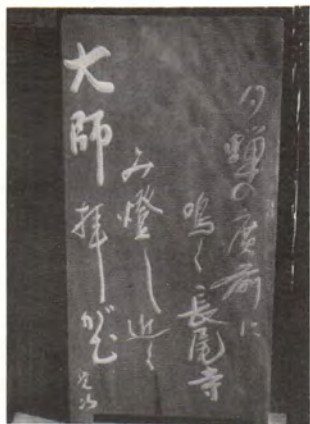
現身の世に有りしかば 一宮 大師のみ前に 歎き奉らん

現身・うつしみ。今生きているこの身。世に有りしかば・現実の世に生きているので。大師のみ前に・  
大師堂には年中お参りの人々が世の苦楽を語りあっている。

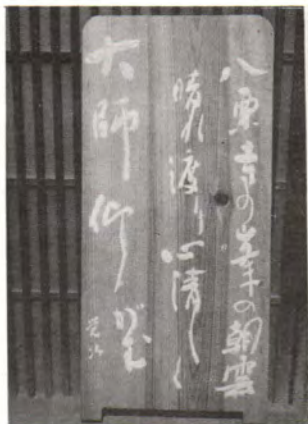
第八十四番 屋島寺

さし招き 入日とどめし 屋島寺 大師思ばむ 名唱へつつ

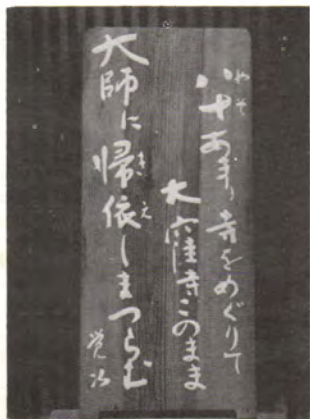
入日・大師屋島寺再建の折、棟上のできるまで入日をとどめられたと伝える。



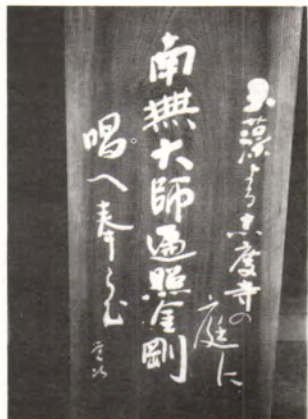
長尾寺



八栗寺



大窪寺



志度寺

第八十五番 八栗寺

八栗寺の 峰の朝雲、晴れ渡り、心清しく、大師仰がむ

清しく・すがしく。さっぱりした心で大師をおがもう。

第八十六番 志度寺

玉藻よる 志度寺の庭に 南無大師 遍照金剛 唱へ奉らむ

玉藻・たまも。藻の美称。志度の浦には、美しい藻がただよう。

第八十七番 長尾寺

夕蟬の 広前に鳴く 長尾寺 み燈し近く 大師拝がむ

拝がむ・おろがむ。おがむ。

第八十八番 大窪寺

八十あまり 寺をめぐりて 大窪寺 このまま大師に 帰依しまつらむ

八十・やそ。八十あまりの寺。八十八ヶ所の寺々。帰依・きえ。仏を深く信仰してその戒めに従う。





四国八十八ヶ所仏像の歌

5. 5. 2. 5. 16日巡拜



靈山寺多宝塔

徳島県

霊山寺 一番

多宝塔

多宝塔 いつか風鐸の 鈴の冴え 枡形の鳩 廻りつつ鳴く

風鐸・ふうたく。のきにつるす鈴。

銅造延生釈迦仏像

右手挙げ 左手腰に 誕生ます 釈迦のみ像ぞ 尊くもあるか

右手・天を指す。左手・垂れて地を指す。



銅造誕生釈迦仏像

目引大師像

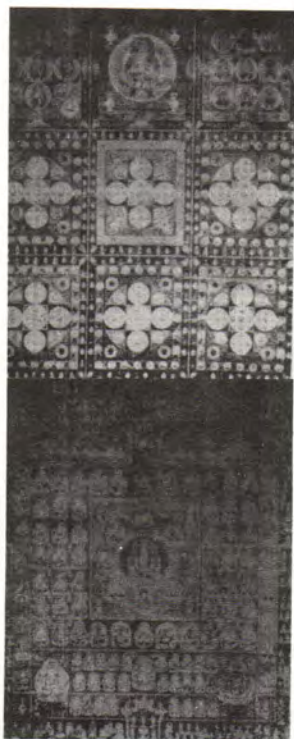
みすあぐるまで 何の証しも なければ目引 したまふ大師

証・あかし、はつきりさせる証明。

かくのみの 遍路となりて 靈山寺 広前に貫らふ 接待の塵紙

かくのみの・こんな。

極楽寺 二一番



極楽寺両界曼荼羅図

両界曼茶羅図

一仏一仏と 描くみ仏 拝み続く 両界曼茶羅の 仏ゆかしき

両界曼茶羅・宇宙一切の仏を一面の図にあらわし、金剛界と胎藏界とする。ゆかしき・心がひかれる。

阿弥陀如来坐像

さざめきの うずまく中に 坐す如来 仰ぐみ腰に 裳裾のはれる

さざめく・低い声で話しあう。

すごくすてきねと ひっそり語る 処子の やつと去らんとす み仏の前

処子・しよし。きむすめ。

み仏を おがみまつれば をやゆびの 爪は光れり 現身のごと

現身・うつしみ。生きている身。



金泉寺木造菩薩立像



金泉寺木造觀音菩薩立像



金泉寺 三番

観音菩薩立像

み厨子より 僧捧げ出すを 拝み奉る 果しも知らぬ 不壊のみ仏

不壊・ふえ。九百年前のこわれない。

菩薩立像

肱まげて 手先の欠ぐる み仏の 天衣の襷ぞ しるく目に顕つ

肱・ひじ。襷・ひだ。衣の折り目。

北向地藏菩薩

病みつきし 乱れ心の 夢に見し 奇しきえにし の 北向地藏

病みつきし・長く病の床に臥していた人、この地藏が夢にあらわれる。えにし・ゆかり。因縁。

このお堂を建てる。

大日寺 四番

廿三番観音菩薩像

山茶花の べにの匂に み仏の み肌の艶の ゆかしきあした

み仏・この仏は三十三観音中の傑作。艶・つや。きれいに反射する光。あした・朝。

三十三観音像

僧かたる 明和の仏師 作りたる 三十三観音と 言へば尊き

仏師・大阪藤村仏師。

辨財天女像

なごやかに 琵琶引き給ふ 辨財天 現に拝がみ 我ほほゑみぬ

現に・うつつに。目の前に。

白き脛 赤き裳裾の 目に顕ち来 わが情念の ふかきが故か

脛・すね。むこうすね。目に顕ち来・めにたちく。目にはっきりたつて来る。

地藏寺 五番

弘法大師像

なつかしき 大師と仰ぐ 媼らに 呼びかくごとき 御目のかがやき

媼・おうな。年老いた女。

四社明神図

朱紅金泥 あざやかに 堂奥の 四社明神 おごそかにます



地藏寺弘法大師絵像



地藏寺四社明神図

安楽寺 六番

薬師如来像

救済の 右の御手の 指先に 傷心のかげり 秘めて漂ふ

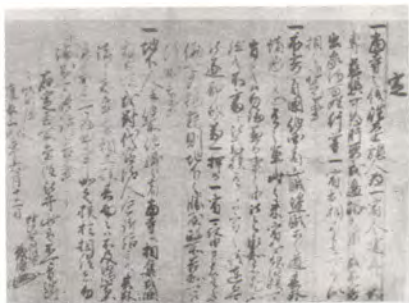
傷心・しょうしん。心をいためる。

有難き 仏と申せ この朝け 遍路となりて 拌みまつれば

駅路寺文書

蜂須賀の 駅路寺文書 読みつげば

出家遍路に 慈悲の一宿



安楽寺 駅路寺文書

十楽寺 七番

木造勢至菩薩像

面長の 勢至菩薩は 裳のひだの 揺れにぎやかに 立ちおはすかも

摩尼珠像

波に浮く 朱紺の塔に 宝珠見ゆ 奪はむとする 双龍の牙



十楽寺 勢至菩薩像



十楽寺 摩尼珠像

木造観音菩薩像

宝髪の 高く整ひ 目若き 腰かがむる 観音菩薩

熊谷寺 八番

木造弘法大師像

五鈷杵持つ 大師のみ膚 若々し 朱の納衣の 襷ゆるくして

五鈷杵・ごこしよ。ほんのうをくだき、仏性の智光をあらわす法具。納衣・のうえ。



法輪寺 九番

春光に朱鮮らしき  
楼門の如く匂へる  
極楽ありや



法輪寺楼門



切幡寺 九鈺鈴



切幡寺 二重塔

切幡寺 十番

九鈷鈴

黒光る うつぶし立てる 九鈷鈴や 裾広うして 把に菩薩面

紺紙金泥経

妙法蓮経 紺紙に書きし 経卷の 当午日輪経ぞ 貴かりけり

二重塔

お接待の 車登れば なにのえにし 樹上に澄みて 二重塔見ゆ

藤井寺 十一番

薬師如来像

いくたびも 火難にあひしみ仏をおがみまつりて 真実わが生きむ

真実・まこと。

焼山寺 十二番

金銅懸仏阿弥陀如来像

薬師如来像

千手観音像

天蓋も 花びんも見ゆる 三体の 波に跌坐する 懸仏かも

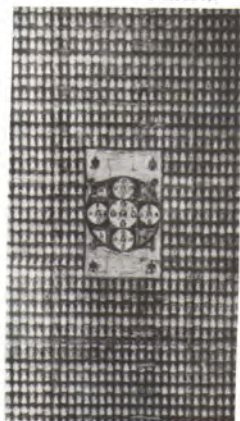
三千仏図

過現未 各千仏を おがみゆく 今日の一日の 春日は暮れむ

各千仏・三幅に各幅千個の仏を画く。



焼山寺 金銅懸仏  
阿弥陀如来像  
薬師如来像  
千手観音像



焼山寺 三千仏図

大日寺 十三番

淡彩の 大悲大師の かかる宿坊 今宵一夜は 安寝しなさむ

宿坊・しゆくほう。へや。安寝・やすい。やすらかにねむる。

宵の間は 鰐口鳴らし 鑿子打ち あちこちの堂に いとなみの影

いとなみ・勤行。おつとめ。



大日寺 宿坊の弘法大師画像

常楽寺 十四番

あらか樹

根に伏せば 樹を仰げば 自が病 癒やす恵に 魅かれてならず

魅がる・つかる。心がひきつけられる。

薬師三尊十二神将図

薬壺 持つみ仏の 右左 日光月光 十二神将



常楽寺 あらか樹



常楽寺 薬師三尊十二神将像



国分寺 十五番

渦を巻く 心礎にたまる 砂埃 七重の塔の 思へてならず

心礎・七重塔の中心であった土台石。

観音寺 十六番

仏涅槃図

仏涅槃 心悲しく 散りあへぬ 沙羅双樹の花 白く悲しむ



観音寺 仏涅槃図

井戸寺 十七番

絹本著色小野流相承絵系図

仏菩薩と 二十五祖師 南無大師 遍照金剛 唱へまつらむ

七仏薬師像

いつか焼け 今現れ給ふ み仏の その白毫の まろきかがやき



井戸寺 小野流相承絵系図

金剛力士像

怒号する 仏にませど 凹凸の  
虫喰ひし逞しき足 我を魅惑す

魅惑・みわく。人の心をひきつけ迷わせる。

恩山寺 十八番

本堂鬼瓦

忠兵衛は 陶瓦の鬼の 曝さるる

この運命を 予知してゐしか

忠兵衛・この鬼瓦をやいた大阪の陶工。  
本堂銅板ぶきとなりおろされる。

さらされし 鬼の瓦の 燃ゆる眼

嘘のようにも 黝く匂へる

黝・くろく。



恩山寺 本堂鬼瓦



立江寺 地藏菩薩像



立江寺 多宝塔



立江寺 地藏菩薩像

立江寺 十九番

地蔵菩薩像

片隅の 地蔵菩薩は 子の歳の 男五才の 誕掛召す

子を抱く 石の地蔵の やさしくて 盛りあがる程に 誕掛召す

もちの樹

立江寺に 参り来て朝け 見る庭の もちの樹の実の 赤きゆさぶり

撫 仏

なげまきを 啄む雀 み仏の 肩にとまりて 首すくめ居り

多宝塔

松の樹の ゆるるがままに 風鐸の 音たてでゆる この多宝塔

鶴林寺 二十番

地藏来迎図

鶴さんかと 言ひつつおがむ 来迎図 杖つく爺が 賽銭をあぐ



鶴林寺 地藏来迎図



三重塔

白鶴の たたずむ寺に 訪ひ来しが 三重の塔 梅花に匂ふ

春雷に 明けしみ寺の 空に浮く 若葉の包む 三重の塔

芯芻雲照筆五字の額

鶴林悲願閣の額 仰ぎ居て み仏の心 吾が思ひやまず

金剛力士像

春雷の とよめく山の 楼門に 仁王は立たす 夢の如くに

伽羅尊者画像

常住は 尊者のみ手に 智火燃えて 猛虎忽ち 菩提なりけり

梅池上人の七言詩を見て

白鶴の 護るみ寺に 塵もなく 春風吹きて 僧経を説く



鶴林寺 伽羅尊者画像

大龍寺 二十一番

木造不動明像

瑗珞の  
み胸もゆらに  
ゆらかして  
独り坐します  
不動明王



大龍寺 木造不動明王像

平等寺 二十二番

紙本金地著色秋草図

秋草の花咲く中に 玉鬘 影に見えつつ 蜻蛉飛ぶなる

薬王寺 二十三番

慈雲尊者墨跡

声をあげ 尊者の書 読まざれど 今ひしひしと 心に銘す

慈雲尊者・大阪の人享保三年生、高貴寺に住する傑僧。誠とは天の道なり。これにしたがうを人たるの道とす。蠢動もめぐむべし。一草一木をもやぶらず。



平等寺 秋草図



薬王寺 慈雲尊者墨蹟

成願寺 徳島市中田

菩薩立像

あさとでに 拝むみ仏 み厨子より 今も出でますと思ほゆらしも

あさとで・朝戸をあけて外に出る。

長楽寺 徳島県井川町

弘法大師行状曼荼羅

姫君の 刺繍のあとも 鮮かに 大師行状 一代記見つ



長楽寺 弘法大師行状曼荼羅

正興寺 徳島県鳴門市

毘沙門天画像

靴の裏に 邪鬼踏みつぶす 毘沙門の 皮の鎧の 鬼の牙はも

千手観音像

金色に 千手のみ手も 腰の裳も かがやき立たす み仏の像



正興寺 毘沙門天像



正興寺 千手観音像



神宮寺 徳島県土成町

木造能面

つりあがる 眉とその目と 大きな口 ただうつむきて をがむ能面



神宮寺 木造能面

最御崎寺 二十四番

月光菩薩像

宝髻の み面ゆたかに ほぐれつつ ただに立たせる 御姿はも

宝髻・ほうけい。仏の頭上のもとどり。宝髻 顔の造作・衣文など種拙で地方色が強い。はも・感動の意をあらわす。

鰐 口

潮騒のとどろく寺に 鳴りひびく 大き鰐口 施主屋治郎兵衛

潮騒・しおさい。波が高くて音をたてる。鰐口・わにくち・仏堂ののきに吊し、礼拝のとき鳴らす。



最御崎寺 木造月光菩薩像



最御崎寺 鰐 口

薬師如来像

薬壺 持たす御手を 膝にのせ 半眼の瞳 ひとりの我を見給ふ

木像四天王像

肩ゆ手の 欠げし仏の 四天王 み庫にこもり 日々に朽ちゆかむか

四天王・持国・増長・広目・多聞の四天で四方を守護する護法身。甲冑をつけ武装する。この像は肩から下、手が欠げている。

飛天の石像

花を持つ ふたつの飛天 天衣なびけ 空飛び給ふ 声もなくして

天衣・てんね。仏の肩から腕へたれる布。

大師堂の大師像

大海なす み厨子の中に 大師おはす 怒れるがごとく 笑めるがごとく

大海なす・大海のような。

みくろど神明窟大師修行処

巖窟に 荒るる岬の 波風を 聞きて勤念 し給ふ大師

巖窟・がんくつ。岩のほらあな。勤念・ごんねん。おつとめをして修行にいそしむ。大師の歌・法性の室戸といへど我が住めば有為の浪風よせぬ日ぞなき。

勤念の 思ひもやまず 若き大師 身をふりたてし みくろどの窟

勤念・大師著三教指帰に、「室戸崎に勤念す。谷響を惜しまず、明星来影す。」とある。



みくろど神明窟

遍路とて ここに来れる

いくたびぞ 妻と朝明の

日の出をおがむ

如意輪観音像

補陀落の 浄土に参る 道をしも 導き給ふ このみ仏は

補陀落・ほだらく。観音の住む山で、この海を渡ると行かれる。み仏・大理石の仏。

津照寺 二十五番

板彫金剛力士像

たけり立つ 金剛力士 そくそくと 浮彫る力 わが胸にわく

浮彫る・左右上方を雲形で輪郭し、香狭間のある壇の上に立つ



津照寺 金剛力士像

金剛頂寺 二十六番

銅造観音菩薩立像

ケースの中に 漆の如く 黒びかります 銅造の 観音菩薩

観音菩薩・頭上に三面頭飾をつけ、垂髪を両肩に流す。胸元から瓔珞を飾り、天衣は台座に流れる。

石 仏

闇夜行く ごとく樹の葉の もりあがる 坂道にして 稚児のみ仏

稚児・ちこ。幼児。



金剛頂寺 銅造観音菩薩像



神峰寺 二十七番

太平洋の濤

登りつつ濤 登り果てて濤 どこまでも 濤見たりけり 神峰坂に

濤・なみ。大波。

金剛力士像

口髭を 斜に立てて 口を開く 怒号の声は 海までとどけ



神峰寺 金剛力士像

笥の水

笥より 落つる清水に 杓よせ 我が命の よみがへる思ひ  
笥・かけい。竹をかけ渡して、水をとおすもの。杓・ひしやく。水などをくむ用具。

大日寺 二十八番

聖観音立像

み仏の 蓮華の蕾 末だ固く 庭の桜花は 風に流るる

蓮華・左手屈臂蓮華を持つ。衣文線は浅く、丸顔のおだやかな表情。右手は垂れている。



大日寺 木造聖観音立像

大日如来坐像

暁に 日輪の如く 仰ぎ見る 智拳印結ぶ み仏の像

智拳印 結び給へる み仏を 心に見つつ 坂を下りぬ

書院にて 写し賜はる み仏の 写真抱きて 春の土佐路ゆく

庭に咲く しだれ桜の 花のかけ 流らふ雨に 仏こそおがめ

国分寺 二十九番

紺紙金字法華経断簡

かけまくも かしこき后 ほのぼのと 書かせ給へり 金字法華経

后・きささき。

薬師如来像 (1)

鎌倉の 匂をうつす 薬師仏 黄金のみ身の 朝明けの色

同 (2)

口紅の 仄かに匂ひ 千年の 白毫の光 たちて尊き

梵 鐘

撞座欠げ 古様をたもつ 梵鐘の 遠き昔の 音聞かましを

古様・こよう。古い様式。平安初期のもので撞座の位置高く、撞座と龍頭の線が直交する。



(2) 国分寺 薬師如来像 (1)

安楽寺 三十番

阿弥陀如来像

み仏の 半眼の瞳 吾が仰ぐ まなこにうつる 清きその瞳

ほのぼのと朝けの光 み仏の 頬の辺にさして しづかに移る

地藏菩薩画像

あまたらす 仏にませば 雲に乗り 錫杖肩に 出でますところ



安楽寺 地藏菩薩像

竹林寺 三十一番

増長天像

左掌に顎をささへし 邪鬼のまなこ うらみやすらむ まろくとげとげし  
増長天・ぞうちょうてん。四天王の一。護法神、しゆみ壇の上西南に置く。甲冑をつけ、足下に邪鬼をふむ。

毘沙門天像

立ちながら 黙想し給ふ み仏の 邪鬼のまなこぞ 欠げて空なる  
毘沙門天・びしゃもんてん。四天王の一。独尊としてもまつる。



竹林寺 木造増長天像



竹林寺 毘沙聞天像



愛染明王像

燃えさかる 情熱湛ふる み仏の 鈴の音聞こゆ ここに来れば  
情熱・愛欲情欲を菩提心と変える。肉身は赤色で、三眼六臂 左手に五鈷鈴をもつ。

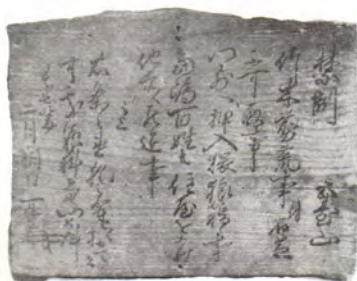
制札

漆書の 制札あはれ 一豊公 寺に下せる 狼籍のこと

狼籍・ろうぜき。無法な行動。



竹林寺 愛染明王像



竹林寺 制札

禪師峰寺 三十二番

金剛力士像

玉眼の まなこいかつく 右掌前 天衣裳裾も 風になびけて



禪師峰寺 木造金剛力士像

雪蹊寺 三十三番

十二神将像

怒髪立ち 唇赤き み仏の ひねるみ腰の 動くともなき

十二神将・薬師如来のまわりにしたがつる眷属。くびら・ばきら・めきら・あんでいら・がにら  
さんていら・いんだら・等十二。



雪蹊寺 木造十二神将



雪蹊寺 木造十二神将

靈宝殿

仏たち 立たせたまへる 宝殿の 山のこぬれは 鶉の朝鳴き

種間寺 三十四番

本尊薬師如来像

(本堂新築中)

巧らの 音はもはげし 薬壺 持たす仏の たちかえりませ

巧・たくみ。大工。右手は屈臂、掌を前にして施無畏印を結び、左手は薬壺を持つ。

大般若経

大般若 書写し給へり 秋の月 有縁の人の 心照らさむ

清瀧寺 三十五番

薬師如来懸仏

与願印 結ぶ仏は 人の世の うづく命を かねて知り給ふ

うづく命・病気で苦しむ命。かねて・あらかじめ。

阿弥陀如来懸仏

銀鍍金 円き銅板に 坐す仏 をさな児に似て 愛らしきかも

坐す仏・阿弥陀坐像を鋳でとめてある。



清瀧寺 薬師如来懸仏



清瀧寺 阿弥陀如来懸仏

青龍寺 三十六番

愛染明王像

愛欲の相 もてる貌の み仏を 内に画きて 滝壺を見る

愛欲・あいよく。愛したいと思う欲望。貌・かたち。内・うち。心。

波切不動明王像

あへぎつつ 登りつむれば み仏に 心ひかるる 石像不動明王

岩本寺 三十七番

み仏の 庭の無患樹 黒き実を 一つ拾ひて われ去らんとす

無患樹・むくろじ。落葉喬木。葉は羽状複葉。六月開花し球状の核果を結ぶ。

神 像

冠の 巾子はも高し みはるかす

まなこいかつき この御神像

巾子・こじ。髻をこれに挿し入れる。はも・

感動の助詞。はまあ。みはるかす・はるかに見渡す。  
いかつき・いかめしい。

面しろく まなざしやさし 虫の喰ひ

膝を破りて 坐してまします

面・おも。顔。まなざし・めつき。



岩本寺 神 像



金剛福寺 三十八番

紫式部逆修塔

足摺に かくて遍路の 杖ひけば 逆修塔にも 遇ひにけるかも

逆修塔・ぎやくしゆうとう。生きてゐる時死後のために立てる塔。髪を埋めた。髪は女の命。

ひそやかに 式部も浄土を 願ふらし 補陀落の海辺 波静かなり

ひそやかに・人目を忍んで。補陀落・ほだらく。観音のすむ極楽浄土である。足摺の海は補陀落に通じる。式部・紫式部。源氏物語の作者。



金剛福寺 逆修塔紫式部

三面千手観音菩薩像

僧の開く扉ゆ現るる　み仏の黄金に染むる　三つの面輪よ

補陀落の浄土の国より　海渡り　まかで給へり　このみ仏は

まかで給へり・いらっしやった。

### 角　盥

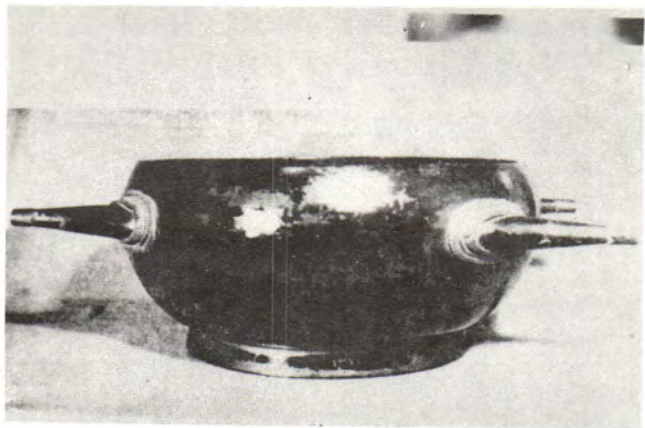
日常の　手洗器と　人の言ふ　取手を付けし　角盥かも

取手・とって。器具の手に持つ部分。盥・たらい。

### 仏餉鉢

ごはんさんの　お茶碗かと　言ひすてし　人々あり　大き仏餉鉢

仏餉鉢・ぶっしゅうはち。



金剛福寺 角 罌



金剛福寺 仏 餉 鉢

延光寺 三十九番

眼洗井戸

あしびきの 山ふところに 水かれて 加持のしるしの 眼洗の井戸

あしびきの・山の枕言葉。加持・大師加持の井。

銅 鐘

手細工の 如く思はる 黒き鐘 延喜十一年 鑄弥勒寺鐘

延喜十一年・千六十三年前。弥勒寺からどうゆう経路をえて伝わったか不明。

鉞 子

敬石の 伝ふ鉞子を さりさりと 鳴らさんと思ふ 法会の座に

敬石・人の名。鉞子・ばっし。鐙の広い帽子形。頂上に小孔をあげ紐を通す。二個を一對とす。擦り合して鳴らす。

豊楽寺 高知県長岡郡大豊村

木造阿弥陀如来像

合歡の花 散れる山路に 薬師堂 阿弥陀ほとけに あひ奉る

合歡・ねむ。



延光寺 鈸 子



延光寺 銅 鐘



延光寺 眼洗井戸

木造薬師如来坐像

立ち群れて　をがむみ仏　窓暗く　音をも鳴くかな　谷の鶯

鶯の　谷間を渡る　声聞きて　み仏たちは　ここにゐますか

薬壺　持たせ給へる　み仏の　ふくよかな　頬を　灯影ながるる

白毫に　昼の光の　あふれつつ　思惟してゐます　釈迦のみ仏

白毫・びやくこう。ひたいに白毛のまいたかたまり。

定福寺　高知県長岡郡大豊村

木造地藏菩薩像六体

あふぎ見る　脇見仏と　笑む仏　ただ動くとも　あらぬみ仏



観自在寺本堂

観自在寺 四十番

薬師如来像

薬壺 もたせたまへる み仏を

おろがみまつる この夕暮に

金剛力士像

まかげして 拝む仏の 金剛力士

腹のへこみて ひもじき仏

まかげ・手をかざす。

本堂

うつし世の み仏の国 今日よりは

菩提の道場 白亜のみ堂



龍光寺 四十一番

大師堂

乗り捨てし 心静めて み仏の 黒き御衣に あひたてまつる

御衣・みけし。仏の衣。

十一面観音像

厨子の扉 ひらきしままに み仏の 黄金の天衣 なびき給ひぬ

天衣・てんね。

仏木寺 四十二番

大日如来木像

豊豔の 面輪の匂ふ み仏の 厚き唇に 大きそのひとみ

豊豔・ほうえん。ふつくらとして美しい。

持ち物も 失せて坐します み仏の 剥落の袈裟 古り給ひけり

剥落・はくらく。はげ落ちる。古り・古くなる。

み仏の 印を結べる 右手の指 ゴム手袋の 如ふくれるし

### 弘法大師木像

み仏の やさしまなこゝろ うつむきて 衆生の上に 落ち給ふらし

まなこゝろ・目つき。まなざし。旧き大師像。

鮮しき あけの袈沙召す み仏の ただたくましく 若きほほゑみ

鮮しき・あたらしき。修理した大師像。

### 仏木寺を出でて

独り歩む うつらまなこに うつらうつら 浮びて愛し み仏の顔

うつらまなこ・うつらは夢でなく現実。うつらまなこは現実の目。うつらうつら・よくよく。愛しかなし。こいしとう。

明石寺 四十三番

不動明王像

疲れ果て 宿るみ寺の 明石寺 不動明王の 火焰の前に立ちぬ

熊野曼荼羅図

しくしくに 熊野曼荼羅 尊けれ 仏も僧も 俗人もゐて

しくしくに・頻く頻くに。しきりにの意。この図は、天平六年寿元尊者という修験者の信仰を表わす。



明石寺 熊野曼荼羅図

毘沙門天像

木魚打つ 音の響きに 毘沙門の 邪鬼ふむ脚の よろめくを見つ

本堂の廻廊

正面ゆ おがみまつりて 背面ゆ 更におろがむ このみ仏

背面ゆ・はいめんゆ・うしろから。

未明の大師堂

み仏の 在はす廻廊 かたかたと 板ふみならず 寂光の中

寂光・じゃくこう。ひっそりしてさびしい光。

金剛力士像

開きたる 大き手指の ありありと 見えくるなべに 明くる仁王尊

見えくるなべに・見えて来るとともに。明くる仁王尊・夜があげてくる仁王尊。

仁王門上甲氏奉納ふご

新しき 藁ふごの有り 百一歳 宇和島新城 亀太郎作

ふご・喬。藁ふご・わらで作った土を運ぶ農具。宇和島新城・地名。

「め」の字の貼紙多きを見て

眼の苦患 いやせ給へと「め」の文字を

年齢の数ほど 書けり亥年男

苦患・くかん。くるしみなやむこと。年齢・とし。

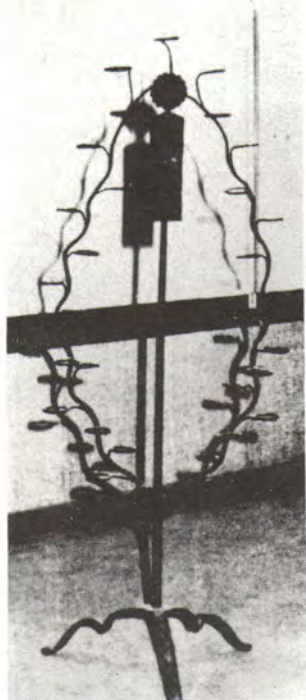
大宝寺 四十四番

巨大なる 杉の群ら立つ 山を背に 観世音菩薩 立たせ給へり

三十三燈台

献燈の 法具かしこし 唐草の 鉄を曲げたる 燈台嘉吉三年

献燈・けんとう。神や仏にささげる燈明。嘉吉三年・五百三十五年前。



大宝寺 三十三燈台

金剛力士像

時既に 享徳四年 ながながと 刻もつ仁王よ 瑠璃のまなざし

享徳四年・五百二十年前。刻・とき。

岩屋寺 四十五番

不動明王像

懸崖の 下たけび立つ 不動尊 霊鳥の声 鳴きとどまらず

懸崖・けんがい。切りたつたがけ。霊鳥・れいちよう。ふしぎな鳥。めでたい鳥。

浄瑠璃寺 四十六番

仏足石

線刻の 感傷さそう み足跡 千幅輪に たまる雨水

感傷・かんしょう。ものに感じて心を動かす。

柏 榎

まつはれる 蔦はひ登る びやくしんよ 遠き葉先の 空色に消ゆ

柏榎・びやくしん。



浄瑠璃寺 仏足石



浄瑠璃寺 柏 榎



八坂寺 四十七番

木像阿弥陀如来坐像

今現るる み仏と思ふ 黄金色に み面み肌が 燦と輝きて

現るる・あらわれる。燦と・さんと。あざやかに光りかがやくさま。

遍路道しるべ

道端に・草鞋をはく 遍路立ち 右へ下ると 道しるべする

草鞋・そうあい。わらじ。



八坂寺 木造阿弥陀如来像

宝篋印塔

紫陽花の 白き花びら 露もちて 宝篋印塔に 影うつし居り

宝篋印塔・ほうきょういんとう。中に経を納める。

苔の生す その格狭間に 土蟻の 土穴つくり しきりに出入す

生す・むす。はえる。格狭間・こうざま。塔身の下の台。



八坂寺 宝篋印塔

納札

永友弘妙奉納の金の納札　ゆくりなく　八坂の寺の庭に戴く

ゆくりなく・思いがけなく。

西林寺　四十八番

金剛力士像

盆の如き　み顔に叫ぶ　仁王尊　降りしきる雨に　遂に拝まず

胸骨の　高くさかだち　のど骨立て　叫ぶを見れば　餓鬼とも思ふ

杖の淵

大悲大師　ひでりを救ふ　杖の淵　釣人の見ゆ　時は流れて

浄土寺 四十九番

本堂国宝

なめらかに 蓑流れて 降る雨の 曇れる空に 浮き立つみ堂

蓑・いらか、むながわら、



浄土寺 本堂と空也松

仁王門に子らと語る

酒を呑む 狼藉の父に 別れ来し 子よ仁王と遊べ 希求も失せで

狼藉・ろうぜき。無法な行動。希求・ききゆう。願いもとめる。

酒気を帯び 母をなぐれる 父を離れ 子は来て遊ぶ 仁王のそばに

酒気・しゆき。酒をのんで勢いよくなる。

子らが拾ふ 賽銭の数よ 転落の 果てにえらぶと いふも悲しく

転落・てんらく。ころびおちる。

かの年の 夏柑たうぶる 春なりけむ ここ浄土寺に 妻と参れる

たうぶる・たべる。

梅雨に濡れ 昼の光の ただよひぬ かげともの仁王 透して見ゆ

かげとも・上代語で太陽にむかう方。南の面。

空也上人像

お念仏 生るる仏よ 上人が み目かすみつつ 山越えますか  
生るる・あるる。うまれる。

五月雨に 日に日に濡れて 松立てり 空也の松は 苔むしながら

日に日に・ひにけに。

ひたぶるに 念仏となへ 今もなほ 歩み給ふか このみ仏は

ひたぶるに・ひたすらに。





繁多寺 五十番

繁多寺の み寺の庭に 落つる雨 雨あししるし 夕晴れくれば

しるし・はつきりしている。

歡喜天像

聖天に 経となへつつ しまらくは 雨の暗きに おろがみるたり

聖天・歡喜天。かんぎてん。象頭人身の像。夫婦・身相合の姿。しまらく・上代語しばらく。

ふたまたの 大根の見ゆ み仏に 大願成就の しるしなるらむ

薬師如来像

くくくくと 群鳩鳴きし 畑寺の 薬師仏と 梅雨を忘れず

鳩の群 縁にとまりて なげまきを やれば啄む 紅の口動かし

石手寺 五十一番

弘法大師像

五鈷杵持つ 大師の意志の 強くませば 結ぶ唇 紅さす如く

み仏に 根気をふるひ 勤行す 自が煩惱を 救はむために

勤行・こんぎょう。おつとめ。

金欄の 御厨子の前に 臘燭の 百千の焰 ゆらふ朝明け

ゆらふ・ためらいゆれうごく。

薬師如来像

薬壺 持たす仏の あり立たす 姿思ひて 祈る朝明け

あり立たす・お立ちなさる。

木造菩薩面天人面

石手寺の 現に想ふ 練供養 天人面行き 菩薩面も行く

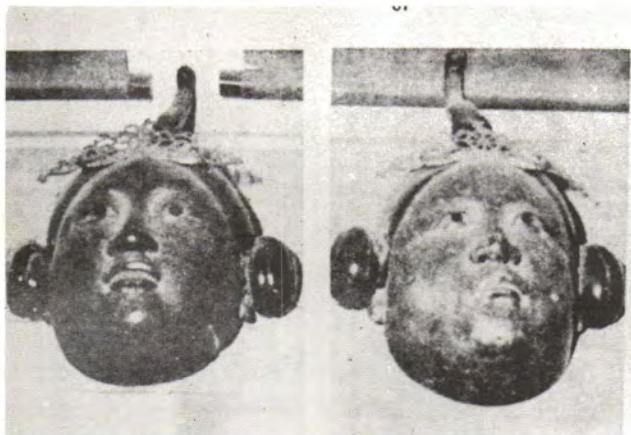
木造獅子頭

石手寺の 大獅子頭 つくづくと

見入りたりけり 目玉飛び出るし

三重塔

動くとも なくて流るる 雲ありて 三重の塔を 妻とあふぎぬ



石手寺 木造天人面



石手寺 木造菩薩面

線香の　白き煙の　流れゆき　うづまきの上に　三重の塔

あぢきなく　まなこあぐれば　三重塔　風吹きやまず　鳩の羽うつ

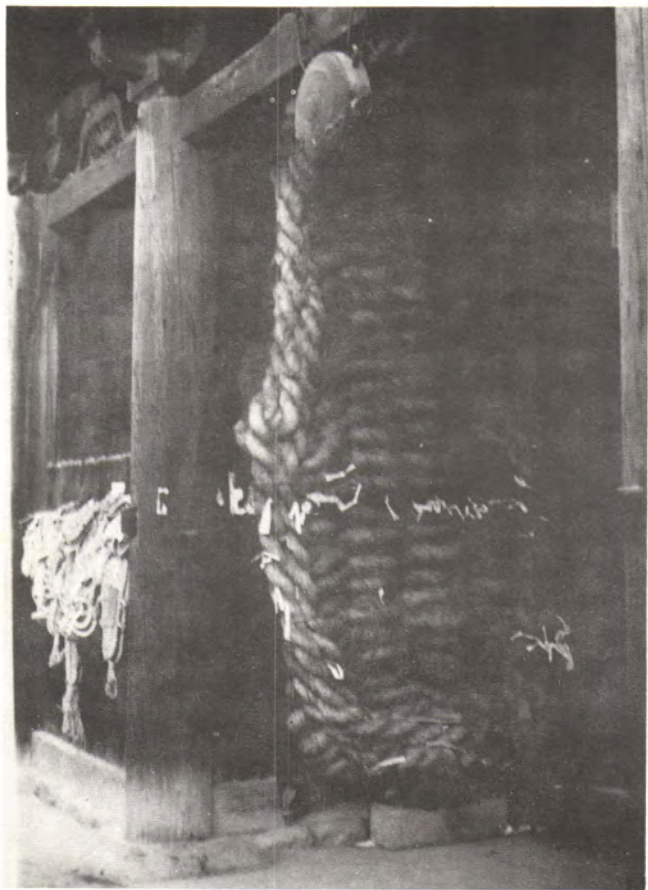
あぢきなく・心にそまずなにげなく。

### 金剛力士像

金網に　透してまみゆ　仁王尊　その一喝ぞ　ものすさまじき

一喝・いっかつ。大声でとなりつける。

奉納の大草鞋　門いっばいに　吊したり　かくて仁王の　足もちひさく



石手寺 金剛力士大草鞋

線香の　白き煙の　うづまきに　信心の人の　影の消えゆく

石手寺に　どよめく遍路の　群もゐて　我も遍路の　一人なりにき

わが友の　遅しかりし　姿思ひ　道後の寺に　雨に詣づる

太山寺　五十二番

宝生如来坐像

幻想の　まなざしやさし　剝落の　頬の班の　しるきみ仏

班・はだら。まだら。



山門四天王像

あさ白き 顔にまなじり 凜々とたち よろふみ足に 邪鬼踏み給ふ  
よろふ・甲冑をつける。

赫顔にて 赤き唇 ひきしめて 踏まする邪鬼の おとなしき顔

赫顔・かくがん。赤い顔。

仁王門

胸骨の あらにはに顕ちて 裳の裾の 風になびけり 金剛力士

円明寺 五十三番

きりしたん燈籠

燈籠と 言へど火袋なく  
み仏を きざみて立てり  
独り悲しく



円明寺 きりしたん燈籠

銅の納札

厨子に打つ 慶安三年の 納め札 四国遍路の 運命なりけり

慶安三年・三百二十四年前。運命・さだめ。

本尊阿弥陀仏と厨子

厨子に見る 葡萄にリスの 立つ姿 雲花の中に 覚ゆ壮嚴

水天宮

この梅雨に なほ雨降らば かしこしと 僧は閉しぬ 水天宮の扉

左甚五郎作龍

卷雲を 爪立つ足に けたてつつ 龍は躍りぬ 青きひげはる

勢至菩薩像

勢至の背 直ぐよといひて み仏の 脚いくたびも 立てなほし給ふ

延命寺 五十四番

梵 鐘

宝永の 銅鐘青さび 浮彫の 飛龍ややさし わが歩み来て

四大明王像

脇仏の いかしく並ぶ 幾軀か 忘らるる如 立ちおはすかも

いかしく・いかめしく。

燈の 光失すれば み仏の おのおのものが 孤影をたもつ

降三世明王像

烏摩が胸 ふみてたけべる み仏の かぎりも知らぬ 悲しき思ひ

南光坊 五十五番

大師堂

人さには 縁側につどひて 将棋さす 大師の慈光 鳩さえ群れて

さには・さわに。多く。

南無大師 おろがむ前に 憩ふなべ 将棋さす人 遂に忘れず

憩ふなべ・いこふなべ。休むと、ともに。

うつし世に あればか悲し 物思ひ み寺み寺に 詠みつぎ行かむ

泰山寺 五十六番

石 垣

幾千と 積み重ねたる 丸石の 寺の石垣 城砦にも似て

城砦・じょうさい。とりで。城。

その昔 お齋の僧の 馬の背に 積みて帰りし 総社川原の石

お齋・おとぎ。僧が檀家の仏事に行く。

駐車場に一基の墓を見て

墓表ニ曰ワ、菅原姓久松八左衛門尉長孝之墓後人憐ミチ而勿穿レ也ツ。

しめつけし 鉄の鎖の あと鑄びて 墓石は立てり 供花も枯れて

長孝・今治藩士、賢沢禁止令にふれて沖の島に流され墓は鉄鎖でしばられる。

憐れみて 穿つなかれと 書かれたる み墓さびしも 道の辺に立つ

骨董屋の庭に見つけし石の膚  
思ひ兼ねつつ買ひしその石  
買ひしその石・泰山寺の僧買って申う。

これぞかの藩政俚約の令にふれ  
沖の島の流人長孝の墓

改修の道路普請にもらひ受け  
ふみ石にせしあはれその墓  
もらひ受け・骨董屋がもらつて。

### 鐘楼の天井

金色の日輪のまはり群青の八重立つ雲の  
飛びまがふらし

群青・ぐんじょう。青い色。



今治の 城の名残りと 天井を 見つつ朝けに 湧く情趣あり

情趣・じょうしゅ。おもむき。味わい。

本尊地藏菩薩像

僧に和し われ勤行す み仏の 金色の扉に 朝の安息

安息・あんそく。安らかにやすむ。

わが宿る 寺の朝けに 鐘ならし 遍路の群の 賑はしき一時

栄福寺 五十七番

本尊阿弥陀如来像

み仏の 慈光あかるく 木斛の つぶらに赤き 実さへおごそか

仙遊寺 五十八番

千手観音像

昭和二十二年山火に類焼す。

有難き み仏さへも 浮世には 火焰地獄に 遭ひ給ふらし

み仏の 千手のみ手も その脚も 欠けて火焰を 逃れ給へり

救済を 一途に願ふ み仏の なぜ火焰の中に 立たねばならぬ

作礼山は 虫も草木も しきみの樹 茂く咲く庭に 唱名となふ

草木もしきみの樹・草木もしきりに繁るにしきみの樹をかける。茂く咲く・もくさく。茂って咲く。

小堂のみ仏

滂洋の 海漂ひし み仏ぞ ここにみませる わが心傷し

滂洋・ほうよう。豊かに広いさま。傷し・いたし。心がいたみ悲しむ。

国分寺 五十九番

薬師如来像

薬師仏 るます扉に 随ちてゆく 我を救へと 額づき申す

不動明王像

燃ゆるほむら 剣を控へて たけび立つ

ほむら・火炎。ほも・感動の助詞。よ。

腰をかがめし 青不動はも

不動明王画像

腰かがめ 剣をもたせる 青不動 火焰猛くも 靡かひにけり

弘法大師絵像

ただひとつ 独鉦をもたし 揺れ動く

大師のみ手に 触れ敢へぬかも

み手に触れ敢へぬかも・み手に触れたいものだなあ。

少したまる 松葉を燃やす その匂ひ いよいよ清き 広前があり



国分寺 不動明王画像

弘法大師筆漢之崔子玉座右銘

無<sup>レ</sup>道<sup>フ</sup>人之短<sup>ヲ</sup> 無<sup>レ</sup>說<sup>ク</sup>己之長<sup>ヲ</sup>。

彫りつけし 刀いちじるし 座右の銘 のこす大師が 風格のあと

風格・ふうかく。気高い人品。

横峰寺 六十番

金銅蔵王権現

土ゆ出でし 金銅蔵王権現 古色おび み顔もみ身も 豊なりけり

土ゆ・つちゆ。土中から。金銅蔵王権現・平安末期石鏝修驗遺品。



横峰寺 金銅蔵王権現御正体

香園寺 六十一番

大師堂

幸あれと たくなる護摩木 燃えさかる

焔は遂に かすかになりぬ

宝寿寺 六十二番

孔雀文磬

むきあへる 孔雀文ある への字磬

蓮華撞座の 音きかましを

十一面観音像

自動車の そそく行きかふ 道に沿ひ

来しがか黒き み仏に遡ふ

み仏の 黒きみ膚に その御衣 見るにただただ 瞳吸はるる



宝寿寺 孔雀文磬

大隋求菩薩像

僧がひらく 扉にまみゆ み仏の 口べにの色 濡れたる如く  
見ゆ・まみゆ。お目にかかる。

み仏の 金色の泥 ほの匂ふ 落とさぬように 指そつと触る  
ほの・かすかに。



宝寿寺 大随求菩薩像





真念の遍路道しるべ

真念・元禄時代の僧、四国遍路すること二十余度。道しるべを立てること、二百余所である。

なでさすり まろき形の 頂をもつ たけ低き道標 晴れて芝生に

頂・ちよう、いただき。

宝寿寺 真念の遍路道しるべ

吉祥寺 六十三番

毘沙門天像

慾捨てて 参る仏に 有難うと いふ我心だけは 確かならむか

前神寺 六十四番

大師堂

夏蟬の とどく御堂に 鑿子打てば 目に顕ちてくる み仏の眉

混沌の 黒きみ面の 輝きに 朽ちざる意志の み仏寥し

混沌 こんとん。物事の区別のはっきりしないさま。寥し・さびし。さびしい。

本堂三體弥陀仏

内陣に み燈の影 揺れおれば 三體弥陀仏 仄かに仰ぐ

内陣・ないじん。寺で本尊をおくところ。

路銀思ひ 賽錢投ぐる 我なりき 旅の遍路は 佗しかりけり

佗し・わびし。心細い。

### 三角寺 六十五番

#### 觀世音菩薩像

うらやすに 堪へて産みしと み仏に 鳴きて告ぐるか 谷の鶯

うらやす・心安いこと。産みしと・安産したと。

#### 本堂

晩夏の日 空は照らさず 青葉翳り 本堂の褐色 鮮かに燃ゆ

翳り・かげり。かげの意。

#### 毘沙門天像

邪鬼の掌を 踏みて立ちたる 毘沙門の 燃ゆる円輪 うるはしきもの

文珠菩薩像

吼え立つる 口赤き獅子よ 乗る文珠 静かに観ず 酒肆と淫房

酒肆・しゅし。酒屋。

金剛力士像

楓の実 赤くしだるる 仁王門 仏の肱の 赤き剥落

しだる・たれさがる。

因縁を思ふ

岩屋道に たまたま逢ひて 山を攀づ かかる因縁 思ひ見るべき

攀づ・よぶ。よじのぼる。

我が荷物 たづさひ持ちて 登る女 かかる因縁 思ひたらむか

事故死する 弟の墓と 指せり かかる因縁 あへば悲しく

夫死に 六人の子 育つ寡婦 山門くぐる因縁 暗く漂ふ

安産にと 娘の腹帯を 買ふ母と 別るる因縁も 思ひ忘れじ

娘・こゝ。むすめ。

光徳院 愛媛県北条市

菩薩立像

腰の裳ゆ 流るる衣紋 ゆるやかに 翻波はしるし 大きみ仏



光徳院 木造菩薩立像

庄 愛媛県北条市

十一面観音立像

立ちながら 夢やみ給ふ み仏の み面もゆらに 影の動けり



庄十一面観音立像



菩薩立像

み庄より 讃岐にまかる み仏や 虫喰ひの脚 木台に凭しみて



庄木造菩薩立像



西山興隆寺 銅造如来立像

西山興隆寺 愛媛県丹原町

如来立像

通肩の納衣のみ掌の施無畏与願印 ひそやかに媪 唱名となへるし

光林寺 愛媛県玉川町

稚児大師絵像

月輪の 八葉蓮華に みはるかす 幼な大師の おん目の光り



光林寺 稚児大師像

金龍寺 愛媛県大洲市

木造吉祥天像

善通寺 立たす仏の 姉ごかと おどろきおがむ 吉祥天像

宝巖寺 愛媛県松山市

一遍上人立像

太き眉 結ぶ唇 合掌し 大地を踏ます あふぐ尊さ



宝巖寺 一遍上人立像

宗光寺 愛媛県五十崎町

木造阿弥陀如来像及両脇侍立像

光背の 彫りのきらめく 三尊の

玉のひとみに 何見給ふか

玉のひとみ・玉眼。

明正寺 愛媛県新居浜市

金銅旅壇法具

菓餅汁 仏に供ふ 旅法具

黒光りして 愛らしきかも

鉄 鉢

古色おふる 打物仕上げの 鉄鉢ぞ

ゆるく肩はり 尻まろきかも



明正寺 鉄鉢



宗光寺 阿弥陀如来両脇侍像

明正寺 金銅旅壇法具

長福寺 愛媛県吉田町

木造四国八十八ヶ所御本尊

温雅なる み仏たちに お賽銭を

かがみつつ投ぐ 洪水の如

出石寺 愛媛県長浜町

銅 鐘

清楚なる 銅鐘と申せ み仏に

鳳凰を排して 飛翔するさま



出石寺 銅 鐘



長福寺 木造四国八十八ヶ所御本尊

石丸家 愛媛県北条市

金銅誕生仏

土ゆ出でし この童身の 誕生仏 おぼろげにだに 夢にし見えこ



石丸家金銅誕生仏



香川 県

雲辺寺 六十六番

木造毘沙門像

毘沙門の ふめる鞆先 まるくあがり

苦しむ邪鬼は 足裏見せつつ

邪鬼・じゃき。悪神。

首すくめ 宝塔捧ぐる 毘沙門の

鎧の腹の 太くたくましき

宝塔・ほうとう。美しく飾った塔、仏が掌にのせる。

皮鎧 よろふみ腰を ひねりけり

眉立て怒る 毘沙門天は

よろふ・鎧を着る。



雲辺寺 著 者



木造頭上面四

藤原の 頭上面てふ ことごとくに 純頑怒明の想 かがよふみ面

藤原の・藤原時代の。頭上面・千手観音の頭上にあつた面。てふ・という。想・そう。人間の心中に  
絶えない妄念。

金剛盤

修法の時に金剛杵および金剛鈴を置く台。

朱漆の 縁をつけたる 金剛盤 蓮華座高く 金剛鈴置かむか



雲辺寺 木造頭上面



雲辺寺 金剛盤

燈籠

梅雨あけの かがやきの中に 宝歴の 二基の燈籠 立ちにけるかも

宝歴・二百十年前。

大興寺 六十七番

金剛力士立像

赤肌の み面燃ゆらし 胸そらし み腰曲げたる 金剛力士

薬師如来坐像

幻しや 現におはす 薬壺 影ぞきらめく み仏の膝

幻しや・まほろしだるうか、いやまほろしでない。現におはす・現実の薬壺である。

天台大師坐像 中国に生れ天台宗の開祖。

冴ゆる叡智 み面によろふ み仏を おろがみまつる 曙の空

叡智・えいち。さとく道理にあかるい。よろふ・備わる。



神惠院 六十八番

涅槃像

悲しみは 明るさ故の 涅槃像 とほきねむりの やすらげくあれ  
とほきねむり・永遠のねむり。

うつろなる 心にうつる 漆黒の 螺髪柔和の み仏の顔

うつろ・から。なかがない。螺髪・らはつ。ちちれてになの殻のような髪。

わが声に 釈迦牟尼仏と み名よべば 身は混濁の 底に落ちゆく

身は・自分の身は。混濁・こんたく。乱れにこる。

涅槃像 拝む書院の 窓に見ゆ 五月の花の 庭の花筐

花筐・はなかご。庭に咲いている花が、仏に捧げたはなかごに見える。



神念院涅槃像



神念院 涅槃像

あら涅槃 我身をすてて 何なきむ かたぶく道に 繁る本能

床に伏す 涅槃の釈迦の 御姿 このやすらぎや 極楽浄土

### 弘法大師像

赫顔赫怒 いかつきまなざし とめかねて ただよろよろと おろがみまつる

赫顔・かくがん。赤い顔。赫怒・かくど。激しく怒る。いかつきまなざし・いかめしいめつき。

新しき 赤き国起らんよりは 亡国の故に 大師の赤き み面は匂ふ

### 絹本著色弥陀三尊釈迦三尊

亡者たち 弥陀の浄土の 夢むすぶ 発遣の釈迦の み手離れつつ

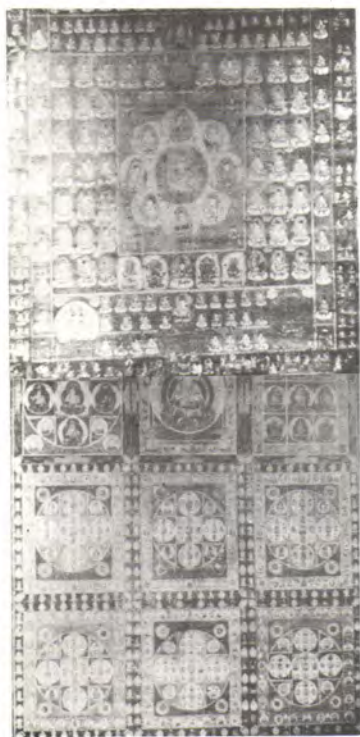
あかあかと 金泥の上に 截金の 燃ゆる発遣と 来迎の仏達

観音寺 六十九番

両界曼荼羅図

密教で灌頂修法のとき本尊に用いる。

金欄の 広き大軸 ひろげたり もろもろのみ仏 金剛界胎藏界

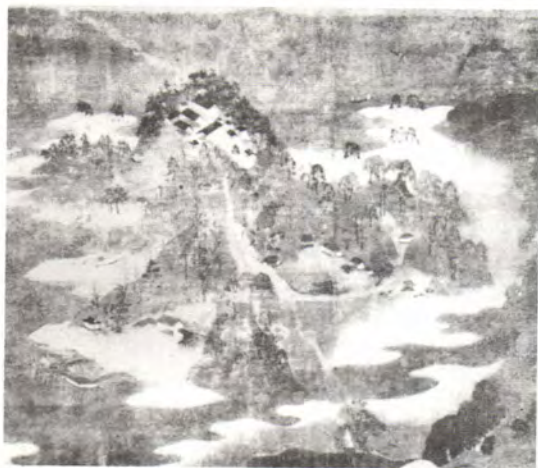


観音寺 両界曼荼羅図



十三重塔

さらさらと 手を触れにつつ  
そきたつ・遠く離れて立つ。  
仰ぎ見る 十三重塔  
天にそきたつ



観音寺 琴弾宮絵縁起

琴彈宮絵縁起

琴彈の 山の木立の まばらにて 建つる宮居の あちこちに見ゆ

不動明王像

くれなるの ほのほの中に たけび立つ くちびる赤き 不動明王

沓音天神

祈願成就の 白き布に 秋陽さして 沓音天神の 庭静かなり

本山寺 七十番

五重塔

夕焼の 五重の塔が 燃え立ちぬ 蓮華畑に みる時なりき

本山寺 独り遍路の 旅の空 五重の塔を 見上げてゐたり

石燈籠

鎌倉時代

とげとげと 摩はれば痛き 石燈籠 はたほのかなる 燈し恋ほしも  
はた・亦。やはり。

いにしえが 今のうつつに 重なりぬ ひびわれし火袋 長きを保ち



本山寺 五輪塔



本山寺 石燈籠

心導上人の五輪塔

風通る 若葉の庭の 五輪塔 光あはあはと 映る水輪に

馬頭観音像

念じまつる 馬頭観音 たけび立ち 馬のいななきか ただ取りかにて  
取りかにて・取りかねての意。

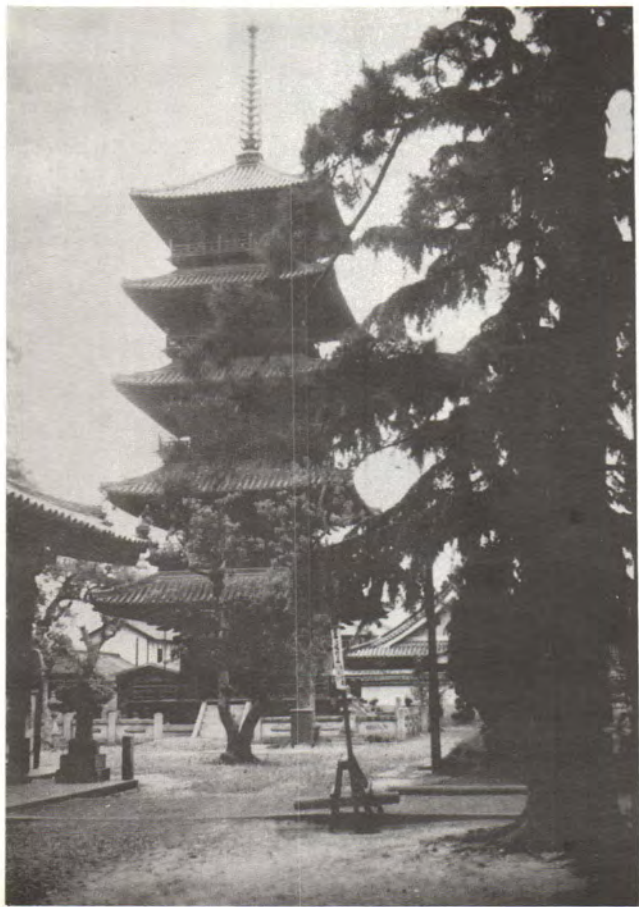
阿弥陀如来坐像

神宮寺より移されし仏。

人の世と 同じか寂し み仏の ここ護摩堂に 檐かりるます  
檐のき。

大日如来像

春浅き 光さし入る 五重の塔 玉眼の瞳 温たけきかも



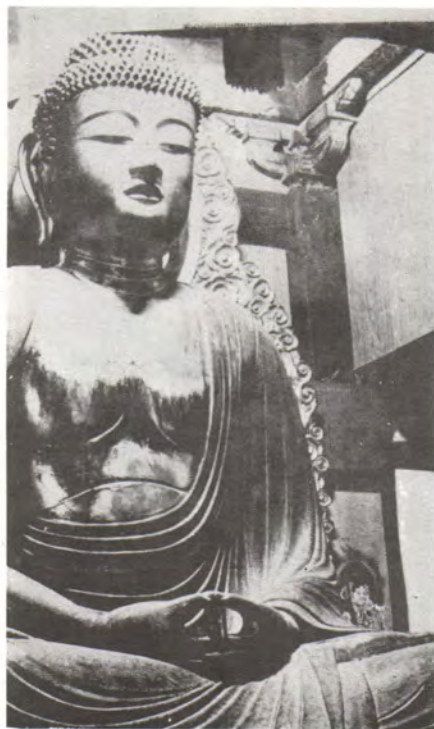
妙音寺 香川県三豊郡豊中町

阿弥陀坐像

春の如く 金色あふる 円き面輪 今のうつつを 思ひ給ふや

子と父が 偶然あひて ひたすらに はぎてつくれる この仏はも

はぎて・木と木とをはめて。



妙音寺 阿弥陀如来坐像



弥谷寺 七十一番

摩崖仏

剥落の 眉根よせたる 御仏を

おほひて樹々の 秋ふけゆかむ

剥落・はくらく。はげ落ちる。

六行の 南無阿弥陀仏の 彫りの中に

摩崖仏の 坐してまします

蜘蛛の糸に 枯葉ひとひら さがりゐて

み仏の頬に ゆれて動きけり

三尊の 摩崖仏の おん姿

崩果てゆかん 時の知らなく

崩果て・くえはて。くずれなくなつて。



弥谷寺 摩崖仏

地藏十王図

燦然と 朱絢爛の 地藏尊 鑽仰しまつる 十王官吏僧達

燦然・さんぜん。あざやかに光りかがやくさま。朱絢爛・あけけんらん。朱色でまぶしいほど美しい。  
鑽仰・さんぎよう。偉大さをたたえる。

出釈迦寺 七十二番

弘法大師像

たへまなく 人の迷と その本能を しづめ給はむ この仏はも

金剛杵 持ちて坐します 石像の 鏤める瞳 うけとめかねつ

鏤める・きざめる。彫りつける。

曼荼羅寺 七十三番

聖観音像

虫の食ひ さやかに見ゆる 観音の み手のはちすの 花咲かんとす



曼荼羅寺 聖觀音像



弥谷寺 地藏十王図

左手に はちすの花を もち給ふ 美目多彩の おん仏かな  
はちす・はす。

庭若葉 おがむ仏の 黒き面輪 照らす光の ともしきろかも

ともしきろかも・少なすぎることであるよ。

### 大日如来像

庭にさす 緑に映ゆる 日の光 ここ金色の み面に映えて

つく鐘の ひびきにかよふ み仏の 瑤珞の影 ゆらに燃ゆらく

ゆらに・玉が触れ合って鳴るさま。

み目やさし 黄金に結ぶ 口もとゆ み言のるがに 覚ゆるみ仏

み言のるがに・おっしゃるよように。

甲山寺 七十四番

薬師如来像

薬壺 持つみ仏に 子の病 身さえ細ると 母は嘆きぬ



甲山寺 薬師如来坐像

薬師仏 み手のぼる蜘蛛 おぞましく 炷く名香の 仄かなる匂ひ

おぞましく・我（が）が強く。炷く・たく。

甲 山

鶉の鳴く 弥生の山の 旅枕 ほのかに過ぎし 空ぞ忘れぬ

善通寺 七十五番

弘法大師御生誕千二百年祭

生れ給ふ 真魚のわくごゆ 千二百年 ひろがる楠を あふぐひろまへ

真魚・まお。大師の幼名。わくご・若い男子をほめていう語。

お開帳 はるかに拝む 御影像 光は冴えず 昼の燈

御影像・みえいぞう。おすがた。

大師三国伝来の錫杖

振るままに やがて消えゆく わが罪の この身さながら 仏とならむ

さながら・そのまま。

行衆僧 仏に捧げし 紙の花 赤きひとつを 我もいたたく

行衆僧・法会に参加している多くの僧

足利尊氏利生塔

尊氏の 利生の塔の 膚やせて 梵字の種子ぞ 欠けて寂しき

利生・りしよう。仏が利益を与える。



尊氏利生塔



地藏菩薩像

みほとけの 白毫と目に  
あまたらす・満ち足りたまう。  
あまたらす  
慈悲の光の  
波たつらしも



善通寺 地藏菩薩像

古寺の うすき光に たたなはる もくめ眼に顕つ み仏の袖

み仏に うつつともなく 投げかけし 賽銭の痕 あらはなりけり

痕・きず。あらは・外に現れていること。

### 五重塔

声と色 うづまき動く 広前に ひたにたちたる 昼の塔かな

ひたに・ひたむきに。一直線に。

### 吉祥天像

木目顕ち 縦に流るる み仏の 右の頬の辺に かそけき光



善通寺 吉祥天像

清らなる おん口もとに くちごもる み仏の声 心にひびく

みほとけの やさしきみ目や、 いつまでも われがまなこに ふれさせたまへ

厳くしく 奇しくも立たす み仏か うつそみの時 み手にふれつ

厳くしく・いつくしく。愛らしく。奇しくも・くしくも。不思議にも。うつそみ・現世。この世。

宝冠の 下にたれたる おん髪のは 肩にかかりて み目のやさしき

髪・くし。かみ。



善通寺 吉祥天像

胸近く 結びたまへる 腰紐の 動く光は 女性と申せ

口紅の あわくながるる み仏の 笑ませたまふや このゆふかげに

ゆうかげに・夕方の日の光に。

み仏の うごくともなき 口もとを かち色の影 ほのかにうごく

わが魂の 吉祥天に つかれけり 坐りておがむ 時はへにつつ

うつしみの 女とこそ思へ 吉祥天像 時ふるままに 拝みて居りぬ  
女・め。

物言はぬ 仏にませば ただびとの われに冷たく 思ほゆるかも

御影堂の あかしともしび み仏の み面のあてに 逢ふべきものを

あかし・御燈明の光。ともしび・少いので。あて・上品。優美。

立ちながら 物思ひ給ふ み仏の おんてのひらに 光こぼるる



平安の 吉祥天女の 御前に

伏して拝がみぬ 床冷ゆるまで

清純の いつき仏の み姿を

おろがみるつつ 冬日はくれぬ

いつき・おこそかな。

み仏と われ思へやは 現身の

女に逢ふごとく そくそく思ふ

一字一仏法華經序品

妙の字に 一仏画く 墨と朱の

古き句の 続くゆかしさ



善通寺 一字一仏法華經序品

金倉寺 七十六番

智証大師像

やすらげく ふたつの眉根 たゆたひに 半眼のひとみ 動くとも見ゆ

奇骨潔く 双瞳遠せんする み仏を をがみまつれば 去り難きかも

奇骨・きこつ。変つた骨相。遠せん・えんせん。はるかに見る。

智証大師像 帝室博物館より返る。

はるばると 寺にかへりし み仏を 秋の光に おろがみ申す

みちたらふ 蔽しきみ身ゆ あふれくる 力まばゆき 御姿かな



べにをさす 御唇ゆおのずから ことばもるがに うごかせたまふ

梵鐘

梵鐘の 撞座を仰ぎ 千年の 歩みにも似る 音はも恋し

大師堂燈籠

三日月の ねむるが如き 火舎の窓 かつて明暦の 灯のともりけり

明暦・三百年前。

燈籠の蜂

執金剛の蜂を思いて

もののふを 刺したる蜂か 天誅の 蜂にかもあらん 風のまにまに

天誅・てんちゆう。天が下す刑罰。



金倉寺 鐘 堂。



金倉寺 燈 籠

仁王門

つりあがる 金剛力士の まなじりに 残るみどりの あさきひとはけ

道隆寺 七十七番

薬師如来像

秘仏とて み厨子に立たす み姿を 面影にして おろがみまつる

日光菩薩像

木目たつ まろき柱の あはひより おろがみまつる 日光菩薩

月光菩薩像

み仏の 額に残る 金泥の み目さへ青く 心なごみく

なごみく・おだやかになつてくる。

書院の桜

吹く風に花びらの散れるを見て。

行く子なす 花びら落つる 寺の庭 このくれなるの 春の夕暮

なす・のように。

赤き萼 枝に残して 花びらの ちらちらと散る 踏むあとなしに

護摩堂

うつし世の 生業の響 へだてなく この護摩堂の 仏にとどく

仏たち このうつし世の 人の身を みそなはすらむか み堂のうちに



墓石

死者の住む ところか寺の 墓石の 群れゐてさびし 庭に落葉焚く

五輪塔

浅春の 空燃えあがる 楠の新芽 染む程痛し 道隆の命は

道隆・和氣道隆公、当山の創立者。

金剛力士立像

かの悪魔 やはすとすれど しかすがに まなこほつれし 金剛力士

やはす・おとなしくさせる。しかすがに・さすがに。

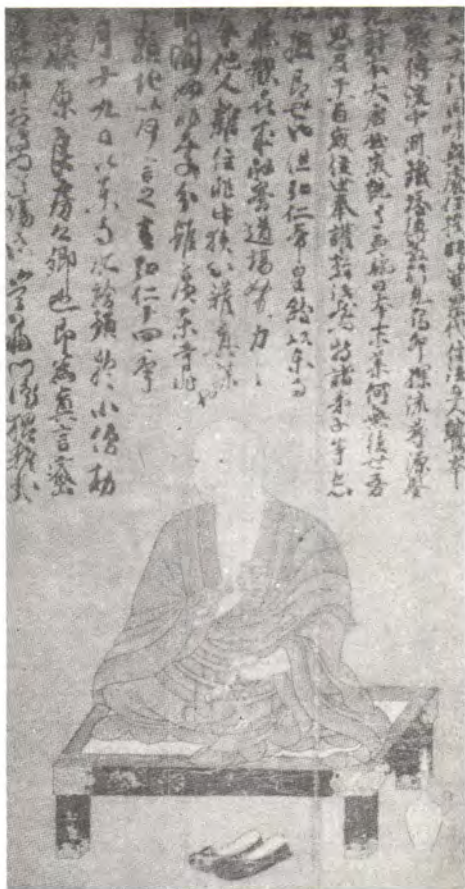
星曼荼羅図

七星閣 かがやく塔の 星下りく 明帝にあふ み園の座に



竹林上人画像

竹林上人の歌



弘法大師 画像 東寺

金銅十一面觀世音菩薩立像 長谷寺

透し彫る 光背に立つ み仏の 玉音もゆらに みちたる姿

玉音・ぬなど。玉のすれ合う音。ゆら・玉が触れあつて鳴るさま。

み目しるく 両頬のたるみ たづたづし 天衣の裾を 風になびけて

たづたづし・たどたどし。おぼつかない。天衣・てんね。

稚児文珠立像 善通寺

まゆねびき み目のやさしき 気色かな 胡服をまとふ 稚児のみ仏

まゆねびき・眉をかくこと。気色・けしき。顔つき。胡服・こふく。えびすの服。

両界曼荼羅図 教王護国寺

李真らの 描く曼荼羅 こんりょうの うつす仏に たちならぶ人

李真・大師は唐で画家李真の描いた両界曼荼羅図をもち帰られた。この図は室町時代の作品で美しい。

孔雀明王像 仁和寺

金色の 孔雀におはす 明王の うけとめ給ふ 人の災難

おはす・乗っておられる意。美麗な孔雀の上に鋭い描線での確に描かれた明王が乗っておられる。災難・つまづき。

惠果阿闍梨像 教王護国寺

円頂清涼の姿よ 唐の夢 おのづからさめて 大師伴ふ

円頂・えんちよう。髪をそった丸い頭。僧の頭。ここでは惠果。

十一面観音立像 善通寺

み厨子ゆり 念持仏の 観音を おがみまつらく 淡き灯影に

ゆり・よりに同じ。灯影・ひかげ。ともしびの光。

五大虚空藏菩薩像 西南院

み仏に 求聞の御修法 奉る 超人の大師 偲ばゆるかも

求聞・大師は出家前求聞持虚空藏の法を伝授され、この菩薩の真言を唱え無限の記憶力とその法験を体得された。修法・ずほう。密教で加持祈禱をする法式。

木造四天王立像 金剛峰寺

皮頭巾 皮の鎧を 身によろひ 岩坐を踏ます 怒る仏達

四天王像・ヒノキの一木から彫出されたもの。ほつてりとした太目の体軀。怒が類型化されている平安中期後の作。

つぶらなる み目のかがやき ちいろのかすむ諸仏ゆ 怒号立ち来る  
つぶら・丸いこと。

稚児大師像 円満院

あくがるる 心のうちの 法の花 み目の光も ひたむきの涙  
円相の中、大きな蓮華座に跪坐し斜め右にむき合掌する童児形。

弘法大師画像 教王護国寺

床に坐す 大師の像に 墨の痕 ひそかにおもふ 大法同味

この像は東寺談議所本尊で、几床に坐す。上下の余白に後宇多法皇が大師遺告の中、東寺に関する項を自ら書写された。



愛染明王 金剛三昧院

獅子も吼え 明王もたけびつつ 紅の 煩惱の火の 消えゆくらしも

愛染明王・大師によって請来され信仰された明王。獅子冠をいただく一面六臂真紅の忿怒明王である。人間のもつ煩惱をさとりへと転化する。

五秘密菩薩像 醍醐寺

人の本能の やがて成る 菩薩金剛の 一つのはちすに坐し給ひける

本能・さが。人間の本能による欲望。怒・触・愛・慢を象徴したもの。主尊は金剛菩薩。脇侍四菩薩。

阿弥陀如来像 成福院

来迎の 印を結べる 阿弥陀仏 杖つく人の ふつふつと逝く

来迎・らいごう。人の死にぎわに仏が現われて、極楽浄土へ迎え導いてくれること。この画像は金泥の模様のある赤色の衣を着て来迎引摺の印を結んだ独尊の阿弥陀立像。

如来像 金剛峰寺

円相ゆ ごこうかがやく そのまへに 今成道の 釈迦のみ仏

如来像・毎夏金堂で行われる不断経の時かけられる。円相やごこうは、釈迦成道の瞬間を示す。

銅造阿弥陀如来立像 高野山不動院

茜さす 衣紋の襷の 影そふる たちてすがしも み手にみ腰に

茜・あかね。夕焼の空のようなくすんだ色。茜さす・くすんだ色がうつる。衣紋・えもん。着物のえりの合わせるところ。そふる。増す。

おもはゆく ほほえみ給ふ み仏の 衣紋のひだの 重くきびしき

おもはゆし・恥ずかしい。

大日如来坐像 醍醐寺

印度仏 にほひを移す 目鼻だち 又ふと思ふ かつて見し人の貌

印度仏・丸顔のかたち、眉から鼻梁にかけての造形にインド的な相好の形式が残る。貌・かたち。容貌。

善女龍王像 金剛峰寺

雨はらむ 雲のうづまき ふきかへす 龍王のひげ 官人の袖

龍王・大師は天長元年神泉苑で雨乞いの修法をし、雨を呼ぶ善女龍王が出現した。

不動明王立像 金剛峰寺

怒相なす み顔のえくぼ 目にたちて 笑ます仏と 見る心よあわれ

なす・何かの動作をおこなう。する。あはれ・ああという感動の語。

上身の 怒りにゆらぎ 裳の襷の わななきたぎる 不動明王

上身・うわみみ。わななく・ふるえ動く。

威圧する 仏と申せ 救済の 徹るおもざし おもほゆるかも

徹・とおる。ゆきわたる。おもざし・顔かたち。

明王の 立ちます前に 人の世の 宝の賽銭の 高きうづまき

宝の・参詣人のささげた賽銭がうづたかくうづまく。

勤操僧正像 普門院

香川県立文化会館展覧会にて

気を吐きて 眼光爛々 手指さへ 躍動したまふ おん姿はも

勤操・大師の師。従つて剃髮得度する。諸宗の碩学で弁舌ゆたかであった。爛爛・らんらん。眼がするどく光るさま。

木造弘法大師坐像 金剛峰寺

右にむき 左に廻りて おがみたてまつる 大師念々の 尊きみ姿

念々・ねんねん刹那。

にごりなき はちすの花の うてなもて 御衣のすすけ ふきまつらばや

うてな・がく。葎。緑色をしている。御衣・ころも。浅黒くすすけていた。ふきまつらばや・ふき申したいものだ。

底深く 駭りを知らぬ まなざしを 大師永劫の その慧智とぞ

駭・かけり。目のかすむこと。永劫・えいごう。永久。その・大師の。慧智・けいち。ちえ。とぞ・ぞは上の慧智を強める助詞で下に思うを省略している。



稚児大師像与田寺

生誕千二百年弘法大師と密教美術

庵治の浦 地藏菩薩の 御前に 命悲しき 人をこそ祈れ

命悲しき人・一月半の命と言われる。

新しき おりん鳴らせば み仏は ほほえみ給ふ 朝明のなか

おりん・昭和四十八年九月十一日奉納、病氣全快のため。

脳軟の 友を和せと 我が祈る 召す金襴の 撚りかくごとく

和せと・やわせと。やはらげて下さい。なおして下さいと。撚りかく・よりかく。よりをかけ  
る。

一本松 願無地藏像

願の痛み 今かも晴るる 思ひして 願無地藏 おろがみまうす

願・あじ。



オシブルの 音すさまじき 朝夕を このみ仏は ほほえみ給ふ

オシブル・土をおして地をならすブルトーザ。昭和四十八年三月。

ご利益はいただいてみます もつたいない おんかかかびさんまえ  
いそわかと 媪は詠ふ

あたらしき 箱に立てたる 蠟燭の 焰のどかに 立ちのほりけり

箱・ガラスばりの箱。信者が奉納する。

菊の花 あてに並べる 金欄の 幕垂れてるつ み仏の前に

あて・貴。上品。優美。るつ・いた。

み仏の 持たる供物を たらちねは 自が児にあたへ 有難うと申す

持たる・持つておられる。供物・くもつ。おそなえ。たらちね。母。自が児・背負っている児。

弥惣五郎は 如何なる人ぞ み仏を 再建せしてふ 天保十二年

弥惣五郎・天保十四年卒。

弥惣五郎の 愛しき妻は 藤田山 みつつ故里を 恋ひにけらしな

愛し・かなし。身にしんでいとおいしい。藤田山・地藏の東にある山。藤田山と名付けて故里藤田の親を偲ぶ。

誰が捧げし みどりの幕ぞ 初夏の 御堂すがしく ゆれるたりけり

誰・た。だれ。

誰が家の 病やはすと 持行きし 手錫杖ならん 今朝あらなくに  
やはす・和らげる。あらなくに・ないのに。

遠見山 近くながめて み仏は あぐる烽火を 如何にみたまふ

遠見山・とおみ山。庵治にあり昔ことある時、烽火をあげた。烽火・のろし。

八栗寺に 賜ひし御酒ぞ み仏に さらに捧げて 我ものみにけり

人変り 世は移れども み仏は 慶長四年ゆ ここにたたせる

人変り・人は生死世は変転するが、み仏はいつもここにたっておられる。

この爺の ささげしお茶の 色濃く み仏のまへに たぎりたちたつ

たぎりたちたつ・沸きかえり飛び立つ。

道の辺の 地藏菩薩は この供物 どここの誰が子に たべたまふらん

たべ・たぶ。与える。

おきくさん おもんさん おさわさん おとくさん くさぐさの花をみ仏にあぐ

くさぐさ・いろいろ。毎日新しい花があがる。

賽銭の 箱ま新しみ み仏に 捧げし人ぞ なつかしきかな

ま新しみ・新しいので。

手錫杖 ささげいただき もろ手なで 肩をこすりて おろがみ申す

ささぐ・両手で頭の上にあげる。手錫杖でなでこすると、病気がなおるといふ。

大菊の あやなすきぬの 涎掛を 今日み仏は 召してまします

大菊のあやなす・大菊の模様を染めた。

み仏に ありがとうと 手をあはせ 供物をもらふ 子の手よろしも

供物・くもつ。仏に供える物。供物は後から参った人が戴いて帰る。

むらぎもの 心いたみて み仏に 酒を止ませと 祈る妻はも

むらぎもの・心にかかる枕言葉。止ませ・やませ。やめさせて下さい。

わが先祖 石の仏と なりまして 庵治の野中に 立ちゐますかも

先祖・人間の魂の永遠性を仏の姿によって思ふ。

はまゆふの 庭にさく花 み仏に ささげまつると 今日きつるかも

はまゆふ・潮の岬から移した花が初めて咲く。

慶長の 昔ゆこゝに 四百年 松は緑を かえず立ちたり

松・幹の中は白蟻で空洞になっているが、地藏の側に守るが如く立っている。

あさみどり 屋島のなだり せになして 一本松の 幹たくましき

なだり・傾斜。せになして・背中に見せて。

絶えまなく　くりかへしつつ　心経を　息の緒につぐ　その力かも

心経・般若心経。息の緒に・いきのをに。いのちにかけて。つく。つづいて二時間唱える。力かも・その力が私にもほしい。

野の果ての　虫けらにさへ　お歡喜の　このもろ声の　響けとぞ思ふ

虫けら・虫類にも仏性がある。お歡喜の声で成仏してもらいたい。

松にのぼり　み仏の名を　となへたり　男の子ぞ思ふ　翁語りに

翁語りに・九十四才の翁の語るに、一本松に登って菰刈村馬守、

藤原重家と呼んでいた男がいたのを若い時見たと。

大山の　神を仰ぎて　み仏は　ま北にむきて　立たせたまへり

大山・だいせん。たいせんをまつる大山の山が北にある。北向の地藏菩薩。



金欄の 涎掛召して あさあけの

地藏菩薩は ほほえみ給ふ

あさあけ・夜明け。明け方。

野の御座に 四十の同行 お歡喜す

そのもろ声は 稲葉こゆらし

お歡喜・毎年八月二十三日同行相寄って勤行をする。



一本松地藏お歡喜

み仏の 動く命に しまらくは 我れが命の ふれあふやすけさ

しまらく・上代語とばらく。命・いのち。仏の我に働きかける仏性と我のまごころがふれる。

ほほゑみて 物言はまほしき おん姿 秋の日影に たちおはすかも

物言はまほしき・物いいたそうな。たちおはすかも・み仏は立っていらっしやるわい。

旅人の 胸にふれたる み仏の 上にかがよふ 白雲の影

胸にふれたる・心に感動した。かがよふ・きらめく。影・かげ。姿。

み仏に 錫杖あげし 人や誰 振ればすがしき 音のする秋

錫杖・しやくじょう。この場合は柄の短い手錫杖。

秋分の 近き日影の ここちよき 地蔵菩薩の み前に立てば

秋分・しうぶん。九月二十三日または二十四日。昼夜の長さが同じ日。彼岸の中日。

秋の日影 菊の幔幕に ゆれてゐつ 地蔵菩薩の 御座の前に

日影・ひかげ。日光。ゐつ・いた。

蠟燭の 炎かほそく なりゆくを もとなみつつも み仏をがむ

かほそく・かは特別の意味なくつけて語調を整える。細くの意。もとな・わけもなく。

マツチのこ 磨れどもすれども つかざりき

木枯し地蔵さんは わびしかりけり

木枯し地蔵さん・木枯の吹く時の地蔵さん。わびし・物寂しい。

線香の 煙は白く はふり立つ 微笑みたまふ み仏の頬を

はふる・あふれる。

たそがれに 地蔵菩薩の 辻に立ち 政治を論じ 爺らわかれぬ

み仏の 大き耳たぶ たぶたぶと 肩のへにたれ 笑み給ひけり

へ・うえ。

線香の 煙にむせて み仏は 顔もみ足も 黒さびるます

たゞ一人 押す猫車に やすらけく 乗りて来ませり この御仏は

やすらけし・安らかである。権兵衛の建てた地蔵は豊島石でこわれやすく弥陀五郎は庵治石で影り猫車で運んだ。

絶えまなく み親に帰る 心地して ほほゑみたまふ み仏おがむ

慶長の 遠の昔ゆ み仏は 荒野の末に 立ち給ふらし

遠の・とおの。とおい。ゆ・からの意。

ほほゑみて 師走の野辺に あり立たす 地蔵菩薩に 寒菊たてまつる

一本松地蔵菩薩像

庵治町にあり慶長四年菰洲権兵衛が建立し、天保十二年菰洲弥惣五郎が再建する。菰洲対馬守藤原重家の墓とし地蔵の形に刻する。

沼田辺に 人のこころを なごめんと 地蔵菩薩は たたせたまへり

なごめんと・おだやかにしよう。縄筋とて妖怪が出て人人が苦しんでいた。

言無きや 古の人 菰洲対馬守 藤原重家 もの申さまくに

言なきや・おっしゃりたいことがないのでしょうか。重家・重家の父は対馬守宗茂誠で、京都で加能遠江守と足利將軍に仕えた。申さまくに・私はもの申そうとするのに。



一本松地蔵菩薩像

正覚院 香川県丸亀市

線刻十一面観音鏡像

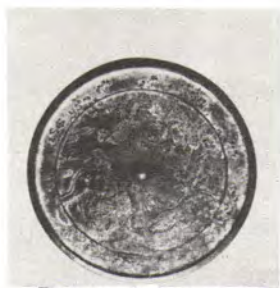
咲きさかる 牡丹に猯の 悪夢食ふ 姿を鑄出す 線刻観音

猯・はく。想像上の獣の名、熊に似て人の夢を食べて邪気をのぞく。

与田寺 香川県大内町

稚児大師絵像

八葉の 蓮華の上に 合掌の 幼な大師の 尊くもあるか



正覚院線刻十一面観音鏡像



与田寺 稚児大師像

神谷神社 香川県坂出市

木造隨身立像

眉を寄せ 肩を張りたる 狩衣の この随神の 怒号を聞かむ



神谷神社木造隨身立像



神谷神社木造隨身立像



水主神社 香川県大内町

木造男神坐像

髻のあと あらはなりけり 男神の 丸えりの袍に 手をこまぬきて

木造女神坐像

垂髪を 双肩に垂れ 坐し給ふ かく清純の 女神像あはれ



水主神社木造男神坐像



水主神社木造女神坐像

その昔 唐招提寺ゆ ゆらりゆらり 瀬戸の内海 渡り来ますか



正花寺 木造菩薩像

彼岸会の 寺の匂ひを 忘れ得ず 曼珠沙華咲く 峠くだりぬ

彼岸会・ひがんえ。春分秋分の前とあとのそれぞれ三日間に行なう法事。

正花寺 香川県高松市

木造菩薩像

電光に あらはに立たす み仏の おがむ命の よりくる思ひ

み仏の 正身のまま わが前に 立たせますると 思ほゆるかも

その昔 唐招提寺の み仏に 別れ来ませる この菩薩かも

金剛杖

結願の み寺の縁に 納めたる 幾千の杖 憩えるごとく

結願・けっがん。願かけの日の満ちること。憩ふ・いこう。やすむ。

近づけば 西村愛子の 名も見えて 金剛杖の その杖の山

お彼岸

お彼岸の み寺の庭は 賑はしもよ 手打うどんに 栗もあきなひて

彼岸会に 弥陀の幻像 ふくれつつ 御堂の縁に 笠納めをり

広前の松

ゆく春の 大広前の 松並木 息むせるがに 花粉の煙

息むせるがに・息がつまりむせるように。

水溜を見て

惘然とし 水かれしまま 水溜の 大石はすわる 広前にして

惘然・おせん。失意のさま。

大窪寺 八十八番

本尊薬師如来像

黒塗の み厨子とぎせる み仏も 内に聴かせむ 今日の法会を

阿弥陀如来像

唇に 朱を入れ染まる み仏の ひとみは遠く みそなはしけり

みそなはず・御覧になる。

石 幢

石幢の 瘦せたる石の 肌あれて おぼろに白き 夕あかりかも

石幢・せきとう。八面石幢二基。幢身の上に八角の笠と宝珠、幢身に金剛界四仏の梵字を彫る。  
弘安六年と九年の作。

金剛力士像

石幢に 憂国のにほひ ありや 仁王の玉眼 烈火の光放つ

憂国・ゆうこく。国のことを心配する。



長尾寺 八面石幢

毘沙門天像

毘沙門の 仏のみ足 虫食ひて いたいたしくも 邪鬼踏み給ふ

修行僧末次静慶氏に遇ふ

色あせし 麻の衣に 爛爛の まなこ光れり 野宿の僧は

爛爛・らんらん。眼がするどく光るさま。

野宿して ここまで参りし 修行僧よ 結願の寺は 盃うどんの里

大師堂

自が額 畳につけて み仏に 祈る嫗よ そのおみな的心

長尾寺 八十七番

聖観音像

みあかしの 仄かにうつる み仏の 深き眉根の ゆかしきろかも

みあかし・お燈明。ゆかしきろかも・りっぱで、何となく心がひかれるよ。

国のため してゐる人は それこそなしと 人々語る み仏の前

そうじゃと言へば そうなつてしまふ 今の世に

そうじゃ・讃岐方言でそうである意。

このみ仏の ただありたたす

不動明王像

か黒なる 剛毅におはす 不動尊 岩坐をふます 足のみ白し

剛毅・こがき。気性が強く物事にくじけない。





志度寺 縁起図絵

菌の桃

身隠れて 仏に仕ふ 坊太郎 縁故やゆかし 金毘羅利生記

坊太郎・田宮坊太郎。金毘羅利生記・坊太郎の親の敵討を書いた徳川時代の絵入小説。

菌の桃 花は咲くとも 坊太郎 姿見ねばや 実さへつれなき

つれなし・無情だ。

寺の庭

つゆあけの 光を浴びて 庭石の ありのことごと 影落しるつ

ことごと・のこらず全部。

志度寺縁起図絵

たまもよる 志度寺の浦に ただよへる 霊木遂ひに み仏と成る

十一面観音像

愛らしき み面と申せ み仏の ささげし瓶の 蓮の花咲く

覚阿上人の墓

文治元年九月十九日入寂

継信の 引導渡せし 上人の 苔生し乾く 夏のみ墓は

継信・源平の屋島の合戦に戦死した佐藤継信。

松風塚渡辺桃源の句

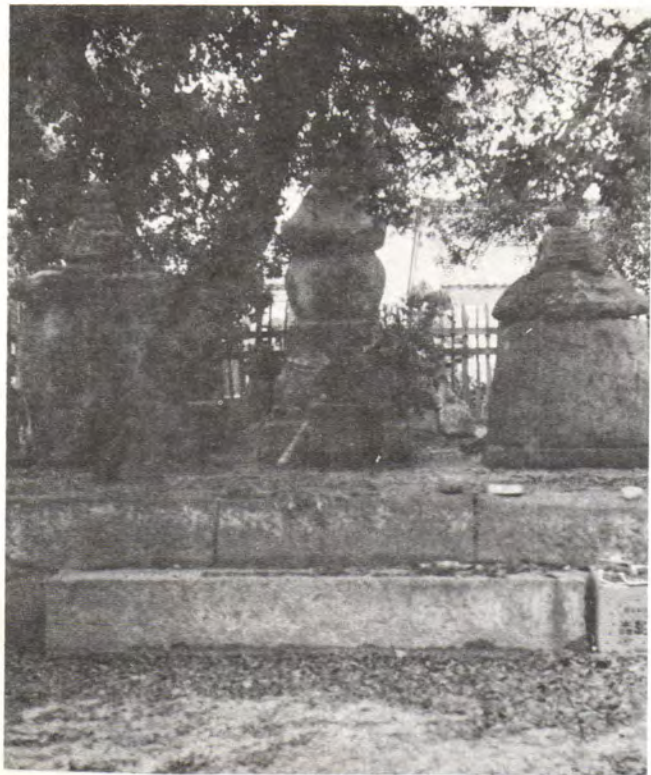
松高し、わが松風の、きき処。

ここに立ち わが松風と よみたりし

翁しのびぬ 松仰ぎつつ



松風塚



志度寺 海士の墓

み仏に 病いやせと お百度を 踏みける爺に あひにけるかも

海士の墓

たけ高き 五輪の塔の 菊の花 供花ゆれおり 大樹の陰に

玉藻よる 志度寺の浦に 身を捨てし 海士こそ思へ 夕影にして

玉藻・たまも。美しい藻。

夕づけは 「出づるぞ名残三月日の」と 謡をあげぬ 海士の墓べに

謡・うたい。謡曲海士。

宝髪も 頭も耳も み面すら 虫喰ひ立たす 金剛力士

仁王尊 描く人あり 立てる眉 飛出しまなこ 崩えしその口

石仏不動明王像

あしもとゆ 燃ゆる火焰の 光背に 大き剣光る 石ぼとけかも

あさあけに 立たすみ仏 ふっくらと 石のきざみの 軟かうして



志度寺 金剛力士像

遠き世の 光に触れん み仏の 翻波の衣文 かいなでみつ

翻波の衣文・ほんばのえもん。翻波式衣文。

わが目には ねむるが如き み仏の み目みはるかす 遠き世もかも

みはるかす・はるかに見る。

むせ暑き ここのみ宝庫に み仏は 定印結び 跌坐します

### 木造金剛力士立像

初夏の 光を受けて み仏の 崩えしみ顔の 照り映ゆるかも

崩えし・くずれた。





志度寺 木造如来像

観音の 動くともなき おん姿 天衣なびけり 風立つらしも

近づきて をがみまつれば 黒きひとみ すみてかがやく あてなるみ仏

あてなる・上品。優美な。

絵筆とる 宋人やさし みほとけを 日にけにつぎて 生れしみ仏

やさし・けなげだ。感心だ。けに・日に同じ。

木造如来形坐像

肩をはる このみ仏が 膝前の 翻波の衣文 美しきかも

お扉を しめますけにと 声かけて 僧み仏の 光とざしぬ

しめますけに・讃岐方言しめますから。

掌をあはせ 幾度もおがむ 媪ありて お厨子の扉 遂に閉しぬ

お扉を とざせし後も 読経の声 しばらく聞ゆ み堂のうちに

絹本著色十一面観音像 源頼重息女修補焉

蓮の花 施無畏印結び ありたたす 十一面の 大ききみ仏

ありたたす・ありたつは立つに同じ。たつておいでる。



志度寺 十一面觀音像



志度寺 不動明王像



志度寺 毘沙門天像

志度寺 八十六番

十一面観音立像

望月の 満てる面輪の み仏を いたもかしこみ おろがみまつる

望月の・十五夜の満月のような。

毘沙門天立像

毘沙門の 重き踵に 力こめ 邪鬼ふまします おん力はも

不動明王立像

怒るまなこ ま直にみつめ 跣足にて 岩坐を踏ます 不動明王

御開帳

七月十六日

三尊の み厨子のうちに 顕れ給ふ この厳しき み仏の国

裏道

童女子が 導きしまま やちまたの 八栗裏路 登り来りぬ

祖仙の画

むささびは 藤の花房 ねらひ居り 登ると思へや 枝かほそきに

むささび・木の上に住む小形のけもの。

広前

入陽さす 八栗の寺の 広前の 銀杏のもとに 動く人影

銀杏・いちよう。

親と子の 地藏菩薩は 凝掛の 赤きを召して 坐してまします

凝掛に 銭をもたせて 愛らしく 笑みて 跣坐せり 子の御仏は

にこやかに 子の御仏の 笑むからに 立ち去り難く 我はもとほる  
もとほる・回って立去らない。

ゆかしくも 立たせ給へる 石仏 にこやぐ肌 に手をふれにけり

にこやぐ・膚ざわりの柔らかな。



八栗寺 以空上人像



供養塔



八栗寺 八十五番

秋草道人の鐘

たどたとどと 読む道人の 鐘の銘 片手につきて 人去らんとす

鐘の銘・わたつみの、そこゆくうをの、ひれにさへ、ひびけこのかね、のりのみために。

書院の庭

紫の 桐の花さく 朝庭に ひかりをふくむ きりしまの紅

以空上人像

秋の日の 影のうつろふ 上人の み像の陰に 立ちて動かず

以空上人・木喰行を行い、靈徳高く、延宝五年東福門院御下賜の歡喜天の尊像を、八栗寺に奉安して、寺門繁栄の基を開く。

八栗寺の登山道の供養塔

喜兵衛の 願はかなし 供養塔 残して今に 救はんとする

喜兵衛・菰淵喜兵衛が、明和八年五月吉祥日、先祖代々仏果菩提のため建てる。



千手観音坐像

あはせかし 持物もたる み仏の 千手のみ手の うちなびきつつ

胸前に 合掌し給ふ み仏の 小指の先の まろき輝き

合掌・がっしょう。この仏は金剛合掌する。

おほ空の 満てる面輪の にほひつつ 慈悲の光の うつるみ仏

おほ空の・大空のようへの意。

狸の炉壇

仰ぎ見て 口をとがらし 唐突に 聖さびする 禿狸かな

炉壇・ろうだん。いろり。三谷林叟陶す。屋島焼である。唐突・とうとつ。だしぬけに。聖さびする。聖人らしくふるまう。

冬の夜の ながきいろりに 坐禅して 火をこそ守れ 青磁の狸

坐禅・ざぜん。じつと足をくんですわって、思いをこらし、悟りをひらく工夫をする。

洗心会

屋島寺に於て中井龍瑞、先の高野山管長について坐禅や法話をきく会。

ゆらえつつ 雲海をゆく 我なれや ただ霧雨に 浮ぶ松影

霧雨に すいこめらるる ころちして ひとりあさけの 屋島寺に入る

屋島寺 八十四番

梵鐘

蓮阿弥陀仏 鑄し釣鐘や 撞座高く 時の流れの 程遠きかも

蓮阿弥陀仏・僧の名。撞座・つきざ。しもくをあてるところ。時・貞応二年鑄。

本堂

霧雨の 動く朱塗の 本堂に 永劫み仏の 光や満たむ

永劫・えいごう。永久。

鑑真像

慈くしみ 溢るる笑を ただよはせ 朱の納衣を 召して坐します

納衣・のうえ。鑑真・天平勝宝六年屋島寺を開基する。唐の僧。七十六才唐招提寺にて天平宝字七年入寂。

鑑真画像

屋島寺に むかしとどめし 足跡を 目見をよすがに 見ておはすらし

目見・まみ。物を見る目つき。

懸 仏

一仏を 中に居ませて 跏坐します 三十二相の 懸仏かも

三十二相・仏の三十二相。ふつうの人間にみられぬ不思議な相が、仏像に表現される。例えば輪相とて両足の裏に法輪があり、まんもうそうとて、手足の指のあいだに水かきがある。

波の上に 立たすみ仏 半眼に 印を結びて 風にいむかふ

いむかふ・相對する。

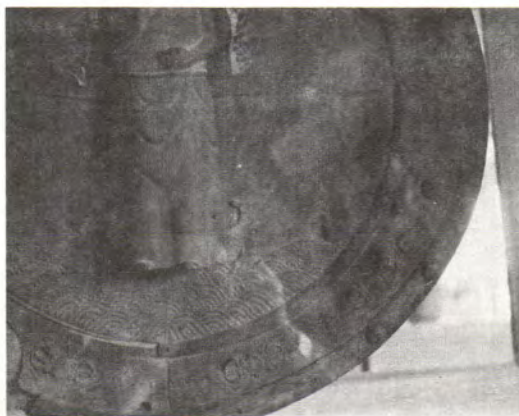
上み身は 裸身におはす 観音の 裳のひだもゆらに 波に立ちます

百重波 渡り来ますと 思へかも 立つみ仏の 裳の裾の揺れ

百重波・ももえなみ。数多く立つ波。思へかも・思われるからだろうか。



一宮寺 懸 仏



一宮寺 懸仏波に立つ

一、七米 五輪の破塔 中島の  
もり土の上に 立ちたまひけり



一宮寺 石 塔



一宮寺 八十三番

石塔

この夕べ 石塔の台に ぬけがらを 残せし蟬の 森に鳴くなり

七百年 時の流れを 聞く心地 石塔の前に 我立ちすくむ

石塔の 古色蒼然たる 前に 立ちすくみ居る 吾が姿かな

供養塔 捧げし人を 吾知らず 大宝院の庭 今円かなる

円かなる・まどかなる。安らかなことよ。

彫りあれし 松の寄木に 泥絵具 大き大王に 逢ひ奉る

あれし・生れた。泥絵具・厚彩色をほどこし微笑すらない。寄木・よりき。像の頭部・ torso ともに松材を削ぎ寄せてつくる寄木造である。

大王の その赤き舌よ 赤き頬よ 菱の花咲く 池の辺にして

大王の 肱の木目に 手をふれて 鉦のひびきを 偲びけるかも

鉦・なた。鉦彫り。

泥絵具 ぬる大王は 価値なしと 捨ててふりみぬ 人こそあはれ

吉水庵 五色台

不動明王像木喰行動作

つと入れば 焼けし仏の 御姿 動く光は せつなかりけり

衣掛円藏院 高松市鬼無町

閻魔大王像木喰行動作

偽りを ないひそねと 自が舌を 出していましむ 閻魔大王

閻魔・生前の罪業をさばく仏。地獄におちる恐怖からのがれようとする木喰自身の罪業の潜在意識からつくられる。



衣掛円藏院閻魔大王像

千手観音像 三十三年目の御開帳

青峰の み山は明けて み仏の 開帳の座に あひ奉る

開帳の 時近づけば み仏の 写し絵さへも 夢にこそ立て

み仏や 千手のみ掌に かがよふ目 慈悲の光と 思ひけるかも

千手・せんじゆ。千本の手は廣大無辺の慈悲の働きを示す。

鐘 楼

うちわたす 滄海に響けと つく鐘の 根香の峰の 暁に鳴るなり

うちわたす・おしなべ広がっている。滄海・そうかい。青い海。暁・あけ。よあけ。



千手観音立像 根香寺(撮影 末廣院)

根香寺 千手観音立像

仁王門

たけり立つ 金剛力士の

玉眼にうつる朝の青峰の色

玉眼・ぎよくがん。水晶製の両眼。

毘沙門天像

青峰の 樹々の夕映 み仏は

聞きておはすか 蝸蟬の声



根香寺 金剛力士像

大威徳明王像

臥牛に 六つの面輪 髪さかたて 怒号をあぐる 大威徳明王

臥牛・がぎう。ふした牛。

寺の庭

百日紅 花咲き匂ふ 観音の み寺の庭の 人の影かも

百日紅・さるすべり。



根香寺 不動明王像

金剛夜叉明王像

腰の裳を 蹴立てて立たす  
み仏の 髣のくねりの 赤き艶かも



根香寺 金剛夜叉明王像



根香寺 大威徳明王



法燈の 火屋の光の うすらぎて 暮れゆく秋の み仏淋し

不動明王像

たゆみなき 如来の 使者と 現れ給ふ あらきみ仏 猛り立たすも

軍荼利明王像

軍荼利の 八臂の腕と 首と脚 蛇はまとひぬ 赤きその舌

蛇・邪見、我愛等のシンボルといわれる。

降三世明王像

横臥する 宇摩とその夫ぞ あはれなる 剛力にふむ 降三世明王

宇摩・うま。左足下に大自在天の妃うまを、右足下に大自在天をふむ。



根香寺 軍茶利明王像



根香寺 降三世明王像

中空に 月白くかかり 明けゆけば しきつめられし 玉砂利の色

玉砂利・たまじやり。大きなじやり。

阿弥陀堂

蝸蟬の 声降りかかる 阿弥陀堂 千体の仏 立ちおはすかも

根香寺 八十二番

さるすべり 紅の花散る 石畳 影を踏みつつ 根香寺に入る

五大明王像

うすぐらき み堂に入れば をたけびて あらはに顕るる 五大明王

をたけび・勇ましく叫ぶこと。

みささぎの 空乱れ飛ぶ 黒鳥の この悲しきを 見給ふみ仏

木洩日の うつる広前 蟬時雨 聞きつつ拝む 観音菩薩

木洩日・こもれば。木の間からもれる日光。

### 木造頓証寺勅額

たくましく 太く浮彫る 頓証寺 金泥の匂 ただよふ勅額

金泥・きんでい。金粉をにかわ液にといたもの。勅額・ちよくがく。後小松天皇がお書きになる。

### 白峰御陵

白峰の かた山かげの みささぎに 音のみし泣かゆ 跡しのびつつ

かたやまかげ・へんびな山のかげ。跡・あと。崇徳上皇。

燃えさかる 焔や激し 跣坐します 不動明王の 剣の光かも

十一面観音立像

たちいれば 頓証寺殿に み仏の 瓔珞の影 ほのかに動く

瓔珞・ようらく。玉をつないだ首飾り。



白峰寺十一面観音立像



白峰寺 銅造不動明王坐像



白峰寺 頓証寺燈籠



白峰寺 石造五重塔

石造五重塔

相輪の 下に重なる 屋根のそり 五重の塔に 秋日さしつつ

慰もる 心もむなし 御門にと 捧げし塔の 庭隅に立つ

慰もる・なぐさもる。なぐさむに同じ。

頓証寺燈籠

ただ一基 たてるは古き さだめかも 頓証寺燈籠 古調たたへて

さだめ・規則。おきて。古調・こちよう。昔の趣。

不動明王像

ありとある 悪魔やはせと もゆる火に たけくおはする 不動明王

やはせ・おとなしくさせよ。



白峰寺 十三重塔東塔

遍路とて 我立ち寄りて 見上げたる 十三重塔に 秋陽ながるる

笠塔婆

宗明の 銘こそあはれ 笠塔婆 魂や沁むらん 元応三年

元応三年・六百五十三年前。



笠塔婆



笈を背に 草鞋の足の 膝立てて みかどいさめし その姿はも

石燈籠

西行に 捧げし燈籠 苔青く 玩具にも似て ささやかに立つ

十三重石塔

東塔の 印象目にあり 屋根のそり 西塔見上ぐ 心すがしく

金剛界 四仏の種子に あたる陽も 塔もよろしと 思ふ今日かな

笠塔婆 下乗呼びかく 人もなく

荒れし道辺に 秋蟬の降る

笠塔婆・かさとうば。長い塔身の上に笠  
宝珠をおく。

西行像

秋蟬の 声のみしげく 西行の

帝いさめし 声とどまらず



白峰寺 西行像

七重塔趾 夏の陰ある いしずえに うつらうつらと 凭れるたりけり  
凭れ・もたれ。

白峰寺 八十一番

下乗石

苔むせる 摩尼輪塔の 竿疲せて 下乗の字のみ 浅く残れる

下乗・げじょう。乗り物からおりる。



白峰寺 下乗笠塔婆

開帳に　めぐりあひたる　よろこびを　涙ふふみて　遍路さりにけり

金　　堂

金堂の　命はつがす　天平の　並ぶ礎石のみ　今日ありたたす

いにしへゆ　つぎてまつれる　この法会　み寺の市に　たち遊ぶ児等

七重塔跡

苔むせる　五輪の石塔　黙然と　心礎の上に　在り立たしけり

黙然・もくぜん。だまつているさま。

安らけき 地天女踏まへ たけたけし 眉根怒れる 毘沙門の像

眉根・まゆね。まゆ。

洪 鐘

銅鐘の 蓮華撞座の 八弁は 摩擦光放つ 撞木あてねど

八弁の 蓮華文ある この撞座 高きは古き さだめなるべし

金剛力士立像

白雲の ただよふ門に 仁王尊 をたけびたけふ その白き齒や

法 会

大般若 となふもろ声 み仏は きこしめすらむ 今日の法会に



おほらかに 我まへにたつ み仏の おんくちもとゆ 赤きかがやき

### 兜跋毘沙門天像

毘沙門天は邪鬼の上に立つが、そのうち地天の両掌上に立つを、  
兜跋毘沙門天という。

神像の 肩をふまえて つりあがる まなこきびしき 毘沙門の像

まなこ・眼。毘沙門は眼をいからす忿怒相である。

いにしへゆ 宝塔かかげ 地天ふまふ 毘沙門天が たぢからもがも

宝塔・ほうとう。多宝如来を安置する塔。たちから・手力。腕の力。がも・もについて希望を表  
わす。がほしいものだ。

鎧かたく 身をしめつけし 毘沙門の 怒れる頬に 火影ながるる

鎧・よろい。胸から膝頭までをおおってよろいをつける。肩からは籠手をはく。

遍路とて 春べまゐるに ふさはしく 彩色の御衣 召して立ちます

天平の いにしへのまま 巖然と まなこゆららに 生きてまします

ゆららに・ゆらゆらと。

観音の たたすみ堂に うとうとと ま夏の風に ひるねするかも

平安の 女性と申せ 明らけく この豊麗の み仏の顔

豊麗・ほうれい。ゆたかであるわしい。



若き僧　ひらく扉の　その影に　かゞやき立たす　み仏の像

ゆらゆらと　動くともなき　みころもに　庭のみどりの　夕あかりかも

観音の　肩にかかれる　垂髪の　あなたづたづし　今夕づけば

たづたづし・たどたとし。

近づきて　おがみまつれば　観音の

衣のすその　落書の大永八年同行五人



いくさにも 出でまし給ふ み仏の ここに立たして 国守ります

むせ暑き ここの御厨子に 明王は 火焰の光 背負ひて立たすも

八十八蘇場

ぬるみたる 寒の清水に 口すすぎ ほのぼのとして わが去らむとす

国分寺 八十番

千手観音像

やはらかに 鑿子をたたく 老僧の 袖間にみゆる み仏の顔

鑿子・きんす。

大師坐像

ひきしまる 口の辺に 弧をゑがく 大方大師 念々の祈り

辺に・あたりに。

朱の袈裟 召して坐します み仏に 捧げし燈の 影はただよふ

不動明王立像

武運長久 願文の祈り 何時までを保ち み厨子の中に見ゆ

戦ひに 征く兵士の 護摩供養 明王にささげし 武運長久の希求は

希求・ねがい。

お開帳　かしこみまうす　み仏の　やさしむ如き　ゑまひのにほひ

宝冠の　かがよふ上の　観音の　おのもおのものに　吸はれゆく秋日

宝冠・ほうかん。髻の上のにのせる透し彫りの冠。

み仏の　右のみ足の　親指の　そり立てるます　その親指を

み仏の　濃き口紅の　色しあせず　頬婆果めす如　もゆらく思ほゆ

色しあせず・色がさめて薄くならない。頬婆果・ひんばか。赤色の果物。

道範作

さびしさを、いかでたへまし、松の風、波の音せぬ、すみかなりせば。の歌

オシブルの 音のみしげく 松林 消えて悲しき 春潮の色

道範・高野山の僧、南海流浪記作。

納経所にて

竹林の 画く梵字を 春浅き 炬燵に置きて 僧と語らく

竹林・竹林上人。

郷照寺 たらたら坂を くだり来て われひさびさに 地藏餅食うふ

食うふ・たうぶ。くう。

高照院 七十九番

十一面観音菩薩立像

教子の 守るみ寺の 窓あけて 秋のあしたに おがみけるかも

木喰相歎刻三面大黒

うち煙る 春雨しきる 寺に来て この世のさちに 向ふ大黒

さち・幸福。さいわい。

大黒を かこふ諸人 辛く生く 薪をかつぐ 童子さえ居て

辛く・からく。苦しく。

聖徳太子像

金欄の 袈裟の袖ひき うら若き 太子はここに 立たせ給へる

後藤芝山の虚室絶塵想の額を

脱俗の 心いだきて 人の世を 渡り果てにし 芝山思へり

虚室絶塵想・きよしつぜつじんのおもい。独りさびしい室にいて俗塵のことを思わない。脱俗・だつぞく。世の中からのがれる。





郷照寺 七十八番

青面金剛像

血のまなこ 青きおもわに かがやかせ ショベラを握る 青面金剛

ショベラ・三股又棒。青面金剛・しょうめんこんごう。庚申信仰の本尊。

金剛の み使として すわりたる みざるきかざる いはざる猿

猿・ましら。

阿弥陀如来像

霊験の 仏かしこし 広前に ゐざる遍路の 立ちましにけり

ゐざる・すわりながら進む。

大師堂の桜

爛漫の ももちの花に 蜂の来る 昼の大師に 賽銭たてまつる

爛漫・らんまん。花が咲き乱れているさま。ももちの花・数の多い花。

ばちばちと 音たて揺ぐ ほむらから 大僧正の額に 汗ひたたり給ふ

揺ぐ・ゆらく。ゆれ動く。ほむら・火焰。火のほのほ。

心経の 声たかだかと 堂に満つ 坐りたる身も 上下に踊り

唱えまつる 心経そのまま 護摩の火か 人間は真実和合に 目覚む

のうまくさんまの声に 火勢漸くおさまり 大僧正 数珠まさぐり

鈴鳴らせ給ひぬ

鈴鳴らせ給ひぬ・ここで修法終る。

## 護摩修法

護摩堂に不動明王を本尊とし軍荼利明王・降三世明王・金剛夜叉明王・大威德明王の脇士がまつられ、護摩壇が設けられ、護摩木が運ばれ、信者が集まると行者が壇にあがって修法がはじまる。

脳軟の 臥したる友の 癒えませと 不動明王に 護摩たき祈る

祈るとも しるしないのが しるしじやと 朱袈娑の大僧正

護摩焚く時の給ふ

しるし・証換となるもの。

大鼓たたいてくれ どんならん 線香取ってくれ 有難う大僧正

火をつけ申す

どんならん「讃岐方言で、大鼓たたく人がいないので困る」という意味。火をつけ・護摩木に火をつける。

無病息災 さまざまの願の護摩木 赤々と燃え 大僧正指くんで

印結び給ふ

護摩木・焚かれると一切の煩惱は次々と焼き尽くされる。

道隆寺 星曼荼羅図



竹林上人

上人名を独雄、号は竹林または竹谷、父は多田右衛門、母は富家嘉膳の娘、十三才にて高松市多聞寺にて出家得道する。志度自性院の僧となる。徳高く讃岐の良寛とたたえる。寛政十二年六月六日年四十才で入定せられる。天保三年小野随心院の宮より上人号を贈られる。書画詩文和歌彫刻に妙趣を得、遺品が多くある。

隠谷の自刻像

香川県志度町竹林地

み仏を きざめるそばに 言交し

戯れ遊ぶ 牛飼の友

故老いう。上人が自然石に自像を刻った時、牛飼の子供達が来て戯れ遊んだと。言交し・ことかわし。話をしながら。



竹林上人自刻像

上人は ひねもす よもすがらただ 生きたる巖に 自を彫り給ふ

ひねもす・あさからばんまで。よもすがら・よどうし。自・じ。自分

童等が 未完の像の かたくまに 乗りて遊ぶを 笑みて見給ふ

未完・みかん。まだ全部出来あがっていない。

牛追ひて 童らの来る その前に ひたすらにきざむ み仏の像

ひたすらに・他のことを忘れて一心に。

山蜘蛛を 払ひのぞきぬ 上人の 眉根につける その山蜘蛛を

眉根・まゆね。根は接尾語でまゆに同じ。

上人の ころもに散らふ 松の葉を 手でかきのけぬ 夕山陰に

散らふ・散るの継続するさま。山陰・やまかげ。山のために隠れたところ。

檀の葉の くれなる病れし み墓辺を ただほろほろと 頬白の鳴く

檀・はぜ。秋の紅葉は美しい。病れし・やれし。やぶれた。

結跏趺坐<sup>いつかふざい</sup> 修禅し給ふ 上人の 納衣の上に 動く朝影

納衣・のうえ。そまつな布で作った僧の衣服。朝影・あさかげ。朝の日の光。

上人の 修禅し給ふ 隠谷 谷間谷間に 鶯の声

上人のかしら大きいと ふと思ふ 御像のそばに よりて見奉る

百鳥の 谷間に響く 囀りを ひねもす跌坐して 聴きおはすらし

ア  
ア

百鳥・ももどり。多くの鳥。

山鳩の 夕暮に鳴く 山に来て 上人の像の 前に坐りぬ

春雨に ぬれておはする 上人の み像の衣 ふきたてまつる



光りつつ 葉毎にかかる 松の露 上人のあぎとにも その滴

上人は 笑み給ふらし 台座辺の 茸は人の 取るにまかせて

台座辺・たいざべ。上人の像のすわる座のあたり。

上人の 坐しますあたり 我も歩を とめて茸を 拾ひけるかも

歩・ほ。あるくこと。

上人の 御像の前の 檜の新芽 さ蕨の如 伸びてゐたりけり

上人の 是空のことば 思ひかね かく隠谷に みあととむらふ

是空・せくう。世の中のすべての物事は、みな因縁によって起る仮のすがたで 実体のないこと。思ひかね・思うのに堪えられない。とむらふ・尋ねる。

笹の葉の さやぐよすがら 上人は 空と思ぼして ながめ給はむ

さやぐ・ざわざわと音がする。

### 竹林庵の上人の墓

立ちませる み墓よすがに

ひたすらに 動く命を

おろがみまつる

よすが・たよりとすること。



竹林上人墓

燈籠

施主庵治 石工茂吉 嘉永一年の 燈籠を見つ 春のあしたに  
燈籠・上人の墓前にある。

竹林庵の通天楓

老楓 蔭濃き庭に 房の実の 揺るるを見れば 上人思ほゆ

上人京都の通天峽より移す。



竹林庵通天楓



燈籠

竹林庵鑿子

讃州寒川郡志度浦自性院庵隱谷竹林尊宝前常什物文化八辛未六月六日寄附之願主高松集。の銘がある。

高松衆 ささげし鑿子 我もまた たたき納めむ 帰命頂礼

鑿子・きんす。銅製の深鉢形の鳴器、台に置いて木槌で打つ。帰命頂礼・きみようちようらい。仏を深く信仰して心から礼拝すること。

### 宥雅の墓

三等師 慕ひてそばに ねむらんと 誌す城山の 墓誌銘かなし

三等師・竹林上人。上人自性院主をゆずり三等室とて草の庵を営む。人三等師という。墓誌銘・死んだ人の事跡をきざんだもの。



宥雅の墓

もろもろの 無縁仏の その中に 宥雅法師の 墓誌銘すがし

無縁仏・むえんぼとけ。死者を弔う縁者がいない仏。宥雅の墓は上人の墓前に在ったのを庵主無縁仏の中に移す。

### 宥雅の墓の墓誌銘

釈持春は、山田郡六条の人なり。父は田渕平藏といふ。五智院、宥台法印の弟子と爲る。後に覚王寺に住す。素より三等師と善く、常に師に従ひて、間川に於て、会せんことを欲す。円福寺を、有するの命ありて果さず。亡するは、何ぞや。寛政十一年十一月十三日を以て寂す。乃ち遺言して、三等師の死して、之を墓するにまつ。明年六月寂して、之を隱谷に墓す。因て遂に、其の側に改葬すと云ふ。

銘に曰く、

生れては則ち、志を同じくし、死しては則ち、亡を同じくす。鮑山善く交り、千古轍を並ぶ。

城山元愉誌す。

(元文漢文)

鮑山・鮑魚山看。轍・てつ。わだち。車の通った後の輪の跡。城山・中山城山。漢学者。

上人の友宝雲大徳の墓に詣でて

三木町井上始覚寺

無念道 越えて行くなり 上人に 言や伝へん 吾に言つてまし

無念道・井上から志度に越える坂。吾・わ。われ。

宝雲が珠数を上人に頼む

うつせみの 身にありしかば みやこへも

行かですさず かの珠数のこと

宝雲・文化四年入寂。行かです・行かないで。死んだのでの意。



宝雲大徳の墓



我の額

上人刻「我」の額

始覚寺

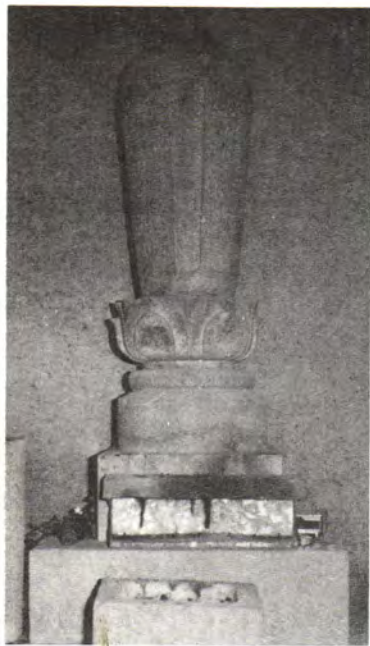
百七十年 堪へて掛れる 我の額 同じ昔に 変らざるべし

上人の友令中和尚の墓に詣でて

庵治町桜八幡

ほのぼのと 春の光の さす堂に 和尚はります 石塔となりて

和尚・満願寺の僧。権大僧都法印。文政二年十二月廿九日歿



令中和尚墓



文政の 巳年の末に みまかると 墓碑銘をよむ 春の曙

みまかる・現世から去る。死ぬ。

いくたびか 寺に來ませる 上人は 竹画き給ふ 和尚の前に

竹・上人の書いた竹の絵は庵治に多い。

上人の友渡辺君專助之墓に詣でて 三木町白山の西の麓

み墓辺に スカンポの花 淡く咲き ここだの竹の こほしき夕べ

ここだ・たくさん。こほしき・こひしき。

み墓辺に 詠み交しける 竹の歌 誦してしばらく 姿偲びぬ

渡辺專助の歌・世の中をいとはぬ君がここらもてここだの竹をなにめづるらむ。上人の歌竹植ゑて、あすなためそ今日ばかりひと夜のうちも空と思へば。誦して、しようして。大きな声で読んで。



供養する 君がみ墓の かたはらの 牧場の牛の 垣になくなり

供養・墓前に物を供えて回向する。



渡辺君専助の墓

自然石の 君がみ墓に きざむ歌 摩滅はげしく 友の字をよむ

上人の友中山城山の墓に詣でて  
天保八年 卯月修文院城山 整如居士と 墓碑銘を読み 思ひひそかなる  
ひそかなる・表立たないこと。



中山城山の墓

香南町中学校東、田の中

丘にあると 迷ひつつ越ゆ 城山の み墓野中に 立ちおはしけり

黄色に 苔むす墓石 るましけり ここぞ城山の やすらぎの床

やすらぎ・休む。

城山の み墓の庭の すみれ草 色立つ見つつ上人思ほゆ

乞食等と 酒のみかはす 上人の 座に杯をもつ 城山の顔

座・間川独楽堂。

上人の遺品

多田氏 志度町

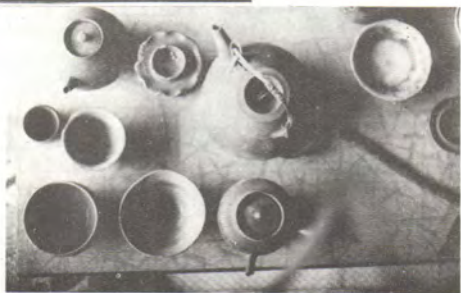
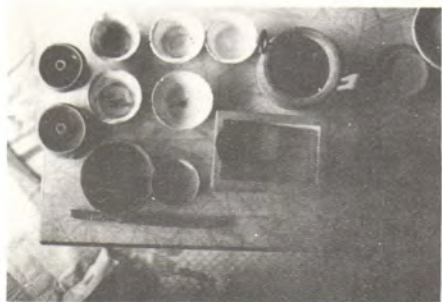
ひたすらに 遺品机に ならべけり 間川の里は 空蒼く澄む

間川・志度町の部落の名

彩色の 女人の像を彫る硯 上人ほのぼのと 筆染め給ふ

隣のよしみとて 姥に たのみたる 上人の遺品 今日みつるかも

奉納 四国八十八ヶ所の 版木みゆ 上人遍路を なしたまひけり



上人の遺品

仏前に 供へ奉れる 鈴燭台 花瓶水瓶飯食器 ことごとくならべ見つ

瀬戸焼の 蓋にも身にも 鷺立ちぬ

この茶碗にて 飯食べたまふ



仏とての歌



上人の茶幅の竹

上人の歌

引結ぶ草の庵に消えやすき露の此身の置所なり。

茶の席に 露の此身と 歌ひたる 上人の軸を 見入りてゐたり

上人の茶幅の竹

細川きよ氏 三木町

なよ竹の かずらの笹を すがやかに 梓に画きて 自由無碍なる

上人の歌

仏とていつこ誰にもとむるかすみぬる程の心なりけり。

植松氏 三木町

駄馬に乗り 無念道越えて 訪ふ爺に かねてあたへし み仏の歌

自性院にて

世間無常 水月芭蕉の 一軸ぞ かけし前に 茶をのみ申す

上人の 無尽宝の軸 このあした 茶会に見つむ なべてならずも



世間無常水月芭蕉



無 尽 宝



志度寺竹林茶会

いざ行かん つゆも晴れたり

竹林会

七月四日に

今日あらずやも

竹林会・毎年七月第一日曜。

上人の師慈雲尊者の御像

いかつき目 眉とその髭 白々し 朱の納衣の 御姿はも



慈雲尊者像

慈雲尊者の廟に詣でて

大阪府河内高貴寺

慕ひ来し 我は旅人 上人の み墓仰ぎぬ 紅葉散る辺に

高貴寺

同

葛城の 山の紅葉の 色冴えて 明けの窓辺に 百鳥の鳴く



慈雲尊者廟

山人の 山馬の筆を 手にとりて その一軸を 仰ぐ宵かな

山人・さんじん。俗世を捨てて山にかくれ住む人。

尊者の書 筆いみじくも 墨もよし 見てあるほどに ほのぼのとする

尊者・そんじや。徳の高い老僧。

山人の 住みたまひたる葛城の 山の紅葉の ちらまくは惜し

僧房に ならべかけたる 山人の 書蹟を仰ぐ 夜はくだちつつ

上人の歌

とにかくの思ひなけれどほうろくの尻は焼くとも胸はこさず。

吉岡氏 志度町

人を恋ふ 思ひになやむ こともなく ほうろくの尻 焼く代遠きかも

清風<sup>一</sup>払明月<sup>二</sup>の軸

岡村氏 志度町

小夜ふけて 清き嵐の ひそやかに 明月<sup>一</sup>払ひ 秋去りにけり

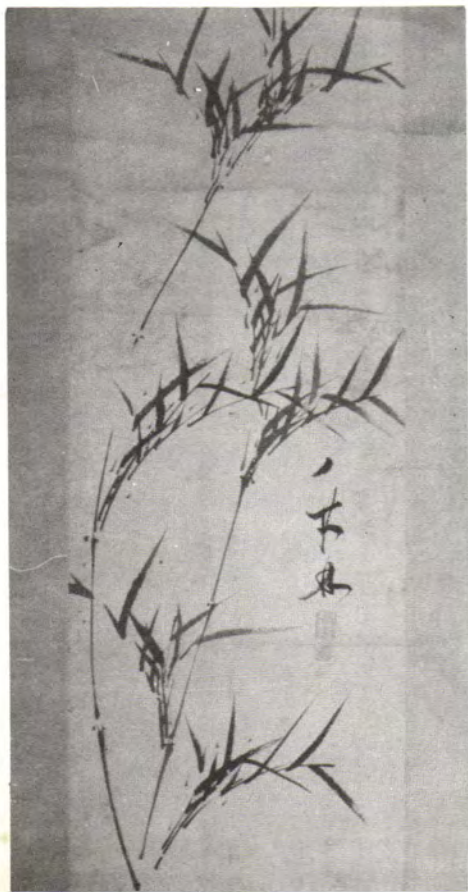


上人の歌とにかくの

竹の軸

柔にして 剛にあれとて 上人の 画きたまへる 竹の清しき

大林氏 志度町



竹の軸

薬師庵

志度町鴨部

上人自刻石像

村人の 導くままに つと入れば 頭巾坐禅の わかやぐ御像

大師像

山の辺の 薬師の庵に 上人作 大師の像を わが見つるかも

上人作・天明元年九月。焼物の大師像。

心外無別法の軸

村上氏 志度町

上人の 仏の道を ふみ給ふ 日々の面影 思ひこそすれ

心外無別法・心の外に仏はない意。



心外無別法

上人の師閑閑子の墓に詣でて

徳島市 中田

あけやらぬ 朝とぶらへば つれもなく 草むらに 立つ雲水閑閑の埴

閑閑子・かんかんし慈雲尊者の弟子三傑の一人。埴・つちくれ。雲水・うんすい。行脚僧。

墓いしの 頭に彫れる 天水皿 昼は乾きぬ 無欲なるかも

墓いしを つちくれと誌す 師の君の 心ぞゆかし 上人もはた

我の木彫額

繁昌院 大川町

我の字を 妙にくずして 彫る額を うちつけに見て 上人を思ふ

萬春の軸

竹林庵 志度町

春寒み 門にも出でず 上人は 萬春の字を 書き給ひけり

上人刻と伝える大師像

志度町 石原氏

尋ね来て 間川の里に 口紅の 匂ふ仏に 逢い奉る

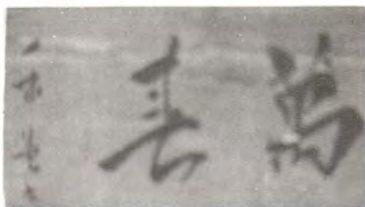
上人を 慕ひ来まして この里に 彫りて残せり こののみ仏

台座の箱に天保七申年十月十一日木食相観銘生年三十一年とある。上人刻は誤り。





我の額



萬春の軸



大師像

絶々妙々の軸

奈良氏 三木町

み仏の るますみ里は 言葉にも 文字にも絶えて ただに妙なり

真如館の額

八木氏 長尾町

仏壇の 上にかかけし 真如館 仏のみ霊 やすらけきかも

探湯不及の軸

入倉氏 三木町

探湯不及は 見善テハ如ヲ不ク及ル見不バ善テハ如ヲ探湯レの句を省略したもの  
善きを見て いそぎて行かむ 旅の空 悪しきところは 探ぐるが如く



真如館の額



探湯不及の軸



絶々妙々の軸

間川三十二勝

志度町

上人間川の里に、仏の三十二相になぞらえ三十二の名勝をつくる。上人の摩訶方記と、云う文に誌す。曲尺と磁石をたよりにして、之を求め、作歌した。

梅の宮

摩訶方記に、鬼山の下に崖あり。南に上る十歩にして祠あり、梅の宮といふ。

狛犬の神のみまへに 手をつきて 仕へまつれる 宮どころかも

梅の宮・お産の神をまつる。

白波

坡西南に向って上る、五十歩にして坂あり。白羽坡と名づく。

たらたらの坂は一時に あらたまり 林道となりて 明くかがやく

白波坡・しろわさか。白波の郷に通じる坂。



梅 宮



323

獅 犬

撫松原

坂を下る十五歩に、松樹有り。坂を登る者之を撫すべし。因て撫松原と名づく。

今はただ 撫松原てふ 名を残し 高峰にきほふ 松のみどりぞ

高根に・高根に向つての意。きほふ・きそ・う。

送月橋

是より南に行くこと十歩にして、碕有り。橋を架す。送月橋と名づく。傍に石燈を立つ。火を挙げれば、間月送人の状あり。

火を挙げば 間月送人 てふ言を 残して今は その橋やなき

碕・き。曲つた岸。

万竹園

又去ること五六歩にして美竹叢生す。万竹園と名づく。

竹のかげ ふみて入りけむ 上人の 心にうつる その竹の真

独楽堂

南に去ること丈余にして、独楽堂あり。ただ四柱のみ、傍に小屏を設け、書軸を掲ぐ。

兼て捨たる身には、法界みな栖なれば、いほりに四壁をいとなまず。めを四辺に遊ばす。いとゆふのあるかなきかの空に、こころをかけて、自在に、ふらりとほうろくくわんすに、しぶ茶をにて、こきとうすきとを、いとわず。腹ふくるるまでに、打のみて、いろりのほどりに、うるの眠覚て、おもふに是、法界の庵なりや、庵の法界ならんや。とにかくのおもひなれば、ほうろくのしりはやけども、胸はこがさず。

竹林自題。

法界・仏語宇宙の万物。栖・すみか。すむところ。いとゆふ・いとゆう。春晴れた日にゆらゆらと空に立ちのぼる気。かげろうともいう。うるの眠・有為の眠。はかないこの世の眠。とにかくの・あれこれの。

かやつらぬ 夏を過して 来る年も 蚊の吸ふままに 上人ましぬ

上人の 血を吸ひし蚊は 口曲り ひたにささずと 里人のいふ

ひたに・むやみに。

風騒の 友と茶をのみ うたひたる 独楽堂の この跡どころ

風騒・ふうそう。詩歌などの風流な遊び。

遊 遷 石 東南に大石有り、遊遷石と名づく。

竹の葉を 深く刻ざみて 洗心の 鉢とはなしぬ 後の世の人

大正十一年石工池添建一氏、手洗鉢とする。洗心・せんしん、心中の悪やけがれを洗い去る。

有 無 橋 西南三・四歩にして、つちばし有り。有無橋と名づく。

細流の 水の流るる 音聞きて 土ふむ我は 橋さへ知らず

臨 溪 坡 西南五・六歩にして、坂有り。臨溪坡と名づく。

岩が根の ところどころに 現れて 笹と雑木の 疎らなる坂



鼓

石 東に行くこと二・三步にして、奇石有り。鼓石と名づく。

手で掘れば わずかに出でし 鼓石 木の端でたたき 音ききにけり

曇

花

岡

東に向つて下ること五・六歩にして、奇井を生ず。曇花岡と名づく。

互生する 若葉ひろがる 枝伸びて からまりはへる 奇しき樹の岡

閑

伽

泉

東南に向つて上ること、七・八歩にして、水あり湧出す。閑伽泉と名づく。寛を以て引く。

絶えず引く 閑伽井の水の 寛さへ 現にあらず 水も涸るれば

閑伽・あか。仏に供える水。現・うつつ。現実。

独

木

橋

北に向つて下る。五・六歩にして、木を横へて橋と爲す。独木橋と名づく。

岩ほより 岩ほにかけて 竿渡し 独木橋を 偲びけるかな

碧落碑 東に向つて過ぐれば、則ち石を建つ。碧落碑と名づく。

初春の 峰に登れば 十一輪 塔碑のはだに 天の花散る

天の花・雪花。

獅子洞

北に向つて下れば則ち、洞を穿つ。獅子洞と名づく。洞口東北に開く。余の安禪して、毒龍を制する所なり。

毒龍を 制し給ひし 上人の

安禪の洞に 春鳥の鳴く

安禪・あんぜん、やすらかに座禪をする。



獅子洞

香 炉 盤

前溪を臨めば、水中に石有り。上、平にして物を承くべし。香炉盤といふ。仏に献ずる所以なり。

み仏に 香を献ぜし 香炉盤 枯葉つもりて 寂しかりけり

兔 蹊 橋

上人位置を示さず。むべなるかな兔の渡る橋なれば。

まなかひに 人は渡らで 兔のみ 渡る橋なれ あまたある橋

蹊・けい。こみち。まなかひ・目のあたり。あまたある橋・たくさんある橋。兔が渡る橋で人に見えない。

長 嘯 巖

香炉盤より、東南に上る十二・三步にして、長嘯巖に到る。突然高し。月夜に笛を弄すれば、響林谷に伝はる。

玉藻よる 志度の浦廻を 見渡して 月夜に笛を 吹き給ふらし

浦廻・うらみ・海岸の曲折したところ。

月朗朗 巖の上によもすがら 上人笛を 吹きすましけり

朗朗・ろうろう。月のすんでいるさま。

浣花溪 南に向って下る十二・三步にして、浣花溪を渉る。

岩はだを すべり流るる 真清水の 泡なして落つ 花の如くに

曼茶羅巖

東北に上る七・八歩にして、巖巖有り。阿字をはる名づけて曼茶羅巖といふ。

たくましく 動く命よ この阿字を 巖の前に 立ちて観ずる

巖巖・ざんがん。岩がけわしく高いさま。

仰ぎつつ 巖の膚に 掌をふれて

さらさらと我 なでてみにけり



曼茶羅巖

水 楽 台

南に向つて下る、五・六歩奇岩有り。溪流是に至つて巖下に伏流し、屈曲の巖頭に激し、其水声風奏自然の奇韻に接す。因て水楽台と名づく。

数々の 巖くぐりて 激しつ つ 水のかなづる 奇しき音かも

かなづる。音楽を奏する。

漱 玉 瀑

南に向つて上る十歩、崖に循つて下る泉あり、ここに懸る。乱石欹斜瀑中に縦横す。碎湃・漱玉の如し。因て漱玉瀑と名づく。

水しぶき 立てて流れし 瀑の水 今はせせらぐ 音ぞかそけき

欹斜・いしや。かたむく。碎湃・ほうはい。水がさかまくさま。かそけし・かすかだ。

葛 岡

西に向つて上る十五・六歩、葛柳有り。葛岡と名づく。花樹あり、黄葉有り、春秋観を異にす。

葛の蔓 桜に植に まつはりて 花に紅葉に きよき葛岡

山 躋 石

東行十二・三歩、溪に下り復上る。十五・六歩にして、大石半嶺に在り。山躋石と名づく。如如の字を刻す。平等常住の想を表はす。

仰ぎつ つ 巖にのぼり 掌をふれて 磨滅する如如を なでてみにけり

大宇宙の真理は、空間的には不変でありこれを如と言ひ、時間的には不変であり、これまた如である。二つの如をもって来現し給うのが如如来現、即ち如来である。

白蓮池 西に向つて下る、二十歩にして池有り。白蓮池と名づく。

水青き 岸辺に近く 柿ひとつ 紅あざやかに 池にゆれるつ

不可識峰

復上る、三十余歩にして、不可識峰有り。出日を敬資するに宜し。挙目眺望則長天一色、雲物往来する所、鸚翅の垂覆する所あやしむべし驚くべし。野馬なり、塵埃なり、得べからずして識る。因て名づく。

この峰は 白きまさごの さむしろか 立てる松さへ 寂びて艶なれ

さむしろ・むしろ。艶なれ・えんなれ。美しい。



白蓮池



阿耨窟上人像

雲

門

北に向つて下る二十三歩、両巖双聳して中断す。雲門と名づく。

樹の間より直ぐ立つ巖の幾丈ぞ門の如くに一二つ並びて

鑿

字

水

水有り、清冽其の内より出づ。名づけて鑿字水と名づく。

雲門を覗けばすがし真清水のまさごの上をさらさらと行く

月

輪

巖

水の左右、石壁有り、月輪巖と名づく。満月輪をほる。

石壁に満月輪を彫りたまふ摩滅せし字の読み難きかも



阿耨窟

水の右に、窟有り、阿耨窟と名づく。一軀の仏を安んず。將に、窟に入らんとするに、足を託する地なし。手を以て足となしのぼる。余の修禪する所なり。註・今は窟なく堂を建つ。

ほのかなる 光の中に 念ずれば ありありと浮ぶ み仏の慈顔

慈顔・かお

つと入れば 小暗き庵に 跌坐します 頭巾納衣の 上人の像

窓あけば 日影さしこみ み仏の 面輪ほとほと ほのかに見えく  
ほとほと・ほとんと。

阿耨窟に 上人修禪 したまふと 思へば此処を 去り難きかな

阿耨窟・あをつくつ。

自がきざむ 仏の前に 三日三夜 坐禅したまふ 上人したし

自が・しが。自分から。

梅雨あけの 風のそよぎを み仏は 納衣の袖に 知り給ふらむ

観我巖

西南に向つて、直横に半嶺を行く。百五十歩にして巨巖有り、観我巖と名づく。又一瞬と名づく。傍に倭歌をほる。宿しぬるこのたまもすらなかりけりかならずも又のこるぬじとや。  
一瞬・いっしゆん。きわめて短い時間。一瞬と巖に名づけたのは人生の無常をあらわすか。たまも・玉藻。美しい藻。弟子宥雅を喩えた。宿らせて教えていた。まな弟子宥雅もなくなつたよ。必ず又私だつていつまでも残るものであろうか。いや世は無常迅速のものだよ。

上人の 心やすがし この巖に とこしえの我を 観じ給ひぬ



巖我觀



巖我觀

簞

巖

北に向って下る、二百歩余、又西に向って上る二十歩余、又西に向って上る、二十歩にして、巨巖あり、簞巖と名づく。碧蘿蔓蔭し、恰も、樵夫の睡るが如し。

たたなはる 岩が根はらばふ 青蘿 東の肌の 日にかがよひぬ

たたなはる・重なる。岩が根・大きな岩。

白  
杵  
石  
仏  
の  
歌



白杵ホキ阿弥陀三尊磨崖仏

古園石仏

杉木立の間に覆屋根が見え、その中に古園石仏がある。惨怛たる崩壊状態に驚く。首が落ち胴が飛び破片が散乱する。

毘沙門天像

毘沙門の まろきまなこに をやみなく うつろひゆくか 旅人の群

をやみなく・すこしの間もやまることなく。うつろひゆくか・映ってゆくか。



古園石仏毘沙門天像



光背の 羊歯青青と ゆれるたり 毘沙門天の まろき目の辺に

羊歯・しだ。

宝塔を 高くささげし 毘沙門の 荒きはだえの 鑿のあとかも

はだえ・からだ。表皮。はだ。

### 大日如来仏頭

いい顔しちよるわい といふ人の 中にあり 我も 仏頭を見る

いい顔しちよるわい・どこの国の人の方言か。中年の男子の声。顔容の素晴しき、いつまで見ても見厭きない。平安後期の優品。

躬のかけら 重なる前の 石壇に 黄にきらめく 大き仏頭

躬・み・身体。黄に・顔には朱、黄土などの彩色も残っているので美麗で、白杵石仏中随一である。





古園石仏大日如来仏頭

右の頬の　ゆたかにたらひ　眉と目の　黒ききざみの　深き仏面

雑然と　ころげておはす　み仏の　うち麗はしき　おほき仏頭

雑然・ざつぜん。こまごまと入りまじる。壁に残っているのは全く残骸ともいうべき無漸な姿である。もとの姿は、いかに威容に満ちたものであろうか。おほき・大きい。

### 金剛力士像

鋭き目　白きその齒に　頬赤らめ　仁王は立たす　短き脚に

短き脚に・極端に脚が短く全身と調和せず、おかしく感じる。

### 山王山石仏

通称隠れ地蔵とよばれる。同じ印相をした三体の如来。おだやかな童顔でつたかづらのはう樹陰に緑の苔をつけてひっそり静まっている。

はろばろと　白杵石仏　巡り来て　かくれ地蔵に　あひたてまつる

はろばろ・はるばる。



古園石仏金剛力士像



山王山石仏阿弥陀如来像

阿弥陀如来像

み仏の 跏坐する膝を 一すじの 筋たてて這ふ 古き蔦かな

古き・枯れている。

ひそやかに 笑ます仏の 童顔に 秋立つ朝の 日の光かも

ひそやかに・人目をしのぶようす。

近よれば 崩れておはす み仏の ここにおがめば みちたる仏

ここ・やや遠くはなれたところ。

ホキ石仏

阿弥陀如来像

九品の弥陀の中、中央の一尊のみが、裳懸座式の坐像で定印を結び、他の八体は立像である。鎌倉期の作。

右肱の 欠げし仏の 袖の辺に しみいる如き こほろぎの声

ホキ石仏阿弥陀如来像



ホキ石仏

み仏の ま下に立てる 旅人の われ見給ふか 阿弥陀仏は

讃岐より 一人来りて ホキ仏 めぐり逢ひては わびしくもあるか

わびしくもあるか・慰めようもなく心細く寂しくてたまらないなあ。

### 堂ヶ迫石仏

地蔵十王像

藤原末から鎌倉初期の彫刻。地蔵は写実的ではりある面貌。十王のそれぞれ異った怪異な顔容、墨で描いた瞳子が異様に光る。

いかめしき 十王侍らす 地蔵尊 まなざしやさし 立ちておがめば

まなざし・目つき。

### 満月寺

仁王尊像

下半身を川の氾濫で深く地中に没している。

人の世の 病いやすと 鼻顎を 欠きて食ましむ 仁王よあはれ

いやす・なおす。食ましむ・はましむ。たべさせる。昔疫病の時人々が食べる。

宝篋印塔

朝霧の 立つ田の畦に 苔生して 聳え立ちたる 宝篋印塔

生して・むして。はえて。

大分高瀬石仏

藤原時代の石仏。山裾の洞を彫って作り五体ある。深沙大將はその一つ。

深沙大將像

護法神で多聞天の化身怪異の容をする。

日のささぬ 岩窟のうちに 蛇をにぎり 朱にそまりたる み仏の顔

岩窟・いわや。いわあな。

大分元町石仏

藤原後期製作の石仏。

薬師如来坐像

肩の崩え 頬の崩えしるき み仏に いたましき風の 秋は来にけり

崩え・くえ。くずれること。しるき・きわだつてはつきりしている。



大分元町石仏薬師如来坐像



大分高瀬石仏深沙大將像



田空・木喰上人の歌



円 空

一六二〇年頃岐阜に生れ、僧となり十二万体の仏を刻むことを念願し、修験の聖として修行。石槌山にも登る。独自の呪術的表現の仏像を彫る。元禄八年七月十五日弥勒寺にて入定する。

八面荒神 岐阜県星宮神社

粗木割り 八面荒神 生れ給ふ おのもおのもの 顔の輝き

粗木・あらき。手を加えていない木。生れ・あれ。うまれる。おのもおのも・おのおの。

善財童子像

手をあはす 童子やややさし 一刀の 眉とその目は 一筋のあと

童子・どうじ・子ども。やさし・優美だ。上品だ。

来迎観音像 北海道吉野教会

宝髻を 高く結ばや にこやかに 我とゑましぬ 人まちがてに

宝髻・ほうけい。髪を頭上にたばねる。結ばや・結んでさしあげたいなあ。我と・自分から。ゑましぬ・お笑いなさる。人まちがてに人をまち遠く思つて。

柿本人磨像 岐阜県松倉山普門堂

人磨の 烏帽子のとがり 顔の彫り 容姿よろしも 膝崩しつつ

人磨・万葉第一の抒情歌人。立体感と動感のあふれる像。天を仰いで詩想をねる白髯の翁。容姿・ようし。すがた。

別れつる 妹こそしのべ 人麻呂の にこやぐ頬に 女の影の顕つ

妹・いも。岩見の国に別れた妻。女・おんな。影・かけ。姿。

宇賀神像 岐阜県桂峰寺

とぐるまく 蛇身にませど にこやかに ゑます白髯 地にとどきつつ

宇賀神・うがのかみ。もと穀物の神それが福神となり弁財天と同一視する。白髯・はくせん。白いほおひげ。円空は自然木の神性を生かして蛇をきざむ。

尼僧像 岐阜県不動堂

尼僧らの あぎとをあぐる ほほえみに 見はてぬ夢の 女を思へ

尼僧ら・にそうら。らに意味なく尼のこと。あぎと・あご。見はてぬ夢の・終りまで見ずにさめてしまふ夢の中の。

よそへ見よ 花のほひに たぐふべく 尼僧の笑みの 黄昏の色

よそへ見よ・くらべて見なさい。花のほひにたぐふべく・花の美しい姿に似合うように。黄昏・たそがれ。夕がた。

十一面観音像 岐阜県白山神社

花瓶持つ 美女におはする み仏の 細きまなざし 口もとの笑み

まなざし・目つき。

木端仏 岐阜県光円寺

稜面に ただ一刀の 目鼻づけ 楽しく並ぶ 木端仏は

木端仏・こっぱほとけ。木の端彫りの仏。

不動明王像 岐阜県宝泉寺

刀痕を 照らす逆光 肌にしみ 動きをかもす 不動明王

かもす・もようする。

歡喜天像 岐阜県禅通寺

恐れ見よ この抱擁の 手と頭 稜線の影に 生の歡び

歡喜天・かんぎてん。聖天さま象頭人身。双身の抱擁像で夫婦二身和合の姿である。

子安大明神像 岐阜県子安神社

笑顔して 手抱く稚児や 育つらむ 神のみ胸の 肌に触れつつ

手抱く・たうだく・両手を組む。稚児・ちご。あかこ。

役行者像 奈良県松尾寺

大峰の 雪のあしたに 彫る仏 ただからからと 笑ひ給へり

大峰・円空歌集に「大峰や神の使も守るらん照る月清き我庵」と詠んでいる。木食し決死の荒行中に造った。

高下駄の 役行者の かんばせは 頬に輪を画く 笑ひなりけり

役行者・えんのぎょうしや。かんばせ・かほばせの音便・顔

十一面観音像 山梨県伊藤平蔵氏

すがすがし しら木にきざむ み仏の 笑ますみ顔に 手を合はしけり

毘沙門天像 岐阜県宝泉寺

荒彫りの 眉とまなこに 大き剣 宝塔ささぐ たちから燃えて

宝塔・ほうとう。美しく飾った塔。たちから・腕の力。

八大龍王像 大津市園城寺

荒彫りの 八大龍王 丈高し 彫り深き口に 思ひの燃えて

思ひ・思いと火を掛けたことば。

薬師如来阿弥陀如来両面仏像 三重県明福寺

一木に そびらをあはせ 彫る仏 生の歓び ほほえみとなる

そびら・せなか。

狛犬 岐阜県神明神社

木を割りて 木目を生かす 美しき 毛なみうづまく 狛犬二つ

狛犬・こまいぬ。昔こまの国から伝つた獣の像。

善女龍王像 岐阜県桂峰寺

線と面 鑿のながれの 跡の冴え しみじみ拝む 善女龍王

両面宿儺像 岐阜県千光寺

飛弾人の 伝ふ怪人 面二つ 墨絵の如き 刀の跡かな

面・おも。

薬師如来像 岐阜県林広院

細き目と なほもあかるき 眉引の 秀に出て匂ふ み仏の顔

眉引・まよびき。まゆびきに同じ。眉を書くこと。秀・ほ。秀に出る・表面に現れる。



円空自刻像 岐阜県 千光寺

振る鉦に たぎる力を おさへたる なにげなき面に 笑む匂かも

たぎる・わきかえる。

金剛神像 岐阜県飯山寺

たけ高く み門に立たす 金剛神 街の人々 見ほれても見よ

金剛神・大作で丸太を荒々しく彫刻している。

木 喰

享保三年甲斐の丸畑村に生れ、五十六才六十六部の廻国の聖の旅に出、四国遍路もする。七十八才即身成仏の境に達する。至るところ微笑仏を彫る。文化五年九十一才甲府教安寺の観音を彫り消息をたつ。

木喰自刻像 京都府蔭涼寺

息の緒に つぎて彫りつぐ 仏達 並べる床に その自刻像

息の緒に・いきのをに。いのちにかけて。その・木喰の。

地藏菩薩像 北海道観音寺

右手そへ 大きき宝珠を 持つ地藏 細目の笑まひ 言はまほしげに

地藏菩薩・円空が北海道を去るころの大作である。童顔の満面に笑みをたたえ、三日月の眼、丸々とした頬肉。

山の神像 山梨県山の神社

髪さかだて 黒き眉よす その怒り 面影にたつ 山の神かも

髪さかだて・女神の怒を表現する。逆立つ髪の毛と嫉妬にゆがんだ面相が印象的。八十四才作。

立木観音像 兵庫県東光寺

ひたすらに 立木に彫む 観音の たたふほほえみ 龕におさまりて

龕・がん。仏像をおさめる箱。ほほえみ・木喰の内面にある慈悲心がやさしいほおえみとなる。自然木に神霊をみとめ彫られた立木像である。

恵美須大黒天像 兵庫県烏山寅一氏

布袋 肩にうちかけ 小槌ふる ゑらぎてをどる 恵美須大黒

布袋・ぬのぶくろ。ゑらぐ・笑い興じて楽しむ。

西国三十三観音像 新潟県観音堂

入りて来て 人皆たれも もの言はず 三十三観音 居並ぶ前を

観音・子供の遊び相手とし夏の日には小川で水浴びの浮木につかわれる。

薬師三尊像 京都府蔭涼寺

三つ子かと 笑ます仏の めぐり逢ひ ほの三日月の 眉根をよせて

笑ます・微笑仏の傑作である。あかるく人間くさい微笑。

葬頭河婆像 兵庫県東光寺

天地ゆ 湧きし恐怖か 河原に ただあざ笑ふ 幾代ともなく

天地ゆ・あめつちゆ・天地から。あざ笑う・鑿で荒けずりの骨と筋肉三途川で着物を剥ぎとつて亡者をあざ笑う。ここでも微笑をわすれない。

釈迦如来像 京都府福満寺

木喰の おこなひすます 鑿の跡 匂へる笑みの 花と冴えたる

おこなひすます・邪念を払って修行をつとめる。

女意輪観音像 山口県願行寺

手を頬に 思惟し給へる 御姿 過ぎ行く時の 経るにまかせて

思惟・しい。心に真理を求める。

金毘羅大権現像 新潟県金毘羅堂

皮冑 肩に垂らして 身を鎧ふ まなこいかつく 岩座にゐます

皮冑・かわよろい。鎧ふ・よろう。鎧を着る。いかつく・いかめしくこつたい。

白鬼像 兵庫県東光寺

角を出し 大きな眼居 立つ白鬼 すぐみて岩座 踏みとどろかす

眼居・まなこゐ。まなざし。目つき。

瓢箪持つ自刻像 東京都日本民芸館

身の憂さも なさけも捨てて 彫る仏 ひさごの酒に 惚そ笑みつつ

自刻像・大きな瓢箪をかかえた平安な丹頂長髯の微笑仏、木喰は酒好きだった。惚そ笑み・ほくそえみ。

馬頭観音像 山梨県小林一郎氏

馬頭ある 衣の褰の 深き彫り すぎき仏の み顔うづめて

馬頭観音・傑作で、なかに嫁いじりする老婆の顔がのぞく。

## 跋

春の日がうらうらと輝いて、暖くなってくると、私は遍路に出かける。そして遍路の群の流れの中の一人となる。ところが面白いことに何時とは無く流れからはぐれて、一人ぼっちになってしまふ。だが、またどこかで流れの中にはいる。後ろになり先きになりして、縁の切れないのが遍路の道である。遍路の道は又信仰の河のようなものでもある。桜がふくらみそめると、四国ではその河が水嵩でも増したかのように、はっきり現われる。遍路は河に浮ぶうたかたにも似てはかないもので、各々病老死の悩みの重い荷物を背負いながらそれを自覚して寺から寺へと仏を拝んで歩く。ところが、この信仰の流れに従って流されていると、何時となく自ずから心の眼が開けて来る。人間のまごころが花でも開くようにぱっと開かれて来る。我が心こそ仏であるという信仰を戴く。宇宙の仏と我が心の仏が一体となる。私にはお参りの度に宇宙の仏を見直すことによって仏の歌が作られる。我が心の仏を見直すことによってまた仏の歌が作られる。ここで創作の喜びもかみしめる。信仰の道は何度参っても参る度に新である。そして新しい歌が出来る。

この世では人は食べなければ生きていけない。それでいて形而上のものでもある。遍路は内にあるまごころを体験し、そのまごころに絶対の信頼と尊敬と愛を捧げながら歩いている人である。俗世間でも遍路が体験したまごころで人と人同士がつきあつたら、俗世間の流れが一変するかも知れないと自負したり自笑したりしてみる。これは河を泳いでいる鮮魚の先頭の一匹が急に方向転換すると、他の全部の魚が転換するのを見て連想したので、私の迷妄であろうか。呵呵。

このように遍路していると、私は昭和四十七年春勲四等瑞宝章叙勲の栄にあずかった。

### 宮中正殿

新しき 世に生るる如 おり立ちぬ ここ正殿の ま垣の庭に

車椅子に 乗る人もあり 吾等歩を かく正殿に 運びたりけり

五月十一日 十四時二十分 天つ日の 御光仰ぐ 春秋の間に

帰途

そそり立つ 奇しき青峰 窓に見ゆ めかれもやらぬ 妙義山かも

山荘の さわぎのありし 浅間山か 妻は問ひたり 昼汽車の窓

ゆたゆたと 湯槽をこゆる 野沢温泉 ひとり湯波を 見入る楽しさ

このあした 越後ゆ来る 耳遠き 爺と湯むろを 離れずるたり

お錠前 もしふれざればと いぶかしみ 戒壇めぐる 妻の手ひきて

(善光寺)

妻の永い間の希望であった善光寺参りもした。これからはともに四国遍路をつづけるであろう。

今讃岐は野も山も花の盛りである。このささやかな歌集を各寺に奉納すると共に先祖の仏前に捧げ、教え子にも贈りたい。終りに出版に尽力下さった東陽印刷、石浜写真館その外御世話になった方々にお礼を申します。

昭和四十九年五月十一日



著者略歴

菰 淵 覺 次（こもぶちかくじ）

明治三十年（一八九八）香川県に生れる

香川県師範学校卒

文部省中等教員検定試験教育科・修身科・国語科・漢文科合格。

小学校・女子師範学校・高等女学校勤務。高等女学校長。

香川県教育委員会主事讃岐出張所副所長。高等学校長となる。

昭和四十七年春勲四等瑞宝章授与される。

【著書】「讃岐文芸読本」

【備考】

仏像写真は大知県立郷土文化会館・香川県立文化会館

愛媛県立美術館・徳島県立郷土文化会館編著四国八十八ヶ所展より会館の

許可を得、又各寺院の許可を得る

溝淵和幸氏の「香川県の仏像と神像」外田高信・田中善隆氏の「阿波の仏

画よりも許可を得て、複写する。複写は石浜写真館。他はすべて著者撮影

のものを用いた。





著 者

非売品

四国八十八ヶ所み仏の歌

昭和四十九年五月十一日 初版発行

著 者 菰 淵 覚 次 (こもぶちかくじ)

取扱所 香川県木田郡三木町平木七〇三

電 話 讃岐三木(〇八七九)八一〇七二五

〒七六一一〇七

送 料 一一〇円

振替徳島二一八三七

印刷所 株式会社 東陽印刷

香川県木田郡三木町平木

落丁・乱丁本はお取替いたします。